

1975

topics

入替戦、前評判を覆し1部残留
前年の立教2部降格もあり、翌年から7大学独立へ

男子

Data

慶早戦	● K68 - 90W ○
慶関戦	2勝
トーナメント	ベスト8 (対日本大)
リーグ戦	1部8位 (2勝12敗)、 入替戦2勝1部残留 (対拓殖)
インカレ	8位 (60 - 63法政)
全日本総合	ベスト16 (対松下電器)



'75年 日吉グランド屋外トレーニング



シュート#5関副将 (対早稲田)



千種部長祝賀会

●吉川 政宏

卒業して30年、月日の経つのは本当に早いものです。

1972(S47)年に入部し、その夏からいきなり「主務」に就任。上級生と幹事会ははじめ、数々のOBの方々、そして塾および各体育会関係の皆様にご指導していただき、何とか4年間主務を務めることが出来ました。この場をお借りして御礼申し上げます。

当時を振り返りますと、学生バスケットボール界は明治大の全盛時代。山本良一(大丸百貨店社長)、山本浩二(NKK)、小玉一人(新日鉄)、北原憲彦(NKK⇒江戸川大教授)、河内敏光(三井生命⇒新潟A⇒bjリーグコミッショナー)などスター選手が揃い、明治大は4年連続リーグ戦優勝を果たしていました。

その明治に続くのは、細島監督率いる日本大。尾鷲邦男(日鉱)、荒順一(東芝⇒日本航空Aコーチ)、小宮浩(住金)。中央大には、結城昭二(住金)、杉山代次郎(住金)。日体大では、西尾末広(NKK⇒日体大教授)。東教大には、石田秀敏(神奈川教員、国際審判)、大槻哲也(日鉱)。関西には、同志社大に沼田宏文(松下電器)。大商大には228cm、125kgの岡山恭崇(住金)。そしてライバルの早稲田大学には、青木崇(日鉱)、村上一義(住金)などが活躍していた時代です。

その頃、日本リーグのチームに外国人選手は少なく、松下電器にフリーマン選手(ハワイ大出身177cmのガード)がいた程度でした。したがって、天皇杯(オールジャパン)でも学生がベスト4に2チームぐらいいは残ることは珍しくなく、実際1975(S50)年のオールジャパンでは、北原憲彦(200cm、100kg)を擁した明治大学が優勝しました(学生としての優勝は、これ以降ありません)。このように「学生バスケットボールの人気」も、非常に高い時代を過ごしたのです。

最終学年である1975(S50)年の慶應の戦績を省みると、慶早戦敗退、春のトーナメントは日本大に負けベスト8、秋のリーグ戦は8位(2勝12敗)、インカレは8位、オールジャパンは松下電器に1回戦敗退という結果でした。

特に記憶に残っているのは、リーグ戦で最下位8位となった慶應と拓殖大(2部1位)との入替戦です。当時拓殖大は、森下監督の下、後にモントリオールオリンピックに出場する浜口秀樹(196cm、拓大⇒新日鉄)を中心に急速に力をつけてきた好チーム。2年前、1973年のインカレでは、当時「不败」と言われた明治大をベスト8決定戦で破るなど、侮れない相手でした。

入替戦前の予想としては、前年1部最下位の立教大が昇り調子の三神雅明(松下電器)、馬場敏春(三井生命)などスター選手が揃った法政大に敗れて2部落ちしたこともあり、同じく昇り調子の拓殖大が慶應に楽勝するのではと、他校の関係者は「慶應2部落ち」を予想していました。

第1戦、大方の予想通り、後半半ばまで拓殖大がリードするが、慶應のゴールをきっかけに慶應がオールコートディフェンスを仕掛ける。作戦が見事に的中して一気に逆転。そのまま73-60と13点差をつけて快勝しました。

第2戦、初戦を落とした拓殖大でしたが2戦目も元気一杯。試合は開始直後から試合終了まで両チームとも譲らず、40分間競り合いが続く。残り1分を切って62-62の同点から慶應の攻撃。慶應奥山君の決勝シュートが見事に決まり、残り時間を守りきって、64-62と辛くも連勝し1部残留を決めました。

入替戦経験後 チームは発奮し、インカレでは関西1位の関西学院大を破ってベスト8進出。準々決勝で大阪商大と互角に戦ったが、2点差で敗れベスト4進出ならず、結果は8位となりました。しかし、このインカレでは「弱い慶應」というイメージを払拭し、最後は意地を見せる事ができました。

尚、この入替戦が契機となったのか、翌1976(S51)年には「関東大学リーグ」から「7大学」(早稲田大、東京大、中央大、明治大、日本大、慶應大、立教大)が分離独立しました。その意味では、意義深いというかエポックメイキングな入替戦出場となったと言えます。

それにしても、在籍していた4年間の中でもこの「入替戦」が最も記憶に

残り、印象深い試合であったことは言うまでもありません。卒業後も当時の仲間達と会って話すと、必ず話題は「入替戦」の事に及びます。

7大学 リーグの後、塾も再編リーグの中で入れ替え戦時代の再開で、現役・諸OBの努力も及ばず、1部から2部、2部から3部へと降格し三色旗が泣いた時代がありました。

現在の塾バスケットがあるのも、この時代を現役と一緒にOB各位が熱い情熱を持って支え、戦ってきたのは言うまでもありません。明るさと前向きな姿勢をバネに3部より2部昇格を目標に、2部昇格後は2部優勝・1部昇格へとイバラの道を経て現在に至ります。降格した時の現役の落胆と辛苦は当事者しか判らないこととはいえ、熱いスピリットを後輩に残し塾バスケットボールスピリットを絶やすことなく伝えてくれたことに、今思えますと感謝の気持ちで一杯です。それなくしては、今がないのですから。

現役のバスケットボールコートでの雄姿を見て、塾を志すバスケットボールを愛する高校生・中学生がおり、その現役を支援する熱いスピリットを持ったOB諸氏のバスケットボール三田会があるからこそ、体育会バスケットボール部としてバスケットボール三田会の発展があるのだと思います。塾の発展は、現役・諸OBの熱いスピリットにより導かれていると思います。現役そして卒業されOBになられた皆様には、是非とも塾の熱いスピリットを後輩に伝えて欲しいと願っており、明日の栄光のために《共》に日々努力し、《栄光への道》を歩むことを祈念いたします。

30年以上経っても付き合える先輩、後輩、仲間達を持てたことに感謝するとともに、現役の諸君にも、それぞれの「慶應義塾体育会バスケットボール部」での「素晴らしい体験」と「素晴らしい仲間と出会う」チャンスに恵まれることを切に願ってやみません。



第43回慶開定期戦
左から 関口、川内、梅川、関、吉川、霜鳥



'75年夏合宿(裾野)

75年メンバー

部	長	千種 義人
監	督	濱中 貞一
コ	一	チ 三輪 勝久
主	将	梅川 弘巳(新潟)
主	務	吉川 政宏(慶應義塾)
選	手	関 雅之(慶應義塾)、関口 龍次(慶應志木)、川内 孝(会津)、鈴木和見(豊橋東)
学生スタッフ		霜鳥 悦功(慶應義塾)、堀内 秀紀(慶應義塾)、松村 英明(慶應義塾)

女子

Data

慶早戦	○ K96 - 63W ●
トーナメント	6位
リーグ戦	2部2位 (8勝2敗)
インカレ	ベスト16 (対安城)



夏合宿

中崎 (仲小路) 彩乃

創部75周年おめでとうございます。

早いもので今年私達は卒業30周年、連合三田会の幹事年に当たっています。大学卒業後、良き娘、良き妻、良き母になりきれないうちに、あっという間に長い年月が過ぎてしまいました。

三田会の仕事のお手伝いをしながら、久しぶりに同期の仲間たちと集い、学生時代を思い出しております。忘れかけていた古い心のアルバムが開き、輝いていたあの日が蘇ってきています。

私達は「2部優勝して1部昇格」の目標を4年間掲げ続け、ついに夢かなわず卒業しました。翌年、後輩たちがその悲願を果たしてくれました。私達はもちろん、その上の先輩方が挑戦しつづけた夢をかなえてくれたことに感謝しつつ、「私達も大きな飛躍のための踏み台になれたかな?」と自負しております。

今バスケットボール生活を振り返ると、「試合に負けて悔しかったこと」や「苦しくて厳しい練習の事」などの辛い思

い出は薄れ、楽しかった思い出ばかりが蘇ってきます。前後7学年のチームメートとの毎日の出来事が、いきいきと目に浮かんできます。みんなの笑い声や楽しいおしゃべりが、笑顔と一緒に聞こえてきます。

そんな4年間の中から、印象に残っている事を少しお話します。まずは暑くて一番苦しい夏合宿からひとつ・・・。

2年の合宿は、静岡県の手頭という所でした。静岡から素晴らしい景色を見ながら大井川鉄道に揺られ、すっかりローカル旅行気分になって着いたのは、人気のない静かな山奥の村でした。体育館と旅館との往復以外、何も無い毎日! やっと見つけたお店で買ったコーヒー味のカキ氷が、私達の間で大流行して売り切れになるほどでした。

旅館の部屋のすぐ前に線路があったのですが、何故か電車がまったく通らないというのんびり静かな毎日でした。カーテンも窓も開けっ放しで昼寝をしていたある日曜日、突然「しゅっしゅっぽっぽ、しゅっしゅっぽっぽ・・・」と、蒸気機関車がお客さんを乗せて私達の目の前をゆっくり通過していきます。びっくりして飛び起きた私達に、乗客がニコニコ笑顔で手を振っていきました。なんと私達の部屋の前の線路は、休日のみ観光のために走る蒸気機関車用だったのです。

次にインカレから・・・。

1年の関西遠征と4年の名古屋遠征が大切な思い出です。

遠征先に在住の先輩方が開いてくださったレセプションに参加して、体育会の縦横のつながりの強さを身近に感じ、歴史と伝統のあるバスケットボール部の一員である誇りと感謝の気持ちを深めました。

試合は、日女体・安城という巨木のような体育大チームにどちらも負けしましたが、恐がらずに思い切りぶつかったという満足感を得たことを覚えています。

30年の間には故千種部長先生はじめ、故土井監督・故山角監督、お世話になった先輩方、そして明るく可愛かった後輩の故湯川さんなど、多くの方がもう夢の中でしかお会いできなくなってしまいました。さびしい限りですが、みなさまはバスケットボール部の歴史と伝統の中にずっと生き続けていらっしゃるかと信じております。バスケットボール部に所属していたおかげで素晴らしい学生時代を送ることができたことに感謝の心を込め、75周年をお祝い致します。そして、バスケットボール部の益々の発展と後輩たちの活躍を祈念いたします。



'75年メンバー
 (後列左から) #7 力石、#10 六崎、#12 片岡、#6 尾関、#13 大熊、#14 鈴木、#9 湯川
 (前列) #4 仲小路、#5 渡辺、#6 佐野、#15 三ツ山、#8 山村



帝塚山学院大定期戦



第32回早慶バスケットボール定期戦



送別会

75年メンバー

部長 千種 義人
 監督 山口 建
 主将 中崎 (仲小路) 彩乃 (慶應義塾女子)
 選手 丸山 (渡辺) 久美子 (雙葉)

1975年の出来事

- ・ロックバンド、キャロル解散 (4/13)
- ・サイゴン陥落によりベトナム戦争終結 (4/30)
- ・エリザベス英女王来日 (5/7)
- ・田部井淳子さんが女性として世界初のエベレスト登頂に成功 (5/16)
- ・沖縄国際海洋博覧会開幕 (7/18~)
- ・第1回主要国首脳会議 (サミット)、フランス・ランブイエで開催 (11/15)
- ・3億円事件の刑事時効成立 (12/10)

主な大会

- | 大会名 | 優勝チーム |
|-------------------|-------|
| ・第27回インカレ (男子) | 明治大 |
| ・第22回インカレ (女子) | 日体大 |
| ・第51回ALL JAPAN | 松下電器 |
| ・第8回アジア選手権 (バンコク) | 中国 |

1976

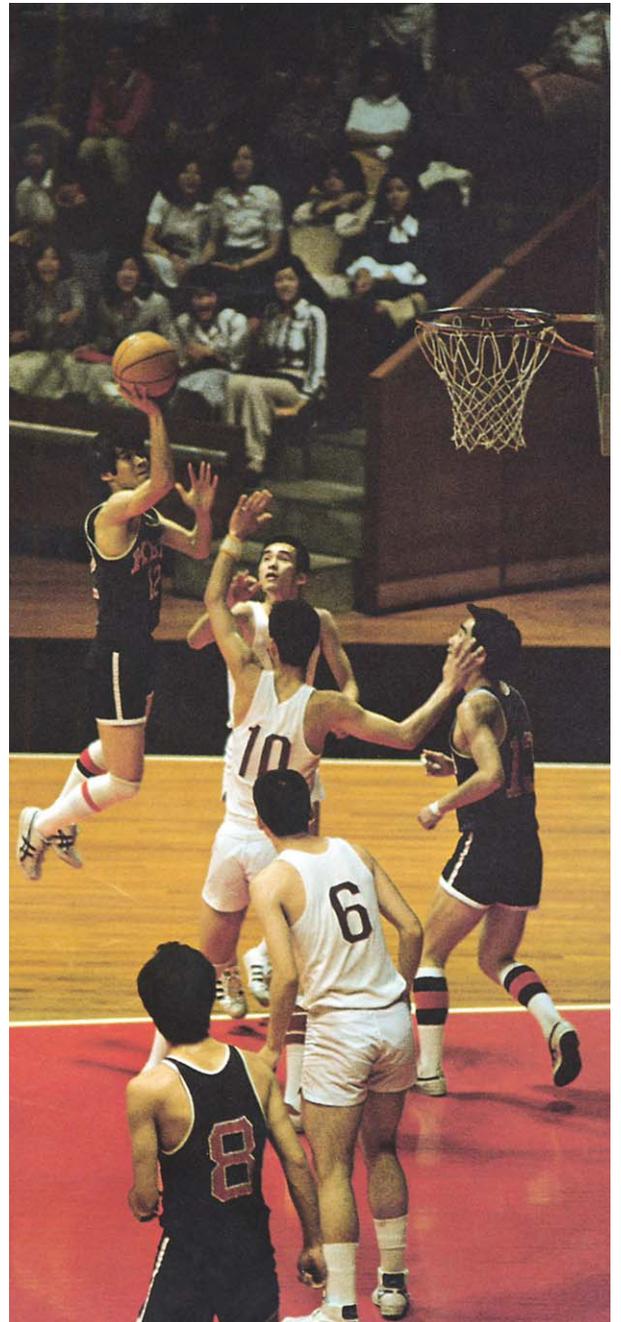
topics

東京7大学バスケットボール連盟発足
女子：2部優勝・1部昇格

男子

Data

慶早戦	● K66 - 68W ○
慶関戦	2勝
トーナメント	東京7大学3位
リーグ戦	東京7大学 3位 (7勝5敗)
インカレ	5位 (73 - 69 対同志社)
全日本総合	ベスト16 (対新日鉄)



●入学時の学園紛争と東京7大学発足 坂根 茂

塾体育会関係者の皆様、創部75周年おめでとうございます。

私は1976（昭和51）年4月～1977（同52）年3月まで主務を務めさせていただきました。主将の宮田君が海外赴任で執筆できず、代役として私が寄稿させていただきます。

1977年3月に卒業したメンバーは、主将の宮田隆史君（会津高）・黒澤健二君（上田高）・高田俊治君（国泰寺高）と学生トレーナーの高瀬博道君（宇都宮高）・7大学学連委員長の奥村芳弘君（膳所高）・ナショナルチーム帯同の小武久隆君（志木高）です。そして1973（昭和48）年に入部した宮幸朗君（塾高）・外山雅一君（武蔵高）・萩原伸浩君（塾高）とともに活動していました。

私達が入学した1973年当時は、学園紛争の末期で塾もその影響を受けておりました。入学前の日吉記念館で行われた学生集会に動員され緊迫した集会に参加し、流血もあり緊急避難。翌日の練習で、血痕が残っていたことを思い出しました。また、その影響で我々新生は前期の授業がなくなり、後期の試験一発で進級が決まるハイリスクな時代でした。

練習といえば上級生の授業時間に合わせ、3・4年生（三田組）、1・2年生（日吉組）と2部練習になっていましたが、授業がない1年生は両方に参加しており練習量に恵まれていました。基礎体力が中心で、蝮谷、銀杏並木ダッシュ、ロータリータイムトライアル、3メン10往復、5メン10往復などが思い出されます。鹿子木コーチ、土田監督のとても長いミーティングも印象的でした（当時100kg近い体重が83kgになっていました）。

私は2年からスタッフに入り、3年から副務として塾の体育会本部、学連の方々との連携が多くなり、チームメイトと行動をともにすることが少なくなっていました。

4年になると東京7大学連盟（慶應、早稲田、立教、明治、東京、日大、中央）が発足し、新しい組織で活動がはじまりました。分裂当時、学連の学生達も討議を重ね、断腸の思いでこの決定を受け入れ、互いの健闘を誓い別れていきました。奇遇ですが塾高の本間部長が、当時の関東学生連盟の学連委員長でした。インカレでは塾は、東京7大学代表として日大・明治に続いて3位で出場を果たしました。インカレでは明治に負け、決勝リーグへ進められず、5位に終わりました。卒業して30年、塾のあまり貢献していない学年ですが、これからはいろいろな形で部の発展に寄与していきたいと思っています。



76年メンバー

部	長	千種 義人
監	督	濱中 貞一
コ	一	三輪 勝久
主	将	宮田 隆史（会津）
主	務	坂根 茂（慶應義塾）
選	手	黒澤 健二（上田）、高田 俊治（国泰寺）
学生スタッフ		高瀬 博道（宇都宮）、小武 久隆（慶應志木）、奥村 芳弘（膳所）

女子

Data

慶早戦	○ K69 - 60W ●
トーナメント	6位 (対東京学芸)
リーグ戦	2部優勝 (9勝1敗) 入替戦2勝 1部昇格 (対杉野女子)
インカレ	1回戦 (対大阪女子短期)



夏合宿

創部75周年によせて 石田 (カ石) 昌子

大学男子は、2006(平成18)年度のインカレで決勝戦まで進み、僅かの差で優勝はかないませんでした。みごとな準優勝を果たしました。現役の皆さん、お疲れ様でした。結果が優勝でなかったことは、残念なことではありますが、大学4年間を優勝に達するまでの力を持ったチームで過ごせるというのは本当に素晴らしいことだと思います。おめでとう、よかったですね。心からお祝い申し上げます。

現在の男子チームと比べたら女子のレベルは違いすぎて申し訳ないのですが、私たちは幸運にも優勝を経験できました。

大学女子が関東リーグ2部で優勝し、1部に昇格したことは50周年の記念誌に書かせていただきました。優勝するには1人の力では到底無理なことで、そこにはたくさんの人の力が必要です。私たちの優勝も先輩方の応援、厳しい指導、そして私たち自身も一生懸命練習したからこそ達成できたものだったと思います。

でも昨年、私たちは一緒に苦しい練習を乗り越えてきた仲間を失ってしまいました。湯川亮子さん、ゆうちゃんの逝去です。ゆうちゃんは、身長は170センチくらいでした。今でこそバスケットをやる女の子には珍しくありませんが、当時はかなり大きい女の子でした。勉強も熱心で優秀でした。とても穏やかで、私などはすぐ熱くなってしまうのですが、そんな私をいつも抑えてくれるような人でした。何となくほんわかとした雰囲気です。周囲を和ませてくれていたような気がしま

す。手足が長かったせいか、プレーをしている時の動きがダンスをしているように見えて、入部したばかりの頃はそれがとても面白かったのを覚えています。

ゆうちゃんは、きつい練習をするのを一度もいやだとかやめたいと言ったことはありませんでした。どのコーチもかなりきついことを要求したのですが、ゆうちゃんは黙々と練習をしていました。卒業してからも、後輩たちのために熱心に練習場に足を運んでくれました。

彼女の葬儀に、たくさんの後輩が参列してくれたことは、同期としてとても嬉しいことでした。慶應大学女子バスケットボール部のことを一番考えていたのは、間違いなくゆうちゃんでした。神様が「優しい人から自分のもとへお呼びになる」というのは、本当なんですね。残された私たちには残酷なことですが…。ゆうちゃんに、優勝するところを見せてあげたかったです。

今年、大学女子は2・3部の入替戦に出場しましたが、あと一歩のところまで昇格はできませんでした。優勝は、何年もの積み重ねがあってできるものだと思います。現役の選手の皆さんは、「どうして勝てないんだろう」と悩むことが多いと思いますが、私たち卒業生は、「きっといつか誰かが、やってくれる」と信じて、応援し続けたいと思います。

そして、天国のゆうちゃんに「勝ったよ!」と報告できる日を待っています。



集合写真

76年メンバー

- 部長 千種 義人
 監督 山口 建
 コーチ 佐々木 三男
 主将 石田(力石) 昌子(横浜雙葉)
 主務 松村(佐野) 陽子(慶應義塾女子)
 選手 山村しのぶ(横浜翠嵐)、湯川 亮子(新宿)、守岡(六崎)
 三枝子(慶應義塾女子)、青木(尾関) 潤子(田園調布雙葉)



'76年 慶早戦 #6湯川

1976年の出来事

- ・鹿児島市で国内初の五つ子誕生 (1/31)
- ・インスブルック冬期オリンピック開催 (2/4~)
- ・アメリカでロッキード事件が発覚 (2/6)
- ・モントリオールオリンピック開催 (7/17~)
- ・ロッキード事件で田中角栄前首相逮捕 (7/27)
- ・中国共産党の毛沢東主席が死去 (9/9)
- ・山形県酒田市で大火発生(酒田大火)、22.5haを焼き尽くす (10/29)

主な大会

- | 大会名 | 優勝チーム |
|----------------------|---------|
| ・第28回インカレ(男子) | 明治大 |
| ・第23回インカレ(女子) | 樟蔭東女子短大 |
| ・第52回ALL JAPAN | 日本鋼管 |
| ・第21回オリンピック(モントリオール) | アメリカ |

1977

topics

第29回インカレ4位（8年ぶり）

リーグ戦、東京・関東合併（13チーム）開催

男子

Data

慶早戦	○ K89 - 61W ●
慶関戦	2勝
トーナメント	東京7大学 3位
リーグ戦	東京関東合併13大学 (6勝6敗) 6位
インカレ	4位（決勝リーグ）
全日本総合	ベスト16（対新日鉄）



'75年 慶早戦

見守ってくれた友人そして父 宮幸 朗

1969（昭和44）年2月、東京には珍しく大雪が降った。当時、新宿区立大久保中学校に越境通学をしていたバスケットボール部のキャプテンMは、担任の先生から「帰りの電車が止まるぞ、早く帰った方が良い…」と言われた。

その日は特別な日だった。中学1年から一緒にバスケットボール部に入った友人Tの告別式だった。彼は、少々生意気だったが良い奴だった。石油ストーブの火が服に燃え移り全身にやけどして、そして亡くなった。中学2年、14歳の命だった。

Mは、珍しく先生の言うことを聞いた。帰りの電車で「お前の分までバスケットを頑張るよ」と、Tに誓った。そして、都内の中学生ならば誰もが憧れる「代々木第二体育館」を目指して練習に励み、中学最後の夏の大会で3位決定戦ではあったが、代々木で勝利した。

Mは、翌1970（昭和45）年4月慶應義塾高等学校に入学し、バスケットボール部に入部した。驚くことに、その年に関東大会優勝、そしてインターハイ決勝へと進んだ。決勝の相手は能代工業、何と「神様・仏様・桑田様」が前半で5ファールで退場した。「お前らまだ終わってないぞ、これからだぞー!」と三宅恵介コーチ（

S46卒）が、ハーフタイムに怒鳴った。Mは、後半のスターティングで出場。シュートを入れて戻ろうとすると既にボールはハーフラインを越えており、能代工業の初優勝をアシストしてしまった。

Mは相変わらず生意気でケンカ早く、そしてわがままだった。しかし、2年生になってから少し自覚が出てきた。それまでやらなかった、練習後のシューティング100本を毎日やった。Mたちの代になり、関東大会で選抜優勝校に勝ったが、インターハイでは3回戦で負けた。「第4シードは負ける」と言うジンクスを打ち破れなかった。

慶應義塾大学では、小学校からの先輩でもある戸崎洋キャプテン（現監督）が、5年目を迎えて待機してくれていた。しかし、練習は厳しく、またスペシャルとイジメなど面白くなかった。「もう辞めようか」と思ったことが、幾度かあった。しかし、その時は少し我慢できるようになっていたのか、Tへの誓いを思い出したのか、少年から青年に少々成長したMがそこにいた。

土田恒生監督（現三田会会長）の練習後の特訓は大変だった。息子さんを連れて来られる時は、「無い」と思ったのに甘かった。「息子さんも大変だったろうに」と思った。

2年生になったMは、慶早戦でスターティングメンバーに抜擢された。試合での緊張感はなく、勝手なことをやっていた様な気がする。

その時は、濱中貞一監督だった。（土田監督の転勤を羽田で見送ったときは、何故だか全員で「バンザイ三唱」をした）

3年目は大変だった。何と、入れ替え戦に出場したのだ。しかしその年、5年目の梅川キャプテン・関バイスキャプテンがものすごい迫力と執念で、予想を裏切り強敵・拓殖大学を連破し1部残留を果たした。

4年目はシーズンの始まりでつまづいた。新4年生だけでのキャプテン決めてMが推薦された。決定は幹事会と聞いていたが、あるOBが反対したようで学生の意見が通らなかった。Mは態度が悪く・生意気だと思われた。「こんな事あるのか?」ばかやろう、ふざけるな。誰か知らないがいつか見返してやる」と心に誓った。反対したOBは、先見の明があったようだ。Mはそのあと留年して、「3年生のキャプテン」は誕生しなかった。また、Mの心に大きな火をつけた。インカレでは惜しくも5位だったが、翌年への可能性を残した年だった。

戸崎キャプテン、藤田バイスキャプテンなどの、「5年目無くして慶應バスケットボール部は語れない」。後にMは5年目で、中学以来のキャプテンとなるのである。

その年の期末の試験が終わったときに、Mは重大なことに気づいた。それは履修をミスしていたようで、どうしても単位が足りない。通知は案の定、「不合格」と赤い判が押しあつた。「5年目は、自分で何とかしろ」と、今は亡き父が言った。バイトをする時間もないのに困った。しかし、余りにしなかったのか、落第生を集めて「一落会」を結成した。外山、藤尾、阿部、Jがメンバーだった。気楽なモノだ。

4年目から昼のバイトを始めた、友人に頼んでランチの配膳・皿洗い・便所掃除などしたが、たいした収入にはならなかった。また、授業と一緒に出勤が余りにいい加減なので、回りのおばさんからは嫌がられたようだ。その年は、お年玉も使わない様にした。

5年目は、誰の文句も無くキャプテンに選出された。「学費は出世払いでお願い

します!」父は笑って「キャプテンになれば後輩におごることもあるだろう、小遣いを上げてやろう」と言った。涙が出るほど嬉しかった。相変わらずいい加減なバイトは続けていた。

(結局学費は自分で払うことは無く、既に出世払いの時効も過ぎている。)

慶應義塾大学での5年目、チームは短期決戦には強かったが、長期戦がダメだった。メンバーが我慢強くないのか、キャプテンが飽きっぽなどがその理由だろう。

慶早戦は、7年ぶりに大勝利した。トーナメント(7大学)は3位(キャプテンが優秀選手賞受賞したが、大学では初めてだった)、リーグ戦では強い相手に負け、弱いチームには勝って6位だった。しかし、インカレでは8年ぶりにベスト4に進んだ。

1 回戦は近畿大学、関東では他大学の4年生がMのことを「Mさん」と敬語で言うのに、関西の学生はそれを知らなかった。試合終了後、武山栄雄総監督に「キャプテン前にお出。やる気有るのか?」と怒鳴られた。最悪の日だった。

2 回戦は早稲田、前半15点差のアヘッド、「これで終わり」と開き直って後半大逆転してベスト8に残る。ベスト4決めの相手は、日体大だった。1点差で勝利して、8年ぶりにベスト4となった。

決勝 リーグは大方の予想通り、惜しくも中央大に延長で負けた。しかし、優勝候補の法政大に濱中監督会心の策で、大勝利を取めた。な、なんと、日大に勝つと18年ぶりの優勝という期待が膨らんだ。

しかし、テレビ放映の都合で日程がきつくなり、最終試合の後は朝一番の試合で、皆疲れていた。後半は、誰も足が動かなかった。キャプテンとして何も出来なかったが、学生最後の大会を最終日まで出来た満足感が皆に溢れていた。Jは2年生ながら、外山・白井・藤尾と共にスターティングで大活躍してくれた。

外山がベスト5に選ばれた。25歳にあと3ヶ月の時だった。彼は優秀選手というより最年長選手だったと今でも思っている。

濱中監督が自慢げに「選手3流・身長3流・監督1流」と言っていた。私が付け加えるとすれば、「態度も1流」と言うことだ。

時が経ち社会人となったMは、結婚して長男が生まれた。バスケットボールは実業団でやっていたが、慶應からコーチのお呼びがかかった。武山総監督がおっしゃっていた「恩返し」の時が来たのだ。コーチとしての初めての慶早戦当日、1歳の息子が40度、家内も39度を超える高熱だった。「行ってくるよ…」、しかし返事は無かった。何と、1部の早稲田に3部の慶應が1点差で勝利した。我が家には、帰るに帰れなくなった。

翌1986(昭和61)年10月26日、Jが29歳で亡くなった。何とも言えない悲しさが忘れられない。

そして、「もう少しバスケット頑張るよ」とJに誓った。

告別式でのお父様のご挨拶が忘れられない。「Jは、何時も勝つ事しか考えていない強気の男でした…」、大事な息子を亡くしたとは思えない気丈な態度だった。かえってお父様の悲しさを感じた…。

髪に白いものが増え、近いものが見にくくなった頃に監督の指名を受けた。現役・コーチ・監督を全て経験する事が出来たが、何か寂しいものを感じていた。

現役を30歳過ぎまで19年間やり、コーチは6年間、2年間だが監督にもなった。「TとJも、もういいだろう」そして「恩返し」も終わった。中学1年で始めて通算27年間、もう二度とベンチに座ることはないだろう。

そのとたんに、戸崎監督・佐々木三男ヘッドコーチの下でリーグ戦・インカレで45年ぶりの優勝。やはり指導者が大事だ。リーグ戦の祝勝会で挨拶の指名を頂いた。「私達が夢にも思っていなかった事を現実にして頂き感謝しています。そして、感謝しています…」

Tというのは故江川孝、そしてJは故戸崎純のことである。

二人はバスケットボール人生の仲間であり、そして、恩人でもあった。

この二人がいなければ、私のバスケットボール人生はどうなっていたのだろうか。二人がいたからこそここまで来られたし、二人のお陰で多くの仲間も出来た。

しかし、コーチ&監督の時代に大事な試合での勝利を二人にお願いしても勝てなかった。「甘えるな」と言う事だね。孝は33回忌、純は17回忌が終わった。

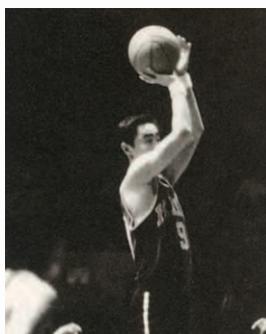
父は今年13回忌。生前に父から言われた「お前には沢山の仲間がいて羨ましいよ…」という言葉が、懐かしく思い出される。

2005(平成17)年1月14日、武山元総監督が93歳で逝去された。合掌。

奇しくも、その日は元キャプテン・元コーチ・元監督であったMこと私、宮幸朗の50歳の誕生日だった。



インカレ法政に勝利



#9奥山



#6白井



'77年 夏合宿沼津

77年メンバー

部	長	堀江 湛
総	監督	武山 栄雄
監	督	濱中 貞一
コ	ー	チ 三輪 勝久
A	コ	ー 小川 光蔵
主	将	宮幸 朗(慶應義塾)
主	務	渡辺 伸祐(慶應義塾志木)
選	手	奥山 幹雄(慶應義塾)、白井 庄史(慶應義塾)、 浅見 勇(慶應義塾志木)、三枝 吉昭(鎌倉)、 松田 康弘(三国ヶ丘)、小山 秀人(膳所)、 外山 雅一(武蔵)
学生スタッフ		岩井 博(慶應義塾)

女子

Data

慶早戦	○ K83 - 50W ●
トーナメント	8位 (対玉川)
リーグ戦	1部6位 入替戦2敗 (対杉野女子)
	2部降格
インカレ	ベスト16 (対東京女子体育)



'77年 夏合宿

つかの間の1部リーグ 藤尾(片岡)由美子

久しぶりに50年史を開いてみると、女子の小史にこんな文章があった。「それもつかの間、52年には2部に落ちた」と。

前年、1部昇格を果たした次の瞬間から、私達には1部での戦いが待っていた。

部員は4年生が田中、大熊と私。3年生は、三ツ山・中村(元美)、2年生が、中林・鈴木・藤波・細田・島田・森山、1年生が、中村(淑子)・稲葉という計13名だった。就任2年目となるコーチの佐々木先生は、ごく普通のプレイヤーの私達に様々なトレーニング法を考えてくださった。特に11名という少ない人数での練習メニューには、大変ご苦労なさったと思う。OB・OG・現役男子の方々にいつも助けて頂いた。山口監督はシーズン始め、「結果はあとからついて来る、過程を大切にしなさい。」とおっしゃったが、今でこそわかる大変むずかしい事だった。館山の春合宿、体育館にはラインがなく、初日はテープ貼りだった。なま卵のキャッチボール、砂浜のダッシュ、馬跳び。「明日は、どんなメニューが待っているのだろう」というような日々だった。

日吉の夏合宿、少したくましくなった私達は、とにかく走った。スリーメン10往復、まむし谷、ロータリー、並木、グラウンドと、日吉の中の道はすべて走った。

そして始まったリーグ戦初戦の日体大戦は、109対35と惨敗した。強いチームは、最後まで全く手を抜かない。対戦校はすべて体育大学で、練習をしてから会場に来るため、いきなりオールコートプレスである。強く速い動きに必死でついていったが、応援団の声が鳴り響くコートの中で、私達は、今日の目標を忘れかけてしまいそうになる。

厳しい戦いの連続だったが、唯一の勝利があった。東京女子体育大学に52対50でせり勝ったのだ。つらい練習がしっかり私達の中に生きていたと、チームの皆が感じたと思う。前年対戦した敵チームの目標としていた選手が、コーチとしてベンチに入っていた。挨拶で目が合った瞬間を今でも覚えているが、勝利の喜びは驚くほど静かなものだった。

「つかの間」の1部リーグだったが、先輩方・監督・コーチのお陰で私達は貴重な体験ができた。あれから30年、うれし涙、くやし涙を流した仲間達とは、今でも夜を徹して熱く語り合う。マリ、クー、そして共に戦ったこの仲間達こそが大きな財産だ。当時の山口監督、佐々木先生が現在そろって男女の指揮をとられている。この事は私達にとって大変感慨深く、まさに塾の体育会の伝統を実感している。



'77年 慶早戦 #9 大熊

77年メンバー

部長 堀江 湛

監督 山口 建

コーチ 佐々木 三男

主将 藤尾(片岡)由美子(横浜雙葉)

選手 大熊 百合子(慶應義塾女子)、田中(鈴木)万理(立教女学院)

1977年の出来事

- ・東京で青酸コーラ無差別殺人事件発生 (1/4)
- ・大学入試センターが発足 (5/2)
- ・ニューヨークで落雷が原因の大停電が起こる (7/13)
- ・北海道・有珠山大爆発 (8/7)
- ・巨人の王貞治選手がホームラン世界新記録の756号を達成 (9/3)
- ・日航機ハイジャック事件 (9/28)

主な大会

- | 大会名 | 優勝チーム |
|----------------------|-------|
| ・第29回インカレ(男子) | 法政大 |
| ・第24回インカレ(女子) | 筑波大 |
| ・第53回ALL JAPAN | 住友金属 |
| ・第9回ユニバーシアード(ソフィア) | アメリカ |
| ・第9回アジア選手権(クアラルンプール) | 中国 |

1978

topics

東京7大学バスケットボール連盟に、拓殖大・一橋大・法政大
 が加わり「東京学生バスケットボール連盟」に改称
 第1回関東男子学生選手権開催（東京学生・関東合同開催）
 第1回東京学生リーグ（Big10）開催
 第1回「季相佰杯」争奪日韓学生バスケットボール大会（東京）
 開催

男子

Data

慶早戦	● K72 - 82W ○
慶関戦	2勝
トーナメント	ベスト8（対中央）
リーグ戦	東京10大学 6位（10勝8敗） インカレ予選4位（対日本大）
インカレ	ベスト16（70 - 71中京）



藤尾 渡辺 阿部 岩井 栗崎 萩原



#4藤尾主将



#4藤尾 #6萩原 #8伊藤 #10戸崎 #12庄司

●記念館って？ 渡辺 伸祐

日吉の高台に位置する記念館。銀杏並木を抜け、丘の一番高い所にその威容を誇っている。

雨の日も、風の強い日も、変わることなく鎮座ましまして、我々を包んでくれた。

青春の一時代 この神々しい建立物の中で、バスケットボール部は過ごしてきたものだ。

新しいシーズンが胎動し始める春、この傑物は外気温よりひんやり感じるがあった。

「あまり飛ばすなよ。シーズンは長いぞ」。

そして梅雨から夏にかけ、湿気を多く含んだ空気が充満する。練習が白熱すると、水蒸気が空気の流れを覆い霧状となってあらわれる。

「どンドン体をつくれ。強くなれ」と。

秋、乾燥した冷気が肌を刺す。この冷気はピリリと肌を覆い、その緊張を引き締めてくれた。

それは 勇躍試合に臨む若者たちの緊張感を、優しくほぐしてくれたのかもしれない。

日が短くなるこのころ、練習終了が真夜中のような錯覚におちいる。

それは、この傑物が時間の感覚を麻痺させたのだ。

「何も考えるな。バスケットに集中しろ。試合に勝て。」と。

鎌倉にある大仏様。実はその胎内に入る事ができた。

今思うと、「これはまるで記念館に入る時、同じような感覚」を持っていたかもしれない。

目が大きく小柄でがっちりした西郷さんに似た方が居た。毎日管理をしてくださった方であったと思う。

入場する時その方に挨拶をし、脇の階段を下りて暗い地下道を通る。

そして、その通路からあの広い空間に出た瞬間、何か特別の畏敬の念を持ったものであった。

神聖な空気、日本古来からある神々しいもの、これがこの記念館にはあった。

そして、この空気をいったい何人の若者が触れたのだろうか。それを思うと、ここで過ごした時間が、自然と我々の体内に宿り生きる糧になってはいないだろうか。

この場所で流した汗や涙は、その後の人生に少なからず大きな影響を与えたに違いない。

この記念館も建て替えの時期と聞く。

過日リーグ戦観戦で訪れた。照明も暗く あちこちに年を重ねた姿があった。

多くの若者を包み育てた偉丈夫も、天に召されるのだ。

そしてきっとまた、新たな神が部を包んでくれる。

彼もまた、永遠に日吉の丘で醸成された熱い熱い我々が若き魂を、吹き込んでくれることでしょう。

我々1979 (S54) 年卒は、部員も少なく 藤尾主将を中心に活動した。

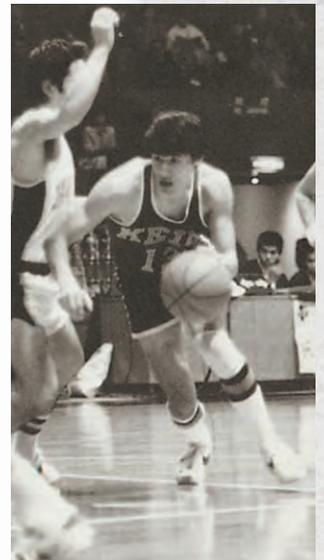
たいした戦績も残せなかったし、インカレも2回戦で中京大に負けた。

試合後小川コーチから新宿で寿司をごちそうになった。

そして「もうバスケットは終わりだ」と、感傷的な気分になった事を今思い返している。



#8栗崎



#5宮本副将

78年メンバー

部	長	新田 敏	
総 監	督	武山 栄雄	
監	督	濱中 貞一	
コ	ー	チ 三輪 勝久	
A・	コ	ー	チ 小川 光蔵
主	将	藤尾 良樹 (横須賀)	
主	務	渡辺 伸祐 (慶應義塾志木)	
選	手	萩原 伸浩 (慶應義塾)、岩井 博 (慶應義塾)、宮本 浩一 (上田)、栗崎 信寛 (慶應義塾志木)	
学生スタッフ	阿部	章三 (森村学園)	

女子

Data

慶早戦	○ K66 - 47W ●
トーナメント	7位 (対青山学院)
リーグ戦	2部3位 (5勝3敗)
インカレ	1回戦 (対中京)



三ツ山 中村

齊藤 (三ツ山) 紀子

バスケットボール部創部75周年おめでとうございます。近年の大学男子のすばらしい活躍、大学女子も2部昇格まであと一步の頑張り、また新しい歴史のページが加えられてきました。これは、「慶應バスケットボール」を諸先輩たちから現役の皆さんが、しっかり受け継いでくれていることにちがひありません。

卒業後、私達は結婚や子育てなどですっかりバスケットボール部から離れていましたが、数年前からOG会・三田会をお手伝いして、久しぶりに現役の学生たちと接する機会ができました。自分の子供と同じ年代の元気溢れるプレイを見ると、ついこの間と思っていたことが、20数年前のことだと時の経つ早さを実感します。

一時はチームの存続も心配された大学女子は、今や史上初めてともいえる大所帯となりました。私達が現役の時、毎

年のように春になると部員集めが大変でした。私の学年は、モトミ(平岡(中村)元美)と2人でした。モトミが入部してくれたのは、1年の夏の終わり頃だったと思います。それまでは、何人か練習をのぞきに来てくれましたが、入部するまでには至らず、私だけでなく上級生も一緒になって説得して(毎年やっているのだから説得の仕方も巧み)、モトミが入ってくれたときは本当に嬉しかったです。

そんな弱小所帯の学年でしたが、本当に「激動の4年間」でした。2部優勝をめざし、優勝して1部昇格、1部で揉まれて2部に戻り、最後4年の時は、勝ったり負けたりで2部3位で終わりました。

同じ学年の人数が少なかった分、上下どの学年の人達とも懐かしい思い出があります。1年の時は帰りが一緒になることが多かったアヤノさんに「慶應バスケットの伝統」を、一から教えてもらいました。初めての夏合宿は島田で10日間という長さにびっくりし、とにかく申日が来るのが待ち遠しかったです。2年の夏は清水で合宿。その後はほとんど日吉で合宿し、「下田ハウス」に泊まりました。ハウスなんて名前はしゃれていますが……。みんなで記念館と下田ハウスを歩き来たあの頃が、懐かしいです。

2年からは佐々木先生のもとで鍛えられ、今ではあんなに練習したなんて信じられません。1年上のカタさんの学年は同じように人数が少なく、当時も今も何かあると一緒に行動しますが、ともに1部のリーグ戦で毎週強敵の厚い壁に跳ね返されながらも、東女体に勝てたことが最高の思い出です。

いつも上級生についていていた私達も4年になると部をまとめる責任があり、特に工学部だったモトミ(今では理工学部)の部員が何人もいますが、学業との両立で大変だったと思います。いまだにパワーは、衰えてないようです。パワーを増した1年下のナカたちに支えてもらい慶早戦にも勝ち、無事バスケットボール部を卒業できました。

4年間の学生時代だけでなく卒業後もバスケットボール部の人たちとのつながりは、私の大事な宝物です。

いくつになっても、試合を見ていると気持ちだけはコート上の選手たちと一緒に走り、熱くなってしまう。現役の皆さん、これからも私達を熱くしてくれるような活躍を期待しています。



#8中村



三ツ山

78年メンバー

部長 新田 敏
 監督 立花 雅男
 コーチ 佐々木 三男
 主将 平岡 (中村) 元美 (千葉)
 選手 齋藤 (三ツ山) 紀子 (横浜雙葉)

1978年の出来事

- ・日本一の高層ビル (当時) サンシャイン60完成 (3/1)
- ・大韓航空機銃撃事件 (4/20)
- ・新東京国際空港開港 (5/20)
- ・宮城県沖地震 (M7.4) 発生 (6/12)
- ・世界初の体外受精児 (試験管ベビー) が誕生 (7/25)
- ・日中平和友好条約調印 (8/12)

主な大会

大会名	優勝チーム
・第30回インカレ (男子)	日体大
・第25回インカレ (女子)	日体大
・第54回ALL JAPAN	松下電器
・第8回世界選手権 (マニラ)	ユーゴスラビア

1979

topics

夏合宿、ステュ・インマン氏臨時コーチとして招聘

男子

Data

慶早戦	○ K64 - 54W ●
慶関戦	2勝
トーナメント	7位 (対立教)
リーグ戦	東京10大学 5位 (11勝7敗) インカレ予選9位 (対大東文化)
インカレ	ベスト16 (71 - 81日本大)



'79年夏 妙高合宿にて4年自集合
伊藤英夫 次山幸人 本間安彦 三分一克則
喜多慎一 戸崎純 大槻悦三



志木高トレーナー 吉川正明



女子高トレーナー 五明桂一



主務 本間安彦



体育会卒業式



主将 伊藤英夫 (31回インカレ)

4年間の思い出 喜多 慎一

私達1976(昭和51)年入学組は、入学当初はプレーヤー3名(戸崎・喜多・伊藤)、スタッフ3名(本間・次山・吉川)、そして途中からプレーヤー1名(大概)が加わり合計7名でした。

ところが、1980(昭和55)年の卒業時にはプレーヤー2名(喜多・伊藤)、スタッフ5名(五明さん・三分一さん・本間・次山・吉川)の7名と合計人数は同じでしたが、ちょっと中身に変更がありました。当時の慶應の常として「学年」と「在籍年数」は、実にバラエティーに富んでいたのです。

ちなみに、リーグ戦の会場で他校の選手が、「あれ、あいつ確か去年4年だったんじゃないか。何で今年もいるんだよ」と言っているのを、何回か聞きました。

私が入学した年は、前年に関東大学1部リーグで最下位となり、全日本代表選手(浜口)を擁する拓殖大学との入替戦に勝利し、1部残留を何とか果たした年でした。そして、塾高から中学で日本一になった大久保中学のキャプテンだった戸崎純(現大学監督の戸崎洋先輩の弟、そして残念な事に29歳という若さで他界)が、同期として入学しました。

入学早々、『月刊バスケットボール』の取材があり、慶應バスケットボール部を紹介する特集が組まれたので、一介の都立高校出身の私としては驚きとともに「凄いチームに入ってしまったんだな」との感慨を抱きました。

それからの4年間、やはり我がチームは「戸崎純」を中心としたチームであったと私は思っています。ただし、戸崎自身は、留年して5年間プレーしましたが。

そんな中で、私が一番記憶に残っている試合は、2年の時のインカレ決勝リーグでの「対法政大学戦」です。

そのシーズン、全日本代表選手だった三神・馬場を擁し無敵を誇っていた法政大学に、我が校は当時監督であった濱中氏の秘策「ワンフォー」と言うゾーンディフェンスで臨み、何と13点差で勝利したのです。翌日の読売新聞のスポーツ面に、勝利に狂喜乱舞している我が校ベンチの写真が大きく掲載されたのを覚えています。

そして、次の対日本大学戦に勝利すればインカレ優勝という局面を迎えました。

しかしながら、残念なことに前日の「ワンフォー」で体力を使い果たした我がチームの選手は、ヘロヘロの状態で敗戦、4位という結果に終わりました。もう一歩で優勝を逃しましたが、オールコートプレスの戦いぶりは、『イラストレイテッド』にも「これぞ学生バスケット」というタイトルで大きく取り上げられました。

その後、3・4年時にはこの記録を超える成績は残せませんでしたが、「対法政大学戦」の興奮は、今でも鮮明に脳裏に焼き付いています。

先にも書きましたが、私の現役時代に中心選手として活躍した戸崎純君が他界してから、早いもので20年が経過しました。ここ数年の塾バスケットボール部の活躍、そして戦績には、天国の戸崎君もきっと喜んでいることと思います。

先日、同期の伊藤(我が期の主将)と飲んだ時にも話したのですが、塾バスケットボール部ほどOB・OG、他多くの方々注目され、支援・応援されている大学チームはないのでしょうか。

現在の学生諸君も「真摯な態度でバスケットに取り組む」という、塾の伝統を脈々と継承してくれていることを嬉しく思います。

これからもこの良い伝統と、「強いチーム」が引き継がれていくことを祈念しています。



第31回全日本学生選手権大会(大阪)

79年メンバー

部	長	新田 敏
総 監	督	武山 栄雄
監	督	濱中 貞一
コ	ー	チ 小川 光蔵
A・	コー	チ 白井 庄史
主	将	伊藤 英夫(慶應義塾)
主	務	本間 安彦(慶應義塾)
選	手	喜多 慎一(武蔵)
学生スタッフ		次山 幸人(慶應義塾)、五明 桂一(慶應義塾)、三分一 克則(慶應義塾)、吉川 正明(慶應義塾志木)

女子

Data

慶早戦	○ K71 - 31W ●
トーナメント	6位 (対東京女子体育)
リーグ戦	2部3位 (6勝4敗)



'79年10月 関東女子学生バスケットボールリーグ戦 最終戦(対大妻戦)
於 代々木第2体育館

岡田 (中林) 孝子

私たちの女子の代は、6人。当時としては、比較的人数の多い代でした。そして、監督さんは山口さんと立花さんにお世話になり、コーチは私たちの代が佐々木先生しか知らない代の始まりです。同期の子供たちが大学生になる世代になり、複数の子供たちがバスケットボール部に入って、再び山口監督や佐々木先生のご指導を受けているというのも、不思議な縁だと思います。

私たちは1年の時に1部に昇格し、2年は1部で戦いそして2部に降格、3年・4年と再び1部昇格を目指したものの、それは叶わずという4年間でした。

思い起こしてみると、勝利を収めてとても喜んだ試合の思い出と同時に2年・3年・4年どの年代をとっても、「あの1つの試合に勝っていたら1部に残留できたのに」、「あの試合を落とさなければ」「あのシュートを決めていれば、2部で優勝するチャンスがあったのに」と、悔やまれる試合のことを、今でも鮮明に思い出します。

もう1つ鮮明に覚えているのは、4年のリーグ戦の山場の1つである東海とのゲームで土曜日の1戦目に負け、かつ主力のミ

ーコが試合中に大怪我をしてその後の試合出場ができなくなってしまい、土曜の夕方それぞれに思いを抱えて、スーとエリと私の3人で、無言で日吉の町を歩いているシーン(何と試合のために日吉で合宿していました)です。翌日の日曜日は見事勝利を収めて1勝1敗にしたのですが、あのとときの3人無言で歩く姿というのは、誰も何も言わずとも、お互いの気持ちが通じ合っているというものでした。仲間の素晴らしさを本当に体感した瞬間だったのかもしれませんが。

喜びよりもつらい思い出のほうがどちらかというが多かったのかもしれませんが、この濃縮された4年間というのは、その後の約27年間、そしてこれからの人生の大きな支えになっていると思います。ここ数年、先輩・後輩と会う機会が増え、当時の思い出を語り合うことで、自分で忘れていたものを思い出させてもらったりしています。その上、50歳を目前にしてOGで集まって、バスケットの練習を(マジメに)している私たちってなんてエライんでしょう!! これからも先輩方とも後輩たちとも、同じ「カマノメシヲクッタ」仲間として末永く付き合っていければうれしいです。



細田美佐子



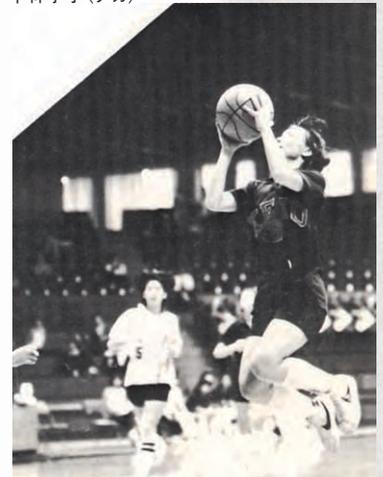
第37回早慶戦
島田恵津子(エッコ) 細田美佐子(ミーコ) 藤波恵理子(エリ)
鈴木和子(スー) 中林孝子(ナカ)



鈴木和子



藤波恵理子



中林孝子

79年メンバー

部長 新田 敏
 監督 立花 雅男
 コーチ 佐々木 三男
 主将 岡田(中林) 孝子(横浜翠嵐)
 主務 江口(島田) 恵津子(慶應義塾女子)
 学生トレーナー 片桐(森山) あゆみ(湘南)
 選手 鈴木 和子(東洋英和)、藤本(藤波) 恵理子(慶應義塾女子)、伊藤(細田) 美佐子(慶應義塾女子)



島田恵津子
森山あゆみ

1979年の出来事

- ・三菱銀行強盗人質事件 (1/26)
- ・アメリカのスリーマイル島原子力発電所で放射能漏れ事故 (3/28)
- ・第5回主要国首脳会議(東京サミット)開催 (6/28)
- ・ソニーがヘッドホンステレオ「ウォークマン」を発売 (7/1)
- ・東名高速道路下り線日本坂トンネルで火災事故 (7/11)
- ・WHOが天然痘根絶を宣言 (10/26)

主な大会

- | 大会名 | 優勝チーム |
|----------------------------|-------|
| ・第31回インカレ(男子) | 中央大 |
| ・第26回インカレ(女子) | 日体大 |
| ・第55回ALL JAPAN | 住友金属 |
| ・第10回ユニバーシアード
(メキシコシティ) | アメリカ |
| ・第10回アジア選手権(名古屋) | 中国 |

1980

topics

トーナメント '69年優勝以来の3位

男子

Data

慶早戦	○ K81 - 63W ●
慶関戦	2勝
トーナメント	3位 (決勝リーグ)
リーグ戦	東京10大学 5位 (9勝9敗)
インカレ	ベスト16 (59 - 62法政)



'80年リーグ戦 一橋戦
#4戸崎 #8伊藤(隆) #6荘司 #9濱 #7小林



#8伊藤(隆)



一橋戦 #9濱 #4戸崎(シュート)



#7大槻

現役時代の思い出 小林 史明

(1) 初練習

入学後、初練習に参加（於：二子玉川／レクセンター）したが、練習は早々に切り上げとなり多摩川の河原で「お花見」となった。大宴会となり、まじめな高校生活（富士市）を送ってきた自分には異常な光景に見えた。1年生は、飲んで100m(?)ダッシュなどもやらされたように思う。当然のことながら、下級生中心に帰る頃（夜中）にはフラフラだった。上級生でも、Aさんなどのように道路で寝る人もいた。

そこから、私の4年間のバスケット生活が始まった。

(2) 諏訪合宿

夏の合宿は、1年・2年時は諏訪で行われた。1年の夏は、とりわけ思い出深い合宿であった。日吉での1次合宿に続き、8月お盆まで諏訪で2次合宿（約2週間）が行われた。

宿舎は下諏訪の旅館、体育館は3～4km離れた岡谷市で、ランニングで通った（監督・コーチが、来た時だけ）。

濱中監督・三輪コーチ・小川コーチのスタッフ陣が来る日は、特に緊張感が高まり充実した練習だった。練習メニューの中では、ノードリブルの3対3（負け組は残る）は今考えても、体力的・技術的・気力的にとっても疲れるいい練習だったと思う。藤尾先輩の並外れた気力・体力は、すごかった。

合宿も後半になると皆疲れがピークに達し、事件（今は笑話）がいくつか起きた。最終日には諏訪湖の花火大会を見て、翌日帰京した。

この合宿を一応乗り切って、はじめて「何とかやってけるかな」と思った。

(3) インカレ大阪大会

3年のインカレは大阪市立体育館で行われた。ベスト8を賭けた試合では、強豪日大との対戦だった。

残り1分半ほどまでは5点リードしていた。更に、相手ボールを奪い速攻となり、ガードの伊藤隆祥（3年）がレイアップシュートに入ろうとした。しかし、その時にディフェンスが慌てて戻りコースに入りぶつかり合った。ブロッキングと思いきやチャージングの判定だった（今でも納得できない。隆祥がもう少し足が速ければ・・・）。そのあとは、一気に相手チームのペースとなり、シューター松本（日大4年）にたて続けにアウトサイドから決められ、万事休した。

(4) 最後に

4年間が終り、最後に武山総監督に、「社会に出たら、まず時間厳守を心掛け、バスケットで培った経験を活かすように!」との言葉を頂いたのを覚えている。



#4戸崎 #7小林

80年メンバー

部	長	新田 敏
総	監督	武山 栄雄
監	督	濱中 貞一
A・	コーチ	白井 庄史
主	将	戸崎 純（慶應義塾）
主	務	金子 朝生（慶應義塾）
選	手	大槻 悦三（仙台一）、荘司 良彦（横須賀）、小林 史明（富士）、伊藤 隆祥（慶應義塾）、濱 精孝（慶應義塾志木）
学生スタッフ		畑佐 守（慶應志木）、沖 勝登志（市岡）

女子

Data

慶早戦	○ K88 - 59W ●
トーナメント	8位
リーグ戦	2部4位
帝塚山戦	2勝



'80年慶早戦

荘司（中村）淑子

50周年の記念誌に現役としてご挨拶を書かせていただいたのが、ついこの前のようです。あれから25年の歳月が流れ、またこのような機会をいただきうれしく思っています。

1977(昭和52)年入学当時は、佐々木先生が2年目で1部リーグに昇格した年でした。「あの筋肉は絶対に男だ!」とみなに言わしめた伝説のリバウンド王ユーコ、当時無名のシャネルズの追っかけだった美声のラン、先生に入学早々いきなり「どん百姓」と呼ばれたばかりに、すっかり田舎者キャラになってしまったムラ。

私たち3人の4年間は、ただただ苦しいけど面白おかしい毎日でした。1年の夏合宿、一度も髪を洗えずゴワゴワのままアンナミラーズに行ったこと。マリさんのダブルXのハッチバックに入れてもらった、下田ハウスから記念館への道。何故か日吉駅のスタンドで、練習前に必ずオロナミンCを買う

ユーコ。同期男子からの差入れのトッパのチョコレートケーキ(大)を、更衣室で水を飲みながら食べた事。リーグ戦でのハーフタイムに先生に怒られて、出ていた5人で外を走った思い出の学習院。試合中呼ばれて、トレーナーと一緒にユニフォームまで脱いだ・・・。

「♪勝手にシンドバット」を、振りつきで踊ったラン。リピートには欠かせないムラ(とトモ)。イチ抜け女王のユーコ。下田ハウス恒例朝のアカペララジオ体操と、夜の一芸発表会—お歯黒・文明堂・お富さん…など。

まともな思い出がない訳ではありませんが、思い出すのはこんな事ばかりです。記念館と日吉駅周辺なら、どんなスタイルでも歩けた私たちの青春は、本当に何年たっても色あせることなく輝いています!これからもずっと・・・。



稲葉



'80年 春合宿



'80年 夏合宿

'80年 春合宿(下田ハウス)
稲葉 高橋 中村

80年メンバー

部長 新田 敏

総監督 武山 栄雄

監督 立花 雅男

コーチ 佐々木 三男

主将 荘司(中村)淑子(鎌倉)

選手 村林(稲葉)祐子(慶應義塾女子)、高橋 恵美(江戸川)

1980年の出来事

- ・レークプラシッド冬季オリンピック開催(2/13~)
- ・世界保健機構が天然痘の根絶宣言(5/8)
- ・モスクワオリンピック日本不参加決定(5/24)
- ・静岡駅前地下街爆発事故(8/16)
- ・イラン・イラク戦争はじまる(9/22)
- ・山口百恵の引退(10/5)
- ・ジョン・レノン銃殺される(12/8)

主な大会

- | 大会名 | 優勝チーム |
|-------------------|---------|
| ・第32回インカレ(男子) | 日本大 |
| ・第27回インカレ(女子) | 筑波大 |
| ・第56回ALL JAPAN | 日本鋼管 |
| ・第22回オリンピック(モスクワ) | ユーゴスラビア |

1981

topics

トーナメント：東京学生・関東合同開催
外部コーチ畑龍雄氏招聘

男子

Data

慶早戦	○ K62 - 59W ●
慶関戦	2勝
トーナメント	ベスト8 (対日本体育)
リーグ戦	東京10大学 7位 (8勝10敗)
インカレ	ベスト16 (56 - 78日本体育)



第33回インカレ 於名古屋



インカレ タイムアウト



主将 権田哲也

創部75周年記念誌に寄せて（畑先生を偲んで＝先生から学んだこと＝）

権田 哲也

前の大きな節目だった創部50周年は私が大学3年の時であり、あれから四半世紀が経過しようとしている。

昨年の塾のバスケットボール部の戦績はすばらしく、45年ぶりのリーグ戦・インカレ優勝に輝き、現役・OB・OGをはじめ、多くのバスケットボールファンにも喜びと感動をもたらしてくれた。栄冠を勝ち得るまでには、多くの方々の努力と苦労があった。

四半世紀前の努力と苦労について、時間を戻してその一端をご紹介したい。

1981（昭和56）年1月、主将となった私は前年度までの監督・濱中先輩、コーチ・白井先輩に継続してご指導いただき、当時塾高のコーチをしていた阪口君を大学のトレーナーに呼び戻す体制を考えていた。しかし、徹底的に学生に密着して基礎から鍛え直す必要ありとの幹事会の決定により、濱中先輩を武蔵高校時代に指導された畑龍雄先生をコーチとしてお招きし、監督は内海先輩となった。

畑先生は、数学の教鞭をとっておられたこともあり、バスやドリブルの指導の中でも数学や物理の理論が出てくる。「パスの軌道の頂点は・・・」、「ドリブルは入射角から出射角を考えて・・・」、「パスは腕力では無く重心の移動スピードに・・・」等々、従来の塾の指導者とはその指導方法が違うので、最初は皆啞然となり、また、現役のみならずOBの方々にも同様の指導をされるので、日吉記念館から足が遠のいてしまった方もいた。後日畑先生にお話をお伺いしたところ、「現役・OB共に良い習慣を身に付けてもらいたいし、OBには模範となってもらいたいので悪い習慣を注意するのは当たり前」と言う返答があり、納得した記憶がある。バスケットボールという競技は、ミスのゲームと言われている。高校時代に実績や経験の少ない我々を見て、「如何にミスを少なくするか」が戦うための最優先課題であった事は間違いなかったと思う。

基礎練習に明け暮れていた我々は、遂にチームオフENSEの練習を開始した。それは名付けて「沈み込みOFFENSE」だった。

皆初めて見るので、やっている方も戸惑ったが相手チームの方がもっと戸惑い、結果は大勝だった。その後、慶早戦にも勝利し、トーナメントはベスト8、リーグ戦7位、インカレベスト16と前年度の戦績と比べてもほとんど遜色ない結果が残せた。基礎練習から徹底的に行う事により、ミスを減らす

事が出来たことに由来するものと思っている。最近、しばらく遠ざかっていたバスケットボールの基礎練習をやってみると、当時の畑先生から受けた注意が昨日のこのように思い出され、私の体に刻み込まれているのだった。

基礎無くして応用無し！



集合写真
（最前列左から）坂本 滋 太賀秀明 権田哲也 関野 誠
伊藤 敬 阪口裕明 木暮 英之

81年メンバー

部	長	新田 敏
総 監	督	武山 栄雄
監	督	内海 淳
コ	一	畑 龍雄
主	将	権田 哲也（慶應義塾）
主	務	伊藤 敬（慶應義塾）
選	手	植田（坂本）滋（土佐）、太賀 秀明（山形東）、関野 誠（高崎）
学生スタッフ		阪口 裕昭（慶應義塾）、小暮 英之（慶應義塾志木）

女子

Data

慶早戦	○ K77 - 28W ●
トーナメント	1回戦
リーグ戦	2部5位
帝塚山戦	2勝



代々木にて
 (前列左から) #8 藤波、#7 辻、#6 鶴池、#5 杉之尾、#4 井川
 (後列右から2人目) #10 三好

記念館への坂道

野田(井川) 幸香

昨年の慶早戦OG戦以来、何度か有志で集まって記念館で練習するようになりました。今では記念館への坂道を車で走りぬけるいい身分になりましたが、それでもあの坂道から記念館を見上げると、いつでも現役の頃が思い出されます。

日吉駅の売店で買った栄養ドリンクを飲みながら(気合を入れる日は、値段の高いドリンクにしたりして…)、重い足取りで記念館まで上ったこと。練習が終わってから、水を飲むのを我慢してケンタッキーのBIGサイズコーラに向かって急いだこと。練習に向かう上り坂は、いつも勾配をきつく感じたものでした。

でも、同じように感じている仲間がいたから、毎日記念館に通えたのだと思っています。

私たち同期は人数が比較的多く、バネのあるジャンプでア

ップの二重跳びをいつも涼しい顔で一番に終わらせるミキ(先輩にスーさん・ランさんがいらしたので、本名とは全く関係なく命名された呼び名!)、粘り強いディフェンスが身上のトモ、シュートフォームが美しいミフネ、圧倒的な速さで足が回転するミワ、ゴール下の大黒柱のモモコ、そして、バスケットボールの経験が全く無いにもかかわらずシーズンスポーツから入部してくれて、笑顔で頑張っていたマキ、練習や試合後のミーティングで往々にして意味不明な話をしたり(みんなが通訳?してくれました…)、時々放心状態で一点をみつめてしまう私でしたが、同期7人が励まし合って頑張れました。記憶に残るのはきつかった練習のことばかりですが、合宿最後の夜の演芸大会や帝塚山大学との定期戦の関西遠征は、楽しい思い出です。

定期戦後にみんなで1泊の京都観光をした際に、電話帳から「ホワイトハウス」という名前に惹かれて選んだ宿が、民家に毛がはえた程度のところでした。その宿の前で思わず顔を見合わせて笑ってしまったときの光景が、ニュースでアメリカの「ホワイトハウス」と聞かたびに脳裏に浮かんできます。

苦しい練習があったからこそ、楽しい思い出が鮮明に浮かび上がるのでしょうか。

慶應での4年間は、とても大切な財産となって残っています。今でもあの記念館への坂道は、慶應のバスケットボールに繋がっていて、卒業してから4半世紀近くたって再び昔の仲間と記念館でボールを追いかけると、とても楽しく、懐かしい感覚に襲われます。

時々現役時代のみんなの姿が、フラッシュバックするのは私だけでしょうか…。

二度と立つことはないと思っていた代々木第二のコートで、OG戦で2回もプレイができました。

今年は、女子は2部昇格、男子はリーグ・インカレ優勝がかかっていて、現役の試合の応援は、本当にわくわくドキドキの連続です。

こんな楽しい時間を持って、改めて慶應のバスケットに感謝したいと思っています。



'81年リーグ戦 vs東海大



先生、ミキ、ミワ、マキ



81年メンバー

- 部長 新田 敏
 監督 立花 雅男
 コーチ 佐々木 三男
 主将 野田(井川) 幸香(横浜翠嵐)
 選手 柚木(杉之尾) 節子(戸山)、白井(鶴池)
 朋(橘)、山本(辻) 美舟(慶應義塾女子)、
 亀田(藤波) 美和子(慶應義塾女子)、三好
 百子(慶應義塾女子)



下田ハウスにて

1981年の出来事

- ・神戸市でポートピア'81が開幕(3/20)
- ・中国残留孤児が初来日(3/20)
- ・チャールズ英国皇太子とダイアナ妃結婚(7/29)
- ・北炭夕張新鉱でガス突出・坑内火災事故、犠牲者93人(10/16)
- ・ロッキード裁判、小佐野に実刑判決(11/1)
- ・福井謙一京都大学教授がノーベル化学賞受賞

主な大会

- | 大会名 | 優勝チーム |
|--------------------------|-------|
| ・第33回インカレ(男子) | 日体大 |
| ・第28回インカレ(女子) | 日体大 |
| ・第57回ALL JAPAN | 松下電器 |
| ・第11回ユニバーシアード
(ブカレスト) | アメリカ |
| ・第11回アジア選手権(カルカッタ) 中国 | |

1982

topics

UNICORNS誕生。

関東男子学生バスケットボール連盟発足
(東京学バスケットボール連盟と関東大
学バスケットボール連盟が合併)。

男子

Data

慶早戦	● K62 - 74W ○
慶関戦	2勝 (代々木第二で開催)
トーナメント	ベスト16 (51 - 54対国士館)
リーグ戦	強化上位7位 (10勝7敗)
インカレ	ベスト16 (52 - 64京都産業)



第48回慶関戦('80年)終了後



今村・浅井・淵

伊藤・野里・佐藤・有明・野間・松尾 (副務)

早稲本 (主務)・長谷川 (主将)・廣松 (副将)・湯沢・内田 (副将)・加瀬・舟越

長谷川 潤

祝勝会。(学生諸君おめでとう、そしてありがとう。)早稲田の山田先輩のウィットに富んだ来賓祝辞。本来なら早稲田がこの会を……。そうです。少なくとも強豪チームは、最終目標をインカレ優勝に置いている訳ですし、私の入部した当時の慶應も、当然そうでした。

田舎の高校でのんびり育った私にとっては、体育会の規律がまずカルチャーショック。そして個性の強い、おっかない先輩がてんこ盛りの部でした。練習がまた、キツイキツイ。特に、大嫌いな水曜日。伊勢丹定休日につき、Aコーチ白井さん(別名アコシ)登場。しょっぱなから魔の3メンリピート。ミスをしたくない、と言う位ではお話になりません。ノーミス×スピード×気合の入り方?×魂のこもり方?=?「今イチだな……。」と、アコシ的判断が下された時にリピートの笛は鳴ります。体力のない私は、笛1回でもうギブアップ。延々と、コートの上を夢遊病者のようにさ迷います。1年生は大部分似たりよったりですから、足を引っ張られたおっかない先輩もご機嫌斜めです。練習後には1年生用の特別な練習、「スペシャル」を用意してくださいました。何度記念館が、地震・火事・風水害にさらされるのを願った事か……。アコシ、おっかない先輩のみなさん。その節はお世話になりました。

そんな私には、同期の存在が救いでした。男子7人女子3人でした。練習後、ぼろ雑巾のような体を引きずり、日吉で飲みました。愚痴をこぼし、喧嘩し、駅前の公衆電話から知り合い(100%女性だった)に電話して嫌がられ、ゲロを吐き、誰かのアパートで寝ました。いつも一緒に行動しておりました。そして今、その同期(廣松、内田、ワセ、リョウ)は、45年ぶりの優勝の「陰の功労者」でした。うれしい限りです。

祝勝会。かつて私達の現役時代にも、叱咤激励して下さったOBが大勢いらっしゃいました。もう卒年の上下も忘れて美酒に酔い、昔話に花を咲かせます。部歌・若き血を歌う誇らしげな顔、顔、顔。丘の上、歌詞あやふやです!お恥ずかしい。「同期のおかげで頑張れて」、「先輩のおかげで強くなり」、「慶應義塾体育会のおかげで絆ができて」と、改めて実感しました。この感覚を若い世代にも共有してもらえたら、さらにうれしく思う今日この頃です。



'82年春の練習後のある日!



'82年新人歓迎会(湘南海岸)

82年メンバー

部長	新田 敏
総監督	武山 栄雄
監督	内海 淳
コーチ	畑 龍雄
主将	長谷川 潤(安積)
主務	早稲本 宏(慶應義塾)
選手	廣松 英樹(土佐)、湯沢 正樹(飯田)、内田 好治(小田原)、加瀬 正(慶應義塾)、舟越 幹洋(松江北)

女子

Data

慶早戦	○ K80 - 37W ●
帝塚山戦	2勝
トーナメント	1回戦敗退 (vs 青山学院)
リーグ戦	2部10位 (2勝8敗、9・10位決定戦 ●)



卒業アルバムから

みどりを偲んで

私たちの名前「めぐみ」「みどり」「りょう」が、「めぐみどりょう」というように”しりとり”になっていることに気づいたのは、出会ってから随分後だったような気がします。だからといって、どうということはないのですが、普通に過ごしていたら絶対出会わなかったであろう3人が、こんなふうにも繋がっていたことを発見したときは、驚きとともにちょっと嬉しくもありました。

みどりは、私と一緒にバスケットボールの選択体育で入部しました。部の存続をかけた先輩方の必死の勧誘にあったとはいえ、器械体操をやってきたみどりが、「体育会バスケットボール部を選んだのはなぜなのか」、いまだに謎です。シュートやパスをするときに背筋と足先がいつもピンと伸びていて、いやに体操っぽかった姿が目には浮かびます。見た目はぼーっとした感じですが、面倒見がよく姉御肌、話題が豊富で先輩・

後輩だれとでも気軽に話せるタイプでした。大学で初心者のハンディは大きく、最後までベンチウォーマーでしたが、一度も辞めたいと言わなかったのは彼女なりの意地だったのでしょうか。

考えてみると、私たちはちょっと変わった3人組でした。最初に入部しためぐみは、1年目から主務の仕事をごなした優秀なマネージャー、でも実はおっとりとした”天然”系。唯一の経験者プレイヤーだった私は、4年で主将は必至なのに実力が伴わず、一度挫けそうになった時も周りの引き留めに結局負けて、「どうにかなるさ」で最後を乗り切った優柔不断で開き直りが早いタイプです。一見合わなそうですが、私たち3人は一緒にいれば安心して居心地のよい関係だったように思います。

でも今は、めぐみと私を繋ぐ「みどり」が欠けてしまいました。それがとても残念です。本当に……。 (鈴木 良子)

私たち3人の名前が「めぐみどりょう」というように”しりとり”になっていることは、りょうの追悼文を読むまで全く気が付かなかったような私が、大学の4年間、何とか主務を務め続けることが出来たのは、いつもさり気なく私を支えてくれていた、りょうとみどりのお陰です。また、時と場合に応じて優しく厳しく力強く引っ張ってくださった先輩方や、自分達のことでも手一杯な時でも、色々と協力してくれた後輩達の存在があったからだと思います。

私たち3人は傍から見ると、練習以外の時間やオフの時には一緒に行動することが少なかったのも、どちらかといえばあっさりした関係に見えたのではないかと思います。それでも心の中ではいつも、「いざ」という時にはきっと、「りょうとみどりが力になってくれる」と、思っていましたし、「そう思うことが出来る」というそのことだけでも、充分心強く感じられたものでした。

卒業後も現役の時と同様、あっさりした関係は変わらず、年賀状の遣り取りだけでお互いの消息を知るような年もありました。しかし、りょうとみどりととは年齢を重ねてからも、と云うよりむしろ、年齢を重ねるに連れ、よりよく、それぞれの良さが解りあえるようになって来たような気がしていただけに、みどりが先に逝ってしまったのは、ほんとうに残念でなりません。心から冥福を祈ります。合掌。(池田 めぐみ)



'81年新入生歓迎会(山中湖)



'82年慶早戦

'82年慶立戦
池田・岡部・森

'80年夏合宿、下田ハウス前で

82年メンバー

部 長	新田 敏
監 督	立花 雅男
コ ー チ	佐々木 三男
A・コーチ	村林 祐子
主 将	鈴木(岡部) 良子(九段)
主 務	池田 めぐみ(慶應義塾女子)
選 手	鈴木(森) みどり(横浜緑ヶ丘)



'82年夏合宿 in 御殿場

1982年の出来事

- ・ホテル・ニュージャパン火災事故(2/8)
- ・羽田沖で日航機墜落事故(2/9)
- ・大蔵省、500円硬貨1億枚を発行(4/1)
- ・東北新幹線、大宮・盛岡間開業(6/23)
- ・CDタイトルおよびCDプレイヤー発売開始(10/1)
- ・上越新幹線、大宮・新潟間開業(11/15)
- ・電電公社、新宿駅周辺他都内70ヶ所にカード式公衆電話設置、サービスを開始する(12/23)

主な大会

大会名	優勝チーム
・第34回インカレ(男子)	日体大
・第29回インカレ(女子)	筑波大
・第58回ALL JAPAN	松下電器
・第9回世界選手権(カリ)	ソビエト連邦

1983

topics

インカレ連続出場 (第1~32回) 途絶える

男子

Data

慶早戦	● K43 - 68W ○
慶関戦	2敗
トーナメント	ベスト16 (48 - 81中央)
リーグ戦	強化リーグA 8位 (0勝14敗・2部自動降格)
インカレ	不出場



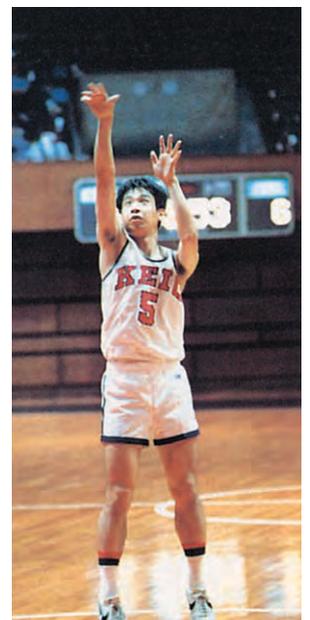
集合写真



'83年 早慶戦



主将 伊藤誠



副将 野里周司

伊藤 誠

我が慶應義塾体育会バスケットボール部の75周年記念誌発刊に際し、現役当時の様子などを少々書かせて頂きます。

まずは、正に75周年を迎えた2004年シーズンに、大学男子チームが45年ぶりの関東大学リーグ優勝、大学選手権優勝という輝かしい成績を残してくれたことに対し、選手・スタッフの皆さんに最大限の称賛を贈りたいと思います。確かに塾のチームとしては能力ある選手が揃ったタイミングだったので、並み居る強豪を抑え優勝を遂げるには、日頃からの厳しい練習、個々の強い意志の力、そしてチームスピリットがあったからでしょう。私のみならず自らの現役時代の悔しさを思い出し、仇討ちをしてくれたかのように、万感の思いで観戦されていたOB・OGも多かったかと思えます。

実際、我々の大学4年時には、関東大学リーグ戦1部で全敗し、次年より創部以来始めての2部落ち決定、インカレ関東予選で1点差の敗退という後輩にはたいへん申し訳ない散々な結果での卒業となりました。当時の環境は、一般受験生の慶應人気が年々高まり、有望選手の外部からの入学が益々難化する中、揃ったメンバーで先輩から引継いだ「熱い思い」だけは持ち、「それぞれの立場で(選手・マネージャー・トレーナー・学連)、日々苦闘していたな」と、結果を残せなかった悔しさと共に、がむしゃらな青春時代を懐かしく思い出します。

さて、そんな厳しい現役時代でしたが、我々は大学2年時より3年間に亘り、外部招聘コーチとして畑龍雄先生から指導を受けるという貴重な機会を得ました。畑先生は、戦後の日本バスケットボール界発展に指導的役割を果たされ、ルールブックの整備から、御茶ノ水女子、私立武蔵高の全盛時、そして実業団、全日本チームをも指導された名立たる指導者でした(2000年逝去)。畑先生の演繹的アプローチとも言える、計画され訓練された技術的「うまさ」を集積したチームを目指すバスケットボール理論に接し、指導を受けた我々のバスケットボール感は大きく変わり、先生の影響を強く受けました。最終学年では、我々の力不足のため「畑バスケット」を勝利に結び付けられませんでした。この機会に、私なりに理解した「畑バスケット」のポイントを以下ご披露したいと思います。

① バスケットボールの一連の効果的な動き・プレーは、1歩の足の使い方、ボールの扱い方等、パーツパーツの動作を極端なほど正確に行う基礎練習を積み上げ、最終的に一体感ある動きに組み上げることで、実戦に有効な動きが身に付く。更にチームとしてフォーメーション化することで、運動能力の特に秀でた選手でなくても自分の持ち場で貢献でき、平均的にチーム力をアップさせることが可能となる。

② 絶対スピードが劣ろうとも、相対スピードを利用することで、ほとんどの相手を出し抜くことが可能。すなわち、相手が右に動いた瞬間に左に動けば、自分のスピード+相手のスピードが、相手と

の相対スピードとなる。よって、プレーの至るところでフェイクを入れることで、相手の逆を取ることを狙う。

③ 競技ルールに対する正確な知識を持つべき。かなり上のレベルの指導者、選手でもルールを正確に知らない人が多い。そこから効果的なフォーメーションも生み出せる。

④ 「バスケットする心」への働きかけ。大事を成し遂げるには、日々、実行可能なことをやろうと決める「小決心」が重要。すなわち、「今日はこれを徹底的にやってみよう」と、練習に臨んでいるという自覚が必要。また、チームの一員としての個々人の責任感が必要であり、試合中の「ナイス・パス!」成立とは、(パスナーの技術+チームメイトが一番取り易いパスを出そうとする責任感)と(レシーバーの技術+チームメイトのパスはどんなパスでも取ってやろうという責任感)の掛け算の結果である。

最後に、現役支援について一言申し上げます。2006年シーズンの大学男子チームも優勝争いを繰り広げており、OBとして喜ばしい限りであり、これからの活躍を大いに期待したいと思います。ここ数年の躍進は、現役選手諸君の並々ならぬ努力の成果であることに違いないのですが、忘れてならないのは、我々の時代以降の2部、3部の厳しい時代でも、変わらぬ「熱い思い」でプレーする後輩達を、これまた、変わらぬ「熱い思い」で物心両面より支援し続け、昨今の入試制度柔軟化を活用できる体制を作ってこられた関係諸先輩のご苦勞があってこそ今があるという点です。大学現役生活を終え、社会に飛び立った後は、現役期間よりも遥かに長いOB時代があります。我々のように勝てなかった時代のOBは、現役時代の辛い思い出からか三田会から遠ざかる傾向にあるようですが、自分の範囲内で良いから後輩達を支援し続けることで、昔の辛かった時代を取り返す機会も得られようし、思いを次の時代につなぐことになるのではないかと、また、正にそれが慶應義塾体育会バスケットボール部の伝統ではないかと改めて思う今日この頃です。引続き、皆で現役を支援して参りましょう。

83年メンバー

部	長	新田 敏
総 監	督	武山 栄雄
監	督	内海 淳
コ	一	畑 龍雄
主	将	伊藤 誠 (安房)
主	務	松尾 嘉朗 (鹿兒島ラ・サール)
選	手	野里 周司 (武蔵丘)
学生スタッフ		佐々木 毅 (慶應義塾)、長倉 浩 (慶應義塾志木)、西井 一雅 (暁星学園)

女子

Data

慶早戦	○ K72 - 26W ●
トーナメント	3回戦
リーグ戦	2部12位 (3部降格)
帝塚山戦	2勝



'83年 慶立戦

伝統の中に身を置いた日々 加藤（中谷）雅子

創部75周年誠におめでとうございます。また、近年の塾バスケットボール部のご活躍に感服しております。このような数々の優秀な戦績を残し、名選手を排出してきた輝かしい歴史の一部として、ささやかながら私も身を置いてきたことを、改めて幸せに感じます。

私たちは、ちょうど関東女子学生バスケットボールリーグ戦の1部リーグを経験された諸先輩や、その志を受け継ぐ上級生に恵まれた代でした。伊藤(柴田)主将・中津川(刈田)副主将と主務の私という少ない人数ながら、上・下級生に支えられ、4年間バスケットボールに傾注した日々を送ってきました。また当時は、立花雅男監督・佐々木三男先生・村林(稲葉)祐子コーチのご指導を仰ぐという、幸運な環境でもありました。

上級生の息詰まるシーソーゲームの勝利に、鳥肌の立つ感動を覚えたこと。練習前のボール磨きの情景。合宿の朝のラジオ体操。恒例の一発芸に四苦八苦したこと。記念館の使用時間が過ぎても待っていてくれた、記念館の管理人さんの笑顔。練習や合宿に多くの励ましや、手伝いくださった先輩の方々。上の代から下へと伝わっていく、バスケットボールへの熱い

想い。それまでの自分には、未経験だった伝統というものへの畏怖と誇り。そして、指導者の方々からの「人間として誇りある善い人生を」「努力の花を咲かすこと」「開き直りの大切さ」などの、心に残るメッセージの数々……。

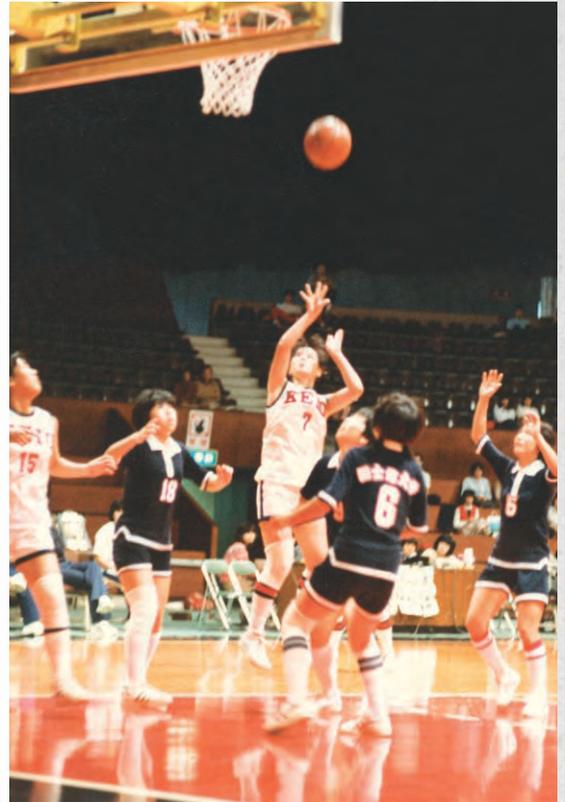
次々と浮かんできた懐かしい記憶は、どれも確かに伝統の中に身を置いていたあの時の私のものでありました。

残念ながら、私たちの戦績はそれまでの地位を守り続けられない結果でしたが、2人の仲間とともにバスケットボールに取り組み、伝統を守ろうと努力した4年間は、私にとって今でもかけがえのない青春の証です。

あれから20余年がたち、私には4人の子供がいます。目下、小・中学生の娘2人は、バスケットボールに夢中です。彼女たちにも、「いつの日かあの鳥肌の立つような試合を、経験して欲しいなあ……」と思います。そして、塾バスケットボール部には、今後もバスケットボールを志す子ども達に、文武両道の数少ない伝統チームとして、夢や目標を与え続けてもらえることを期待しております。



'83年3月 春合宿



'82年 リーグ戦



中谷 刈田 柴田

83年メンバー

部 長	新田 敏
監 督	立花 雅男
コ ー チ	佐々木 三男
A・コーチ	村林 祐子
主 将	伊藤 (柴田) 美貴 (田園調布雙葉)
主務兼選手	加藤 (中谷) 雅子 (西)
選 手	中津川 (刈田) みゆき (慶應義塾女子)



'84年 卒業式にて

1983年の出来事

- ・東京ディズニーランド開園 (4/15)
- ・中部日本海沖地震 (M7.7) 発生、各地で津波災害 (5/26)
- ・任天堂がファミコンを発売 (7/15)
- ・フィリピン野党指導者アキノ氏暗殺 (8/21)
- ・大韓航空ジャンボ機、ソ連戦闘機に追撃される (9/1)
- ・三宅島で大噴火 (10/3)

主な大会

大会名	優勝チーム
・第35回インカレ (男子)	日本大
・第30回インカレ (女子)	愛知学泉大
・第59回ALL JAPAN	秋田いすゞ
・第12回ユニバーシアード (エドモントン)	カナダ
・第12回アジア選手権 (香港)	中国

1984

topics

リーグ戦国時代苦闘の末、無念3部降格へ

男子

Data

慶早戦	● K49 - 67W ○
慶関戦	2勝
トーナメント	ベスト16 (38 - 73筑波)
リーグ戦	強化リーグB7位 (3部自動降格)
インカレ	不出場



諏訪夏合宿



主将 佐藤直樹

戦国時代の苦闘 佐藤 直樹

卒業して20年。久し振りに学生時代を振り返る機会を頂き、感謝の念に堪えない。地方出身の私は初めて記念館を見た時、まずその大きさと古さ?に驚かされた。また、床が実によく滑る。いくらモップをかけても、滑って転ぶのが日常であった。その年の慶早戦は記念館で行われたが、早稲田の選手が肝心な場面できごとく滑って転倒し、我々が勝利をものにしたほどであった。

我々の代は、辛うじて私がインターハイに出た程度で、高校時代に全国区で鳴らした選手は皆無だった。塾高も低迷期だったため、メンバーは寄せ集めの感を否めなかった。一方、高校時代の有名選手たちは、日体・日大をはじめ専修や青学、順天堂大などに散っていた。本塾がセレクションをしてもなかなか合格者がなく、補強の面で、他大学に大きな差をつけられた時期だったのである。

加えて、東京ビッグ10と関東学生リーグが2年の時に一本化され、関東学生バスケット界は「何でもあり」の、戦国時代を迎えることとなった。旧関東学生リーグ勢は、ビッグ10とはバスケットの質が違い、選手個々の素質で試合を組み立てるチームが多かった。個人のスキルが劣り、フォーメーション主体の我々は、彼ら旧関東学生リーグ勢に振り回され、打つ手が見出せなかった。結局我々は、3年の時に2部転落、私が主将を務めた4年の時には3部転落と、不本意ながら、その後の低迷期の節目となる経験を余儀なくされてしまう。

何とかいい結果を残そうと頑張ったが、リーグ再編などの大きなうねりに吞み込まれた時代であった。実は、あまりに苦しかった戦いに脳細胞が拒絶反応を起こしたらしく、細かい記憶がほとんど無いのが実情だ。しかし、「あれほどの経験はカネで買ってでもすべきだ」と、いまの私は感じている。

昨年、現役の試合を見ながら時代の移り変わりを強く感じた。選手の素質や慶應のプレスタイルも随分変わったなど感じたが、苦勞した我々の4年間で報われたような気にもなった。これは、同時期にもがき苦しんだ仲間全員の率直な感想ではないだろうか。時は移っても、同じ部室で着替え、同じ部歌を歌って試合に臨んでいる現役諸君は、やはり仲間だと私は感じている。

創部75周年の節目に、夢のような戦績を取めた本塾が、学生界に君臨し続けられるよう、今後も微力ながら応援していく所存である。



主将 佐藤直樹



有明、瀧、今村、山口、武田、佐藤

84年メンバー

部	長	新田 敏
総	監督	武山 栄雄
監	督	上谷 富彦
コ	チ	川浪 茂男
主	将	佐藤 直樹 (浜松西)
主	務	松尾 嘉朗 (鹿児島ラ・サール)
選	手	有明 厚典 (慶應義塾)
学生スタッフ		山口 真 (慶應義塾)、武田 浩 (慶應義塾)

女子

Data

慶早戦	○ K81 - 48W ●
トーナメント	2回戦
リーグ戦	3部2位 3部残留
帝塚山戦	2勝



第42回慶早戦、OGの皆さんと

宇野（佐藤）尋栄

つい先頃、新聞(2004年12月11日付衛星版朝日新聞)の人物紹介欄に、大学男子4年主将の志村君が「米NBA入りした田臥選手から、ボールを拾ってゴールを決めた」というエピソードが紹介されていた。そのコメントを読んで、我が意を得たりと思った。思えば、自分もシュートやインターセプトの一瞬の記憶が、大学でバスケットボールを続けさせた原点のような気がする。都合のいいことに、それはいつもナイスプレーの記憶だ。まったく記憶にとどまらない1日もあるのに、卒業して20年経っても覚えている一瞬がある。おそらく同期それぞれが、こうした記憶に支えられて、4年間を送ったことだろう。

同期は3人で、当時の松田聖子似と評判だった、バスケット初心者の村山まゆみ(旧姓成瀬)、体育会選手による恒例のマラソン「クロカン」を走らせたなら他の追従を許さない汐崎順子。それに私。お互い、入部したことで初めて知り合い、在学した4年間を通して、「濃い」時間をいっしょに過ごした。今でも笑えないほど「過酷」だった2年の夏の御殿場合宿。3部転落を決定づけた3年のときの青学戦。その会場の青学大体育館の廊下の暗かったこと。4年になって新チームをスタートさせた後の自分のケガ。2部復帰を果たせず卒業。

こうして思い浮かんだまま並べると個々は「災」ニュースが目

立つけれど、なぜか当時をひとかたまりの思い出として振り返ると、いい思い出になっているから、これは我ながら不思議に思う。

最初に触れたいのは当時の女子のコーチだった、佐々木三男コーチ(私たちは「先生」と呼んでいた)のことだ。大学入学が決まって、さっそく春の練習に張り切って参加した私に「佐藤さん(私の旧姓)、少しやせた方がいい」。ヒゲにサングラス(色メガネ)のスタイルは、「へえ、大学ともなるとコーチも違うものだな」という印象を残した。

バスケット初心者の成瀬まゆみを主力センターに育てたのは、本人の頑張りもさることながら、佐々木先生の面目躍如たるところだろう。私は「勝負」について、今も(というか、今になってようやくか)ヒントにしている考え方を教わった。最近、スポーツ選手などがよく「(試合を)楽しみたい」とコメントする。このセリフは乱用気味で、今や陳腐化している感じさえあるが、昔々の現役時代に「ゲームを楽しめ」と言われたのは、とても新鮮だったし、かっこ良く聞こえた。そういうスタイリッシュなチームだったといえば、記憶を美化し過ぎかもしれない。

目下、海外在住で資料も写真もなく、雑感のみを寄稿することになった。機会を与えて頂いたことに感謝したい。



'82年 御殿場合宿



「あ、あれは?!」



'82年 新入生歓迎会



'82年 山中湖新入生歓迎会

84年メンバー

部 長	新田 敏
監 督	立花 雅男
コ ー チ	佐々木 三男
主 将	宇野 (佐藤) 尋栄 (横浜翠嵐)
主務兼選手	汐崎 順子 (湘南)
選 手	村山 (成瀬) まゆみ (白鷗)



卒業式

1984年の出来事

- ・三井三池鉱業所の有明鉱坑内火災、一酸化炭素中毒で83人死亡 (1/18)
- ・米アップルコンピュータがマッキントッシュを発表 (1/22)
- ・サラエボ冬季オリンピック開催 (2/8~)
- ・江崎グリコ社長営利誘拐事件 (3/18)
- ・ロスアンゼルスオリンピック開幕、ソ連不参加 (7/28~)
- ・オーストラリアからコアラ6頭が日本に初めて上陸 (10/25)
- ・インディラ・ガンジー首相銃撃され死亡 (10/31)

主な大会

大会名	優勝チーム
・第36回インカレ (男子)	日本大
・第31回インカレ (女子)	筑波大
・第60回ALL JAPAN	住友金属
・第23回オリンピック (ロスアンゼルス)	アメリカ

1985

topics

NBAルール3ポイントシュート、学生界導入

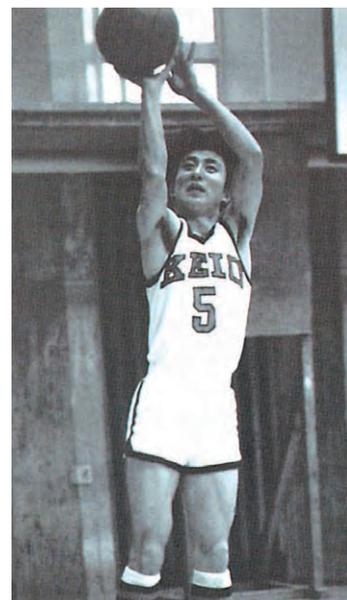
男子

Data

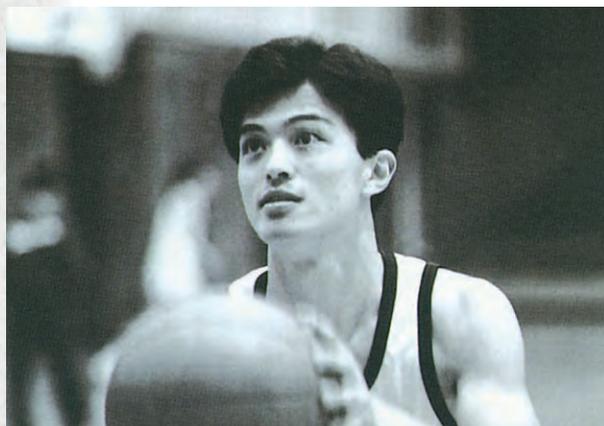
慶早戦	● K49 - 59W ○
慶関戦	2敗
トーナメント	ベスト16 (61 - 66明治)
リーグ戦	強化リーグC5位 (8勝6敗)
インカレ	不出場



集合写真



副将 北尾征久



主将 棚橋慶太



北尾、長峰、野間、板倉、芳野 合宿
小沢、鈴木、棚橋

本塾の過渡期に 棚橋 慶太

早いもので、我々が卒業してから20年になる。当時を思い起こすと、学生バスケット界は大きな節目を迎えた時期だったと思う。

まず「関東学生の再編」が挙げられる。本塾の属していた東京BIG10(10大学リーグ)と関東学生リーグとに2分割されていた関東学生は1982年に統合され、まさに戦国時代入りした。関東1部から3部は8チームずつで構成され、1部及び2部の下位2チームは、入替戦なしで自動的に2部及び3部の上位2チームと翌年度入れ替わる方式。東京BIG10のチームでは、まず立大・東大・一橋大が上位から姿を消し、再編2年目には名門の明大までが3部落ちした。

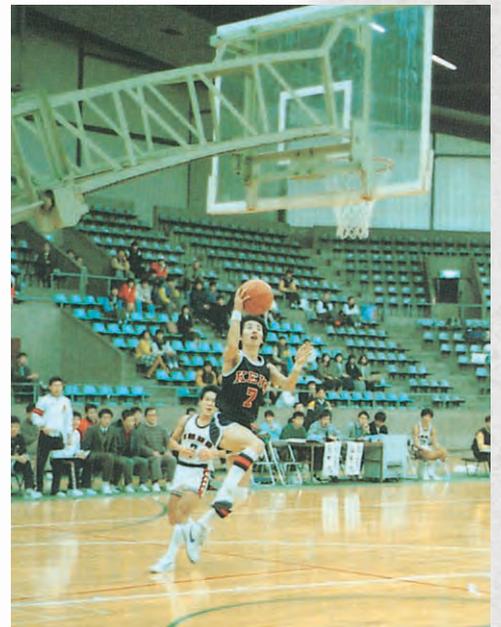
第2に「高校生の進学先の多様化」である。今でこそ強豪に名を連ねる専大や青学大、東海大等が新興勢力として台頭し、超高校級の選手も集まるようになり、さらにまた力をつけていった時期だった。またスポーツ推薦が本格化し、早大に能代工業や京北といった名門高校から有力選手が入学できるようになったのも、この時期だ。

第3に「ルール改正」があった。NBAルールであった3点シュートが、我々が4年の時に初めて学生リーグでも採用され、バスケットボール戦術に新たな変化をもたらした。我々はこの新ルール下で、残り1秒逆転負けの試合も経験した。

こうした学生バスケットボール界を巡る大きな変化の下、我がチーム自身も過渡期だったと思う。2、3年生が主力の若いチームだった。それなりに素質に恵まれた選手もいたが、超高校級の選手がいたわけでもなく普通のチームだった。また勝負運にはなかなか恵まれず、「打倒早稲田!」を合言葉に臨んだ慶早戦は前半のリードを守れず敗退した。また前年に2部7位で3部降格となった悔しさを胸に臨んだ秋のリーグ戦では僅かの差で星を落とし、結局8勝6敗の戦績で2部復帰は果たせなかった。ただ、チームのメンバーは、試合では我々の代の分まで本当によく頑張ってくれたし、その経験が、翌年には我々が4年間果たせなかった慶早戦勝利、翌々年には、2部復帰につながったのだと思っている。また、3部の試合会場まで、遠路わざわざ足を運んでくださった先輩方の叱咤激励もあった。現役の時はあまりよくわからなかったが、今それを思い起し、その有難さを改めて感じている次第である。今般、部創設75周年を迎え、本塾も新たなステージに入る。昨年のインカレ優勝の試合を見て、過渡期を過ごした我々もそれを実感している。



#6長峰慶充



#7野間和昭

85年メンバー

部	長	新田 敏	
監	督	上谷 富彦	
コ	ー	チ 川浪 茂男	
A・	コ	ー	チ 伊藤 隆祥、長谷川 潤
主	将	棚橋 慶太(慶應義塾志木)	
主	務	小澤 徳(慶應義塾志木)	
選	手	北尾 征久(呉三津田)、長峰 慶充(慶應義塾)、野間和昭(慶應義塾)、鈴木 憲一(浜松西)、浅井 亮一(呉三津田)、瀧 通孝(武蔵)	
学生スタッフ		板倉 昭市(慶應義塾)、矢沢 正義(慶應義塾志木)	

女子

Data

慶早戦	○ K74 - 52W ●
トーナメント	2回戦
リーグ戦	3部
帝塚山戦	2勝
六大学対抗戦	



第43回慶早戦

2部復帰を目指して 川崎(宮田) 百合子

現役を離れて20年近くが経ちましたが、この度、記念誌に寄稿するにあたって忘れかけていた当時の事が、色々と甦ってきました。私たち4人(旧姓福田、野口、近藤そして宮田)が入部した時、本塾の女子部は2部でした。当時、公式戦の試合会場では、2部の試合と共に1部の筑波大・日体大・日女体大といった強豪の試合を、出場する選手という同じ立場で観戦することも多く、刺激的な環境にあったと今にして思います。残念ながら翌年3部に降格してしまい、それからは気持も新たに、立花監督そして今やインカレ優勝コーチでいらっしゃる佐々木先生の指導のもと、2部復帰を目指し日々の練習に励みました。3部になって初めてわかる、あの1部や2部の試合会場独特の雰囲気、熱気、レベルの高いプレーの数々、そういったものを実際体感した私達が卒業するまでに、何とか2部復帰を果たさなければいけなかったのです。

2年の冬から3年にかけては、プレーができるメンバーが6人にまで減った事もありました。練習メニューも限られたものになってしまい苦勞もありましたが、これ以上抜けることはできないという危機感と結束力で、乗り切ることができました。また、有望な新生を迎え、2部復帰への体制は整いつつあり

ました。

ところが、代が替わりこれからという時に、私自身が不覚にもけがをしまいチームには迷惑をかけてしまいました。それでも秋には、私達4年生全員スタメンというメンツを保ち、「今年こそは」と、意気込んだリーグ戦が始まりました。Cブロックでマークするのは、日本大学だけでした。入れ替え戦の権利を得るためにも最終試合にだけはしたくなかった日大戦、前半は33-28とリードしていたものの、逆転負けを期してしまいました。あまりにあっけない幕切れに、試合後涙も出なかった記憶があります。

2部復帰は次の代に委ねることとなり、戦績も数字のうえでは立派なもの残せませんでした。唯一誇れるのは、4年間慶早戦に勝って塾長招待に行けた事でしょうか。部の長い歴史の中ではわずかな点にすぎない4年間を過ごしたわけですが、私達一人一人にとってはいろいろな意味で中味のたくさん詰まった4年間でした。諸先輩方、後輩の皆さんが刻んできたそうしたいいくつもの点が、長い線となって歴史をつくってきたのです。そしてそれはこれからも末永く続くことでしょう。

バスケットボール部の更なる発展を願っております。



宮田、野口、福田 近藤
'84年日吉合宿



'85年帝塚山学園大学定期戦



第43回早慶戦(左から)福田有花、野口由記子、近藤立子、宮田百合子



'85年塾長招待会

85年メンバー

部 長	新田 敏
監 督	立花 雅男
コ ー チ	佐々木 三男
主 将	川崎 (宮田) 百合子 (戸山)
主務兼選手	遠藤 (福田) 有花 (国立)
選 手	豊島 (野口) 由記子 (雙葉)、野間 (近藤) 立子 (慶應義塾女子)



卒業式

1985年の出来事

- ・ソ連ゴルフバチョフ新書記長選出 (3/11)
- ・日本電信電話公社が日本電信電話株式会社 (NTT)、日本専売公社が日本たばこ産業株式会社 (JT) に民営化 (4/1)
- ・科学万博つくば'85開催 (3/17~)
- ・男女雇用機会均等法が成立 (5/17)
- ・日航ジャンボ機群馬県上野村墜落 (8/12)
- ・21年ぶりセ・リーグ優勝を果たした阪神が、日本シリーズで西武を破り初の日本一に (11/2)

主な大会

大会名	優勝チーム
・第37回インカレ (男子)	日本大
・第32回インカレ (女子)	筑波大
・第61回ALL JAPAN	松下電器
・第13回ユニバーシアード (神戸)	ソビエト連邦
・第13回アジア選手権 (クアラルンプール)	フィリピン



1986

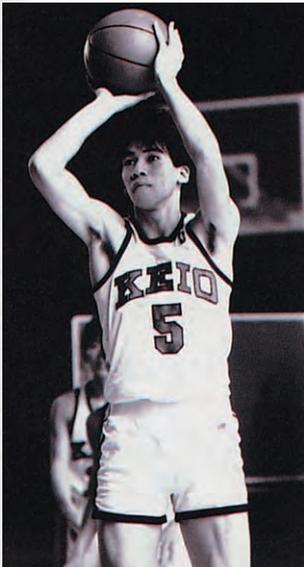
topics

4年ぶり慶早戦勝利
(強化リーグB早稲田を倒す)

男子

Data

- 慶早戦 ○ K70 - 68W ●
- 慶関戦 2勝
- トーナメント ベスト16
(65 - 77明治)
- リーグ戦 強化リーグC3位
- インカレ 不出場



#5副将 長田学



4年ぶり慶早戦勝利塾長招待会



#4湯浅栄人



増岡・佐藤・星・木竜・湯浅・加藤

●慶應義塾体育会バスケットボール部の4年間

慶應義塾体育会 バスケットボール部で過ごした4年間は、自分の人格形成において最も大きな影響を受けた期間と言っても過言ではない。当時我々は、日々の練習の中で、「喜び」「怒り」「哀しみ」「楽しみ」の感情を深く心に刻みながら、純粹で貪欲な勝利への執念を胸に秘め、全部員の気持ちを一つに集めて公式戦に臨む緊張感を楽しんだ。19〜22歳という多感な時期に同部での活動を通して得た体験は、我々を強い人間へと変えた。勝利の陶酔、敗北の恥辱と意気消沈は、自信と反省を我々に与えた。

1987年卒 の我々は、4年間負け続け、勝利の陶酔を味わったのは一度だけだった。当時我々は常に勝ちたいという気持ちを強く持ち、厳しい練習にも弱音を吐かず、勝利を目指して努力していたにもかかわらず勝てなかった。勝ち、負けはどちらであれ、プロセスである厳しい練習を乗り越えた結果として、時の流れと共に今ようやく自分自身で受け入れることができる心境になってきた。我々の4年間はバスケットボール部の歴史の中では日があたらない陰の部分かもしれないが、その陰の時代があったからこそ、また光ある歴史が再生した事を知って欲しいと思ひながら、本文を執筆した。87年卒のチームメートの熱い想いが詰まった4年間を振り返り、紹介したい。

87年卒 の代は、主将・湯淺栄人(塾高)、副将・長田学(旭川東)、副将・佐藤公治(塾高)、トレーナー・馬場信之(塾高)、滝澤聡康(藤枝東)、木竜秀樹(海城)、星和彦(福島)、加藤大仁(熊谷)、増岡康人(志木高)の合計9名。個性豊かなメンバーだ。彼らとは苦楽を共にし、時には大いに飲み・語り遊び、戦友としての絆を築いた。とても頼りがいのある仲間達だ。

我々には4年間で3人ものヘッドコーチの指導を受け、また1部、2部、3部へ毎年落ちた経験を持つ。このような代は、後にも我々だけが代であろう。唯一勝利の歓喜と陶酔を味わった試合が、4年生の慶早戦だった。世の中には因果律が存在する。「勝つ」「負ける」の結果には必ず原因が存在する。ではなぜ我々が負け続けたのか?そして何故1試合だけ上位チームに勝つ事ができたのか?

負け続けた原因を列挙すると、体格が劣る、体力が劣る、技術が劣る、センスが劣る、指導力が劣る、チームワークが劣る、勝利への熱意が劣る、目的意識の欠如、戦術が劣る、チーム方針の一貫性欠如、ベンチワークの稚拙さ...等々。4年間を通して、これらの要素を大きく改善させる事はできなかった。もちろん、今も昔も全ての代において同様の要素は大なり小なり抱えているが、我々の4年間は顕著だったと考えている。

特に体格では、大きく劣っていた。おそらく1・2・3部の全チームの中で、身長が一番低かった。体力・センス面でも同様に劣っていた。これらは、確かにバスケットボールをする上でとても不利な要素だが、他の面でカバーして初めて目標である上位クラス入りが可能である。つまり我々は、体格・体力・センス通りの結果しか残せなかったのだ。しかし我々は、一歩懸命に努力をし、厳しい練習にも耐え、勝つための方策を熟慮し、部員全員が勝ちを強く求めていたにもかかわらず、一つ上の結果を残すことができなかった。何故だろうか?

組織 が成功するためには、多くの条件を揃えなければならない。まずは、トップが目的である理念を明確にし、目標を設定し、その目的(心のあり方)と目標(具体的数値)に曇りの一点も無い事を繰り返し確認する。目的と目標が揃って初めて「道」ができる。その「道」を突き進むために、トップとNO.2,3...の幹部がトップと同じレベルでその目的と目標を文字通り共有し、一枚岩の下、その目的と目標を全組織に浸透させ、組織に帰属する全員がそれらを頭で理解すると同時に腹に落とし、自分の役割は何かを十二分に理解し、やるべき事を遂行し振り返り、改善策を講じて再度トライをしながら回して行く。文章にすると僅か数行の内容だが、実行するのは至難の業である。

我々には、チームのトップであるヘッドコーチを4年間で3人も持つ特異な経験を持つ。その間、チームの方針・目的は明示したか?目標は明確だったか?トップを補佐する幹部はトップと一枚岩だったか?トップは複数いなかったか?執行責任者である主将は十分にその役割を果たしていたか?主将を補佐する執行幹部(副将、マネージャー、トレーナー)は主将を十分に補佐できていたか?各部員はこのチームの為に自分は何をするべきか理解し考え行動していたか?もしもトップが十分にチームに時間を割く事ができないならば、執行責任者の主将がもっとリーダーシップを取るべきだったのではないか?プレーヤーの中に確執はなかったか?先輩・後輩の間に溝があったのではないか?各層において縦横のコミュニケーションは十分に取れていたか?試合に臨む戦術面での準備は充分であったか?

おそらく上記全ての要素が、当時の慶應義塾体育会バスケットボール部に内在していた。技術論や精神論(根性論とは別物)を、根付かせる基礎ができていなかった。つまり組織の「部員の心の「構え」」ができていなかった。だから、各プレーヤーとスタッフの強い勝利への想いがあるにもかかわらず、歯車が噛み合わず、「負け」の形を自然に作っていたと、今では考えている。

そのような4年間だったが、体格や体力をカバーするだけの技術・戦術が、高い水準に到達していた時期があるのも事実である。1年生の時のチームが、技術面では高い水準にあった。長田が190cm弱、佐藤先輩が185cm、伊藤主将が181cm、淵先輩が177cm、野間先輩が174cmのチビッコチームが、2mプレーヤーが並み居る1部で奮戦した。散々な結果だったが、このメンバーで到達できる最高の次のバスケットボールをしていたと、小生は考えている。このチームに誇れるものは、ディフェンス。当時学生では、かけ離れた攻撃力を持つ日大・日大を70点に抑えるディフェンスの実力を備えていた。「足元へ」の

湯淺 栄人

プレッシャーのあるマンツーマン、最強の2-3ゾーン、1-2-2ゾーン、3-2ゾーン、創造的なオフェンスのペイントプレー、それら全てが高い技術に裏付けられた内容であったと断言できる。毎日4時間を超える厳しい練習をこなした結果だ。

前述 したが、我々にも慶應義塾体育会バスケットボール部の歴史に残る、誇れる試合がある。4年生の慶早戦の勝利が、それだ。入部以来、慶早戦には3年連続敗北を喫し、負ければ通算成績が並ぶプレッシャーのかかった1戦だった。3部の慶応に対し、1部昇格が確実と言われていた2部の早稲田に挑んだ試合に勝利した。勝因は、準備が十分にできていた(戦術面に愛いがなかった)、勝利への執念、コートに出たメンバー全員が自分達の役割を十分に果たした、ベンチの適切な指示と対応、コート・ベンチ・部員全員の一体感、が幸運をも呼び込み、勝利に導かれたと感じている。この1戦こそが、我々が後輩に遺す事ができた唯一だが輝ける、誇れる遺産である。我々は、毎日きつい練習をしているのに負け続けていた中、「いったい何の為にバスケットをやっているのか?」との後輩達の問いに対する答えを明確に出した試合だった。後輩達に、自分達がバスケットボールに打ち込んでいる目的を身をもって示す事ができたのだ。「勝利の美酒に酔いしれる!」これこそが、学生スポーツの最大の目的であり動機だ。この慶早戦の勝利は確実に下の代へ受け継がれ、88年卒の代は3部において他のチームを圧倒する戦績を残し、堂々と2部昇格を果たした。

また当時、皆バスケットボールが好きでバスケットボールをするために入部したにもかかわらず、古いしきたり(スペシャルやその他面倒な事)に縛られて、プレーに集中できなかった時代でもあった。しかしこの勝利をきっかけに、勝つ事だけに集中する考え方が芽生えた。我々の代もスペシャルを殆ど行わなかったが、下の代からは完全にスペシャルが消滅し、伝説に変わった。一つ下の代が2部昇格とこのような旧弊を葬った事に対し、私は一つ上の代の主将として、本当に心から彼らを誇りに思う。

87年卒 の我々が、バスケットボール部で過ごした4年間を僅か数枚の紙に書き尽くす事は到底不可能故、この寄稿した内容に誤解や不快感を持たれる方がいるかもしれない。しかし、我々の「陰」の時代が、慶應義塾体育会バスケットボール部の歴史の中に埋没する事なく、その時代に精一杯生きて来たメンバーの真の姿を少しでもお伝えし、また輝く黄金時代の再生へと繋がる様子を多少なりとも感じて欲しい想いで綴った。我々の代は、慶早戦の勝利以外の結果を残す事はできなかったが、当時は誰にも負けない勝利への情熱を燃やし、どうしたら勝てるかを常に真剣に考えていたのも事実である。その情熱が、まだ足りなかったと言われる人がいるかもしれない。そうかも知れないが、少なくともプレーをしている本人達は、青春を賭す思いでプレーに打ち込んだ4年間に悔いはないし、心からこの4年間のバスケットボール部での活動をやり遂げた事に誇りを持っている。また、厳しい練習を一緒に乗り越え、苦楽を共にした仲間、どんな事が起こっても信頼関係が絶対に崩れる事がない一生の宝物だ。我々は、当時の甘美な勝利(卒業後20年以上を経た今でも、思い出で目頭が熱くなる)の成功体験と敗北の反省は、今確実に我々が社会人として成長するための糧となっている。社会の中で負けない心の「構え」を作り、不惑の歳から天命を知る歳への脱皮を図る思いでいる。その心の支柱は、間違いなくこの4年間で培った「強さ」である。

新 旧入れ替わり騒がれた満ちた、激動の時代を駆け抜ける事ができた我々は、幸せだったし、このような経験ができた事について、我代を代表して義塾のバスケットボール部と多大なるご支援を賜った諸先輩方に改めて感謝を申し上げます。そして、益々のバスケットボール部の発展を祈念申し上げます。

86年メンバー

部 長	新田 敏
総 監	督 上谷 富彦
監 督	曾我 眞
コ ー	チ 宮幸 朗
主 将	湯淺 栄人(慶應義塾)
主 務	飯野 英隆(慶應義塾)
選 手	長田 学(旭川東)、佐藤 公治(慶應義塾)、滝澤 聡康(藤枝東)、木竜 英樹(海城)、星 和彦(福島)、加藤 大仁(熊谷)、増岡 康人(慶應義塾志木)、今村 忠人(原町)
学生スタッフ	馬場 信之(慶應義塾)、勅使河原 誠志(慶應義塾)

女子

Data

慶早戦	○ K59 - 53W ●
トーナメント	ベスト16
リーグ戦	
帝塚山戦	2勝
六大学対抗戦	1位 (4勝1敗)



'86年 慶早戦

創部75周年に寄せて 加地（松本）和子

創部75周年おめでとうございます。この栄えある時に、記念誌に寄稿できることを、心より光栄に思います。

高校現役引退後、大学ではバスケットを続けなつもりでいました。ところが大学に入学直前に、活気溢れた練習を見学させて頂き、一番大事な「バスケットが好き」という気持ちを忘れていた事に気がきました。「苦しい時、顔を歪め息を荒げ下を向くのではなく、苦しい息を吐き切ってニコッと笑い飛ばす力強さ」そんなふうにならなりたいと、私は入部を決めました。

そして、その後の4年間はあっという間でした。

1年生の5月、3人の同期が皆辞めてしまいました。1年生は私1人となってしまう、周りの上級生は鬼のように怖い存在に

思え、ときには、自分の居場所を探した事もありました。ですが4年間で得た答えは、「居場所は自分で作る物」ということでした。居場所が無いのは、自分の実力・努力が足りないのです。努力に努力を重ねて、「君がいなければ困る!」となれば、そこに自分の居場所ができるのです。

ユニバーサルジムで鍛え始めてから3ヶ月で心肺機能もアップして、「死ぬほど苦しい練習」が楽になり始めました。それまで、「練習がキツイなら、それ以上に自主トレで走り込まなければ、練習は楽にならない」と、思っていた私には、「やはり大学バスケットは、科学的だなあ」と、とても感心したことを覚えています。

不思議と、体力がついてくると自主トレの時間も増えました。夕暮れ、街灯のついた競技場を一人で走っているとき、何故私(我々)は、わざわざ苦しいことを選んでしているのかと自問自答したり、「人間叩かれて強くなるんだ!」と、自分を叱咤激励したりしました。

そして4年生の時、最後の秋季リーグ戦は2部昇格をかけて、埼玉大が最大の焦点でした。

塾チームは、唯一の4年生(私)がベンチに居て3年生主体、埼玉大は、4年生がコート上に2人いました。ずっとシーソーゲームでしたが、最後1分で埼玉大の4年生がカットインを決め、その後連続してシュートを決められ、それで勝負がつきました。不甲斐ない自分が悔しく、強く強く印象に残り、その後社会人となった私の行動規範ともなりました。

私にとって、OGや上級生、下級生が同期でした。みなさんが、何よりもよく私を支えてくださったお陰で、最後の年は4年間で一番楽しい1年となり、こうして寄稿させて頂く幸運にも恵まれることが出来ました。本当にありがとうございました。

監督の立花さんは、いつも私を気にかけて、沢山の話をしてくださいました。そして、一人でいる時の私にちょっとした声をかけてくださった佐々木先生。おふたりとも本当にありがとうございました。毎年、大事なリーグ戦直前になると、肩を脱臼したり、額を割って縫うことになったり、本当に申し訳ありませんでした。

バスケットボールを続けてよかった。心より本当にそう思います。塾バスケットボール部よ、本当にありがとう!!



慶早戦勝利!

86年メンバー

部長 新田 敏
 監督 立花 雅男
 コーチ 佐々木 三男
 主将 加地 (松本) 和子 (慶應義塾女子)



女子主将 松本 男子主将 湯浅

1986年の出来事

- ・スペースシャトル・チャレンジャー打ち上げ直後に爆発、乗員7人全員死亡 (1/28)
- ・ソ連チェルノブイリ原子力発電所で大規模な爆発事故発生 (4/26)
- ・東京サミット開催 (5/4~)
- ・英チャールズ皇太子とダイアナ妃来日、ダイアナフィーバー (5/8)
- ・道路交通法改正、シートベルトの着用が原則義務化 (11/1)
- ・伊豆大島三原山が209年ぶりの大噴火 (11/21)

主な大会

大会名	優勝チーム
・第38回インカレ (男子)	拓殖大
・第33回インカレ (女子)	筑波大
・第62回ALL JAPAN	松下電器
・第10回世界選手権 (マドリッド)	アメリカ

1987

topics

男子強化リーグB・女子2部へアベック昇格

男子

Data

慶早戦	● K60 - 68W ○
慶関戦	2勝
トーナメント	ベスト16 (57 - 59明治)
リーグ戦	強化リーグC1位 (13勝1敗) (2部自動昇格)
インカレ	不出場



慶早戦集合写真



#7岩崎 高治



ベンチ 主務飯野・新田部長・小田監督・宮幸コーチ・トレーナー木塚

ピリオド 渡邊 信治

2001年のルール改正で、バスケットボールはハーフ制からピリオド制へと大変革を遂げた。今やバスケット用語になった「ピリオド」だが、もともとは「時代」という意味もあるのだ。

我々の「時代」、塾バスケットボール部は、関東学生リーグ3部にいた。当時は、新興勢力が台頭し、古豪も、かつての名門校も、負ければ下部リーグへ墜落してゆくという下克上の時代だった。塾バスケットボール部も、その大きなうねりの中に巻き込まれていた。

小田監督、宮幸ヘッドコーチ、それに決して体格的に恵まれているとはいえない我々メンバー。自分たちのことはもちろん、負ければ部の存続にもかかわる危機的な状況を打破しようと、本当に厳しい練習に毎日明け暮れていた。

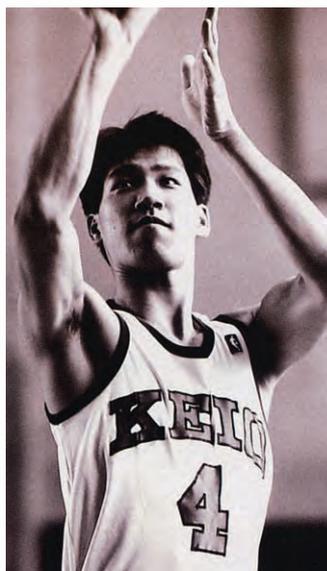
しかしながら不思議なことに、あの頃を振り返ってみると、一番心に残っているのは、「苦しさや辛さ」と相反する「楽しさや喜び」なのである。

勝つことより、負けることが多かったから3部まで落ちた。負けるのは辛いし、つまらない。その上怒られ、なじられ、怒鳴られ続けたら、誰だって気力を失ってしまう。プラスと同様、マイナスも急加速していくのが、「若さ」というエネルギーの特徴だ。監督、コーチが指示したことは、「走れるなら全力で走れ。走れないなら走らなくていい。決めるのは自分だ」というのだった。下部リーグへの転落もありうる連日のプレッシャーの中で、選手一人一人が信頼され、任される「誇り」が、チームを一つにし成長させた。そして、戦いのあとの「勝利の喜び」が、更にチームを強くしていった。

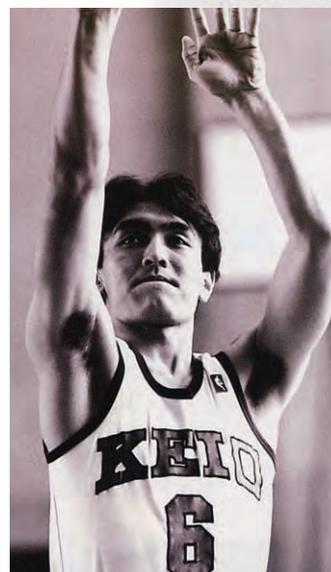
そのシーズン、我々のチームは圧倒的な強さ（13勝1敗）でリーグ優勝を飾り、念願の2部復帰を果たした。その後の塾バスケットボール部の隆盛は、今更語ることもないだろう。

ところで、「ピリオド」にはもうひとつの意味、「終わらせること。ピリオドを打つ」がある。我々は間違いなく、塾バスケットボール部の最も苦難な時代にピリオドを打った。

1988年のチームは、その後の塾バスケットボール部に新しい繁栄をもたらすきっかけとなった、本当に素晴らしいチームだった。



主将 渡邊信治



#6 菊池正則

87年メンバー

部	長	新田 敏
監	督	小田 恒義
コ	ー	チ 宮幸 朗
主	将	渡邊 信治（仙台二）
主	務	飯野 英隆（慶應義塾）
選	手	岩崎 高治（慶應義塾）、小金丸 隆則（慶應義塾志木）、菊池 正則（立 川）、木竜 英樹（海城）
学生スタッフ		木塚 孝幸（慶應義塾）、岡 俊左 （慶應義塾志木）、佐野 正（慶應 義塾志木）

女子

Data

慶早戦	○ K58 - 53W ●
トーナメント	ベスト16
リーグ戦	3部優勝、 (入替戦勝利2部昇格)
帝塚山戦	1勝
六大学対抗戦	



'87年5月31日 トーナメント第1日 VS玉川大

谷口 (刈田) こゆき

思い出を語ると、キリがない。下級生達との語らいが楽しかったボール磨き、「マイケル」「ビビンバ」などという不思議な名前のフォーメーション、合宿で佐々木三男先生や立花雅男監督と飲み交わした美味しいビール、立花監督による合宿賞、ビックリするほど上手な歌姫や芸人もいた。1年の下田夏合宿所、夜中の侵入者事件のような珍場面もあれば、記念館裏階段ダッシュに泣いた夏練もあった。下級生を集めて「必ず勝たせるから、4年生と一つになってくれ」と泣いて頼んだあの時、ストレッチの時に眺めた記念館の天井にあったしみ、日吉並木道に銀杏が敷いた金色のじゅうたん、練習後に語り合ったミスタードーナツ、そしてみんなで抱き合って喜んだ2部昇格の瞬間。すべてが脳裏に鮮やかに思い起こされる。それこそが、私たちが慶應義塾体育会バスケットボール部にいた証なのだろう。

昭和最後の卒業生である5人は、それぞれが違った入部だった。④刈田こゆき(こゆき)は姉を追いかけ、⑤溝上淳子(かめ)は国分寺高校からニューフェイスとして、⑦肥谷令子(ひや)は当初主務を希望し、⑦鈴木昌美(まさみ)は1ヶ月両親に入部を隠しながら、⑧藤井夕美(ゆみ)は2年生からの入部だった。ゆみは中等部から、こゆき、ひや、まさみは女子高からの朋友だ。女子校では、五明桂一監督・武田浩コーチの指導の下、入部当時4部(夏練は5人の時期も)から始まり卒業時には2部まで昇格した(阿部牧子・栗田恭子・深瀬公子は、そ

の頃からコートを共にした仲であり、彼女らはその後1部まで昇格させている)。

入部当時、大学は2部から無念の降格をされており、何とか復帰を願い練習は毎日緊迫していた。しかし、3年生までの3年間、最後の一步で勝つことができず、2部昇格の夢は叶わなかった。それでも、力は蓄えていたのだと思う。

4年の春、かめがアキレス腱を切るアクシデントも乗り越え、トーナメントでは、1部日本女子体育大学に破れはしたが、後半の得点は、慶應がリードしたことが忘れられない。ベスト16。「いける」という実感が湧いてきた。その後、かめは手術とリハビリを経てリーグに間に合わせた。精神力が起こした奇跡だった。チームは勢いづいた。こうなれば前進あるのみ。一つひとつの場面で、できる限りの能力を発揮する練習をしたことを覚えている。妥協は、一切なかった。部員全員が、学年を超えてそれぞれに厳しかった。それでも不思議なことに、練習がとても楽しかった。本当に楽しかった。機は熟していたのだろう。

そして入れ替え戦で立教を破り、無敗で2部昇格を成し遂げた。先輩方の想いを胸に4年生が一丸となり、またすばらしい下級生達に支えられ、学年を超えて一つになった結果であろう。素晴らしい体験だった。

あの場所にいられたことに感謝し、部員であったことを誇りに思っている。



'86年6月 慶早戦(早稲田記念会堂)



'87年11月1日 2部入替戦 VS立教大「コート」



「ベンチ」



「心はひとつ」



「勝ったぞ!」



'87年6月 慶早戦(記念館にて) 「5人娘」

87年メンバー

部長 新田 敏
 監督 立花 雅男
 コーチ 佐々木 三男
 主将 谷口(刈田) こゆき(慶應義塾女子)
 選手 早野(溝上) 淳子(国分寺)、村上(肥谷)
 令子(慶應義塾女子)、川越(鈴木) 昌美(慶
 應義塾女子)、藤井 夕美(慶應義塾女子)

1987年の出来事

- ・国鉄の分割・民営化され、JRグループ7社発足(4/1)
- ・石原裕次郎死去(7/17)
- ・ニューヨーク株価大暴落(22.6%下落)、世界同時株安に陥る(10/19)
- ・日本航空完全民営化
- ・大韓航空機爆破事件(11/29)
- ・NTTが携帯電話サービス開始
- ・利根川進マサチューセッツ工科大学教授がノーベル生理学・医学賞を受賞

主な大会

- | 大会名 | 優勝チーム |
|-------------------------|---------|
| ・第39回インカレ(男子) | 日体大 |
| ・第34回インカレ(女子) | 筑波大 |
| ・第63回ALL JAPAN | 松下電器 |
| ・第14回ユニバーシアード
(ザグレブ) | ユーゴスラビア |
| ・第14回アジア選手権(バンコク) 中国 | |

1988

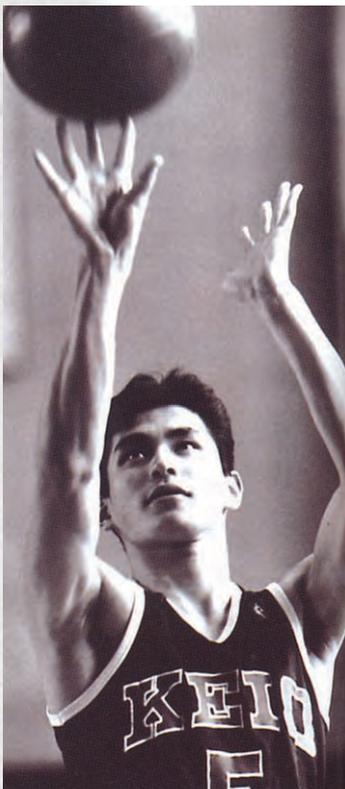
男子

Data

慶早戦	● K60 - 75W ○
慶関戦	2勝
トーナメント	ベスト16 (51 - 81青山学院)
リーグ戦	強化リーグB 5位
インカレ	不出場



夏合宿にて



#5副将 池田弘樹



主将 秋田誠一郎



トレーナー伊藤 権田A・コーチ 宮幸コーチ 小田監督 主務田代 新田部長
慶早戦でのベンチ

主将決定 秋田 誠一郎

この度は、慶應義塾体育会バスケットボール部創部75周年誌発刊に当たり、思い出寄稿の機会を与えて頂いたことに、深く感謝申し上げます。正直申し上げて、自分自身、4年間数ある出来事の中で、思い出深い事の一つ、二つに絞ることは難しいです。述べたいことが沢山ある中、平成元年卒組を代表して、皆にとって一番思い出に残っている試合、合宿、練習等を、私の独断で記載してしまうことに若干抵抗がありました。しかし、ここは主将の名に免じて、敢えて自分にとって印象的であった出来事を記述させていただきます。

当時の主将決定方法は、4年生が引退した直後から3年生がミーティングを行い、次世代の主将を決定します。当時、ほぼ毎日部室で話し合いが持たれ、候補は3人に絞られていました。

大方の意見は、「秋田しかない」とのことでしたが、当の私は、「高校とは違って、大学の主将の役割は責任重大。自分には務まらない」と答えて、スナナリ決定されませんでした。この時の自分の心境を振り返ると、かっこ良く言えば、「とにかく思いっきりプレーすることだけ」に専念出来れば良いという気持ちが強く、主将としてチームをまとめ引っ張って行くには、負担が重過ぎると感じていました。しかしながら、正直なところは、面倒な役割などはご免だと思っており、自分のことだけしか考える余裕がありませんでした。

私は、小学校時代アメリカで育ち、バスケットは小学校3年から始め、帰国後、烏山中・慶應義塾高校を経て慶應義塾大学と、一貫してバスケットボールと付き合ってきました。バスケットに対する情熱は人一倍強く、生来の負けず嫌いの性格から、練習・試合中にチームメイトに対して妥協を許さない面が、裏目に出ることが下級生の頃には多々ありました。今思えば、同期だけでなく、先輩・後輩や監督・コーチにとって「問題のある選手だったかな」と、反省するばかりです。このような「我」の強い私を、当時補ってくれたふたりの人物が、チームメイトにいました。一人は、1年先輩の岩崎高治さんの存在です。岩崎さんは、塾高時代から大学までずっと一緒にプレーし、私の良き理解者であったと思います。同じガードというポジションでオン・ザ・コートでは、岩崎さんは、余計な事は決して言葉で言わず、常に行動で示してくれていました。おそらく私みたいな性格は、言葉でガミガミ言われるより行動で示される方が効果的だと、分かってくださっていたのだと思います。このような岩崎さんと一緒にプレーできた事で、自分も上級生になった頃に、ようやく岩崎さんの「静かな指導」に気づき(もっと早く、高校時代から気付いていれば良かったのですが)、「人を思いやる心、人間性の大きさを、良き先輩から見習わなければ」と感じました。

そしてもう一人は、同期の橋場慶太です。橋場も帰国子女で、高校までアメリカでサッカーを中心に各スポーツに取り組み、バスケットは大学からという初心者でした。しかし、彼のバスケットに取り組み姿勢は、チームで一目置かれている存在でした。橋場は、オン・ザ・コートでは、常に前向きな姿勢で取り組み、チームに対してポジティブなエネルギーを与えていました。彼と練習中、一対一では恐らく負けたことは無かったと思いますが(私の記憶違いであれば、お許しを)、常に私を本気してくれました。また、オフ・ザ・コートでは、彼は冷静で落ち着いていて、私がプレー中に気付かなかった点や、チームの

雰囲気等、各種アドバイスを広範囲にわたりしてくれました。私は、これらに対して、「初心者が何を言っている」という気持ちを持つことは決して無く、むしろ、自分が不思議なほど、橋場のアドバイスを素直に受け止めていたような気がします。これは、彼の普段からバスケットに対する情熱・姿勢に、私がすっかり心打たれていたためだと感じておりました。

主将決定を了承したのは、再度考えた結果、良きチームメイトに恵まれたお陰で多少なりともここまで成長できた自分自身があり、「ここで更に頑張らねば」という気持ちと、また、「以前とは違う秋田」を同期も感じて推薦してくれた訳で、これに応えなければという気持ちが、大きく働いたことです。

我が同期は、プレーヤー7人、スタッフ8人計15人と例年より人数が多い代でした。通常これだけ多いと、まとまりが悪くなりがちですが、我が代は、非常に仲が良く、いつでも一つにまとまることのできるのが、最大の長所である代と自負しております。同期が、全員当時の私をフルサポートしてくれるという確信があったからこそ、私も最後には大役を快よく引き受け、多少なりともチームの牽引役に注力しようと決意した次第です。

塾バスケットボール部に4年間在籍したこと、及び主将という貴重な経験をさせて頂いたことが、卒業後16年経った今、大変役立っております。これも、先輩・後輩、並びに監督・コーチ・スタッフを含む本場に「良き塾バスケット仲間」に恵まれ、自分が人間として成長できたことだと心から感謝しております。

最後に、創部75周年に先立ち、2004年度のリーグ戦優勝、全日本学生制覇という快挙を成し遂げた現役諸君を心から祝福すると共に、今後、塾バスケットボール部が一層飛躍することを祈念致します。

88年メンバー

部	長	新田 敏
監	督	小田 恒義
コ	ー	チ 宮幸 朗
A・	コー	チ 権田 哲也
主	将	秋田 誠一郎 (慶應義塾)
主	務	田代 憲一 (鹿児島ラ・サール)
選	手	奈良 安洋(浜松西)、池田 弘樹(武蔵)、 松本 立(修猷館)、宮崎 浩(四日市)、 松坂 文夫(慶應義塾)、橋場 慶太 (Rollinghills)、平田 典史(慶應義塾)
学生	スタッフ	伊藤 岳志(慶應義塾)、児島 英 伸(慶應義塾)、藤田 道則(西条)、 井上 英明(慶應義塾)、原口 仁(慶 應義塾)、松島 修(慶應義塾志木)

女子

Data

慶早戦	● K45 - 50W ○
トーナメント	2回戦
リーグ戦	2部12位 (入替戦2部残留)
帝塚山戦	1勝
六大学対抗戦	



'86年(2年) 男女とも早慶戦に勝利し、大きな輪で“丘の上”を熱唱

美川 (阿部) 牧子

私達の代は、先輩・後輩にとっても恵まれた代でした。厳しさの大切さを先輩から学び、下からのフォローで結果を残せたと思っています。

入学前から入部していた“賢い頑固者”都西高出身、左のカットインが天下一品のゆっこ(G)、後半は怪我でスタッフ寄りになった、様々な場面での奇妙な言動で人を煙に巻く“方言の悪魔”米子東高出身のさなこ(F)、女子高から上がって来たベテランの専任マネージャー“仕事の鬼”あわこ(主務)と、ゴール下の別人“お笑い芸人”あべっこ(C・主将)の計4名。お互いを認め合って心の支えにし、血液型も手伝ってか少人数でしたが、良いバランスでした。

1年生の時 から「今年こそ2部昇格!」を掲げて活動し、涙の2年間を送った後の昇格実現は、最高!そこへ辿り着くまでには、卒業していらっしやった先輩方の礎は勿論ですが、1つ上の代の圧倒的な「プレー面・精神面の強さ」は、群を抜いていたと思います。

ですから、引退で彼女達を失った4年次の私達の苦労たるや……。慶早戦では、現在に至る連敗の第1回目を喫し、2部でのリーグ戦では、1つの対戦相手と土日の2連戦というハードスケジュールを初体験し、全敗しました。死に物狂いで戦

う事で手にした“得点王”と“リバウンド王”でしたが、表彰式の数日後には、まだ3部降格の掛かった入替戦が残るという、素直に喜べない状況でした。

さらに、入替第1戦目は、4点差で落とすという崖っぷち。来るところまで来て、心の中に出来た開き直りと変な余裕。翌日の入替第2戦目、ほとんどの方々の予想を裏切る形で最後の最後に、輝かしい大差をつけた勝利で2部に残留しました。前年2部に昇格した時の有無を言わさぬ喜びとは全く異なる「責任を果たせた安堵感」の様な喜びでしたが、苦しいシーズンを戦ったあのチームにとっては、一丸になる事を実感できた非常に大きな一勝だったと思っています。

同期の男子連中とは、今だに歯に衣着せぬ良い関係が続いています。男子は総勢15名で約半分がスタッフだったため、時間を作っては女子の練習相手にも良く来てくれました。上を目指す我々にとって男子の力は目標にするには好ましく、彼等と互角に戦えるようになった事が、試合での自信に繋がった事は言うまでもありません。

この代で良かった!「生涯の宝を得た!」と私は思っています。



1年塾長招待会 スーツの色が問題に…



阿倍の得点王とリバウンド王の賞状とトロフィー



2年春合宿



2年新歓 同期全員が揃っている唯一のもの

88年メンバー

- 部長 新田 敏
 監督 山口 建
 コーチ 佐々木 三男
 主将 美川 (阿部) 牧子 (慶應義塾女子)
 主務 川藤 (栗田) 恭子 (慶應義塾女子)
 選手 高野 (増田) 裕子 (西)、金子 (坂口) 直子 (米子東)



卒業式 内海さん、佐々木先生と

1988年の出来事

- ・カルガリー冬季オリンピック開催 (2/13～)
- ・青函トンネル開通、青函連絡船の運航終了 (3/13)
- ・東京ドーム完成 (3/17)
- ・瀬戸大橋開通 (4/10)
- ・遊漁船「第一富士丸」と海上自衛隊の潜水艦「なだしお」が衝突、死者30人 (7/23)
- ・ソウルオリンピック開催 (9/17～)

主な大会

- | 大会名 | 優勝チーム |
|-------------------|--------|
| ・第40回インカレ (男子) | 中央大 |
| ・第35回インカレ (女子) | 愛知学泉大 |
| ・第64回ALL JAPAN | 日本鉱業 |
| ・第24回オリンピック (ソウル) | ソビエト連邦 |



topics

強化・並列リーグ再編、1~6部編成へ

1989

男子

Data

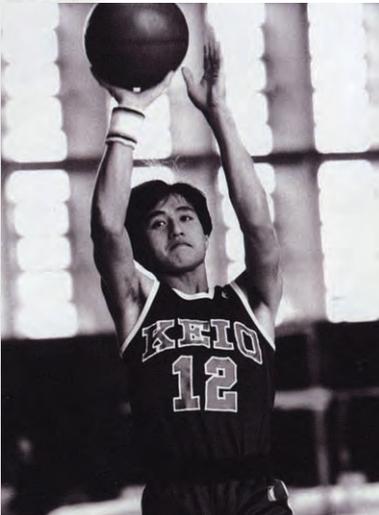
慶早戦	● K75 - 78W ○
慶関戦	2勝
トーナメント	ベスト16 (72 - 78日本大)
リーグ戦	2部 6位
インカレ	不出場



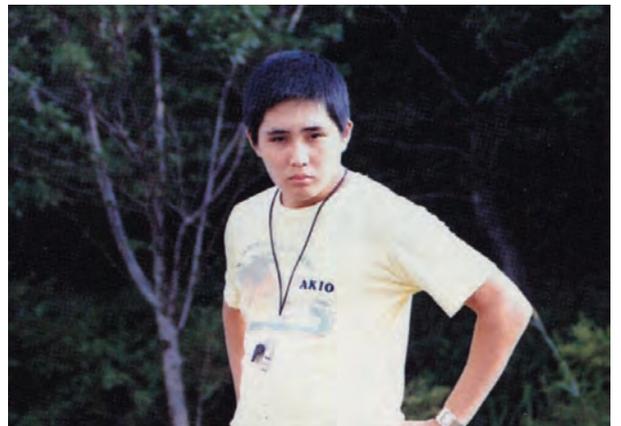
トレーナー 飯田浩



'90年 卒業式



主将 柳沼和登志



中等部トレーナー 椎津晶夫

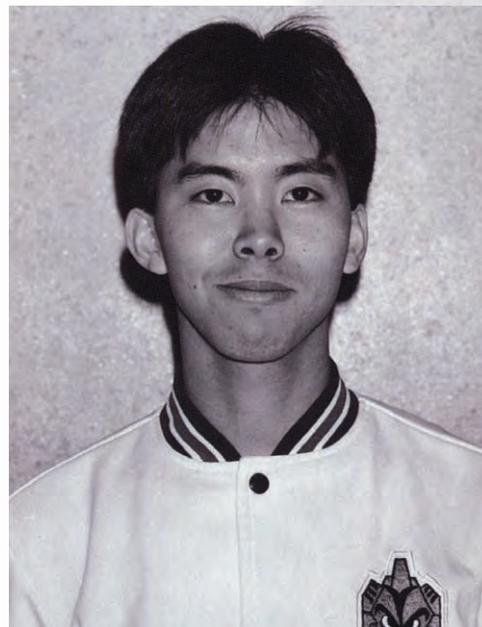
飯田 浩

私が、普通部から大学まで塾バスケットボール部に所属することができたのは、体育会としても一貫教育の組織化ができていたからだと思います。普通部に入学した時に、大学からコーチとして山口さん(昭和60年卒)が就任され、贅沢にも中学生の練習に大学生にも来て頂いていました。当時練習中、佐藤さん(昭和60年卒)の膝が腿に入り(モモカン)しばらく動けなくなったのを覚えています。その後、塾高でも大学生に日々練習相手をしていただき、身近な先輩が多く入部されたこと、すなわち慶應独特の校風があったからこそと思っています。

我が代は、入学した春先に何人かが入部しましたが、結果的に主将柳沼、主務福島、中等部トレーナー椎津の4名となりました。代替わりしてからは、人数が少ないため試合・合宿と一人でいくつもの荷物を抱えて移動するのですが、それなりにジャンケンをして6個ボールだけは避けていた気がします。大学に入り、まず記念館の正面入り口のフロアで体操・ストレッチの長いバージョンを教えられました。練習時、主将湯浅さんに初めて本番で指名された時は、間違えないようにと緊張しました。その後どの代まで続いたのでしょうか？ちなみに、「代替わりスペシャル」はひとつ上の代まででした。

入部当時3部でしたが慶早戦での勝利、2年生になり3部優勝2部昇格と、徐々にですが這い上がっていったという、75年の歴史の中では、厳しくも貴重な経験をさせてもらった世代だったと思っています。どんなに厳しい時期でも、それを支えてきたOBの方々、監督・コーチ、現役選手・スタッフ、先輩・後輩の繋がり、そして何よりも同期の絆があったからこそ、今の「強い慶應」があり続けるのではないのでしょうか。女子の同期2人山田(旧姓深瀬)、藤原(旧姓内田)とも一昨年の45年ぶり優勝の試合を見に行きましたし、家族ぐるみで誰かの家でホームパーティーができるのも、人数が少ない代の特権でしょうか。現在、福島がアシスタントコーチに就任しており、何らかの形で同期が今のチームに役立っていることは嬉しい限りです。

人生の中で熱くなれた時期があった、そして今でも熱くなれるものがあるのは、慶應義塾体育会バスケットボール部があり続けるからであり、「常勝慶應」を目指しこれからもOBとして応援していきます。



主将 福島朗太



No.5 実吉邦純

89年メンバー

部	長	新田 敏
監	督	小田 恒義
コ	ー	チ
主	将	権田 哲也
主	務	柳沼 和登志(安積)
選	手	福島 朗太(慶應義塾)
学生スタッフ		実吉 邦純(桐朋)
		飯田 浩(慶應義塾) 窪田 正利(金沢)、椎津 晶夫(慶應義塾)

女子

Data

慶早戦	● K52 - 58W ○
トーナメント	2回戦
リーグ戦	2部11位
帝塚山戦	2勝
六大学対抗戦	



3年 妙高にて夏合宿

私（ふーここと山田）の大学時代は、今振り返ってみると相当惨めで情けないものだった。

2年で2部昇格を経験できて本当にラッキーだった半面、先輩達が残してくれたステージでは、如何せん勝てなかった。自分個人としても不本意な働きしかできず、佐々木先生との意思疎通も図れないまま、何をどうやっても叱責されるばかりだった。やってもやっても満たされず、ただただ苦しみもがく日々が続き、幼稚舎から続いていたバスケットを生まれて初めて「やめたい」と思った。

だからだろうか…私には細かな記憶は皆無。思い出せるのは自身の不甲斐なさ、そして何よりチームを牽引すべき主将として何もできなかったという深い後悔の念。それなのに、そんな自分が慶應女子高の監督を長く務め、今も可愛い後輩達に囲まれて幸せな思いを沢山させて貰っている。やはり本心から「バスケットをやって良かった」と思っているのだ。何故だろう？

明確な理由 はともかく、確信を持って言えるのは、「私はバスケットが好きで好きでたまらない。そして、その好きなバスケットを続けたおかげで、

「世代・性別・学校を問わず、多くの最高の仲間達に出会えた」と、いうことだろう。やはり一番の出会い、同期うちとの出会いだっただけでなく、どんな時も私を支え続けてくれた彼女の存在なくして、私の大学時代は成立しない。今も変わらず、私にとって人生の最高のパートナーだ。男バス同期も同様だった。不甲斐ない主将についてきてくれたちよをはじめ可愛い後輩達。その他全ての出会いが、私の一生の宝であり、人生の糧である。

勝負を真剣に追求する体育会だからこそ、誰もが勝つために全力を尽くしている訳で、全ての代が好成績を残せば最高だろう。でも、だからと言って、慶應でバスケットをする意義は、決して成績だけが全てではないと信じている。どんな苦境にあっても「やっぱり慶應でバスケットをやって良かった」と、心から思えて貰えるよう、益々バスケットが好きになって貰えるよう…現役時代には、後輩達に何も残してあげられなかった分も、私なりに確信を得た慶應バスケットの素晴らしさを、これからも、うちや仲間達の力を借りながら後輩達に伝えていきたい。

自分がバスケットをやめられなかったこと、そしてやって良かったと思えている訳が、この75周年の節目に少しだけ分かった気がする。

ふーこの原稿を読んで私（うちこと藤原）も付け加えさせていただくことにした。

私は、4年のときの事を思い返すと心が苦しくなる。これは、自分だけだと思い込んでいた。なぜなら、ふーこは、わが代主将にして最高のプレイヤーであったからだ。この点に疑問のある人はいないことを、確信している。ふーこは、自分の悩みは周りには一切みせなかった。私には、慶應バスケットを背負って戦う勇姿しか思い出せない。

今思えば、勝手な話だ。当時の私は、自分のことで精一杯で、まったくふーこのことをわかっていなかったのだ。まさか同じように苦しんでいたなんて、知らなかった。

後悔することはたくさんあるけれど、大学4年間の体育会生活で得たものは、今でも私の人生の基幹になっている。現役時代、ふーこの苦悩には気付けなかったが、それでも彼女のすごさは理解していたと自負している。卒業して進む道は分かれたけれど、会った瞬間に以前通りに話せるパートナーだ。色々他のスポーツもやってみたが、今でもやっているのはバスケットだけだ。バスケットをやりたいために大嫌いなジョギングをやり、体力維持に努めている。いつまでたってもやめられそうにない。

最後に、心の底に眠っていた記憶を整理する機会を与えてくださったことに、心から感謝したい。



4年慶早戦 No.5 うち(内田伸子)



4年慶早戦 No.4 ふーこ(深瀬公子)

89年メンバー

部長 新田 敏
 監督 山口 建
 コーチ 佐々木 三男
 主将 山田(深瀬) 公子(慶應義塾女子)
 選手 藤原(内田) 伸子(戸山)



4年慶早戦 うち・ふーこ



3年 新歓同期と



3年 うちとふーこのツーショット

1989年の出来事

- ・昭和天皇崩御、平成元年がスタート(1/7)
- ・中国天安門事件(6/4)
- ・消費税導入、付加価値税3%(4/1)
- ・参院選で自民党惨敗、参院で与野党逆転(7/23)
- ・連続幼女誘拐殺人犯人、宮崎勤逮捕(7/23)
- ・ベルリンの壁崩壊(11/11)
- ・ルーマニアのニコラエ・チャウシェスク政権崩壊(12/22)

主な大会

大会名	優勝チーム
・第41回インカレ(男子)	日体大
・第36回インカレ(女子)	日体大
・第65回ALL JAPAN	三菱電機
・第15回ユニバーシアード (デュイスブルグ)	アメリカ
・第15回アジア選手権(北京)	中国

1990

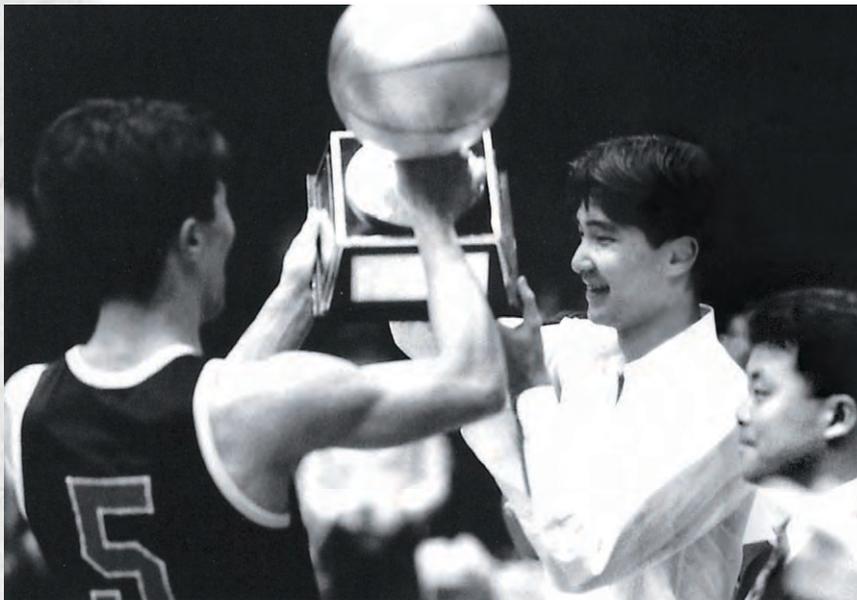
topics

8年ぶりのインカレ出場
 (3部1位 国際武道大との接戦を制し、出場権獲得)
 夏期練習に、臨時コーチ ステュ・インマン氏 (NBA
 マイアミ ヒート) 招聘

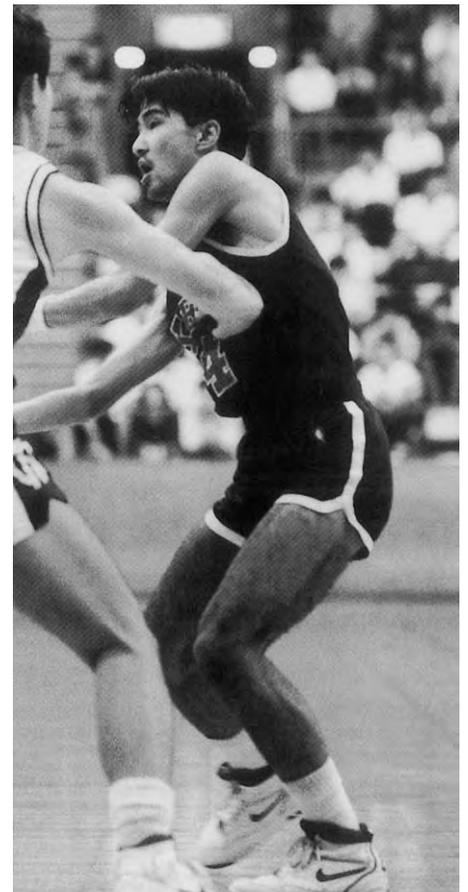
男子

Data

慶早戦	○ K79 - 63W ●
慶関戦	2勝
トーナメント	ベスト16 (59 - 95日本大)
リーグ戦	2部 3位 (10勝4敗)
インカレ	ベスト16 (75 - 83中央)



主将川北と共に慶早戦優勝杯を手にする副将柿花



主将 川北聖

柿花 祥太

75周年おめでとうございます。

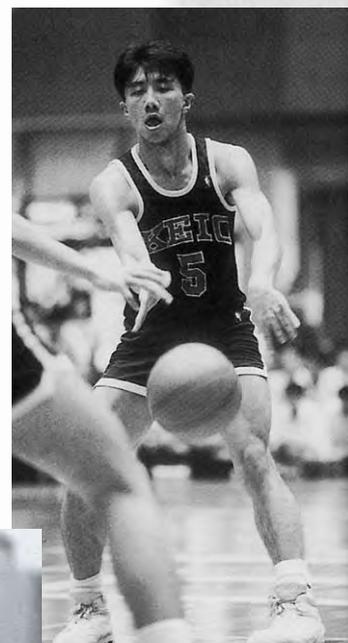
我々男子同期入部は、6名でした。川北(主将)、西川(主務)以外は、全て外部生の田舎者集団で個性が強く、KEIOバスケット部の歴史のなかでも、珍しいくらいまとまりのない代ではないでしょうか。このような我々が4年間楽しく(?)過ごせたのも、運良くまとまりのある上級生や下級生に挟まれたお陰だと思っています。

田舎の草バスケットボールしか知らない私が、まず入部して驚いたことは、ボール磨きでした。

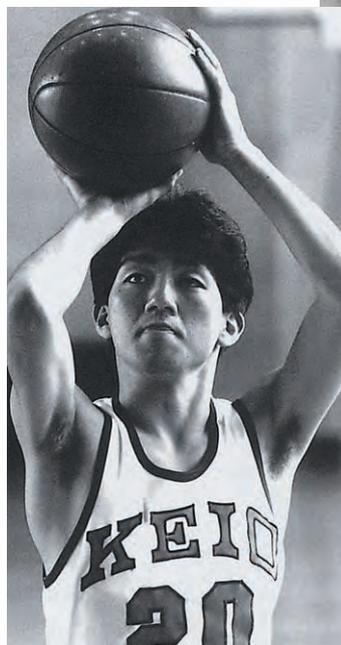
恥ずかしながら高校までバスケットをしながら、磨いたこともなければ「ボールは磨くもの」ということを、知りませんでした。また、(1年生に対するイジメともいえる)多種多様の複雑な体操・ストレッチ、歌(塾歌・若き血・部歌)のテスト……。そしてなによりも上級生・諸先輩方の威圧感、輝かしい伝統、等々。何もかもが新鮮であり、また強烈な印象を受けたことを、鮮明に記憶しています。

入部当時は3部で苦汁をなめ、2部昇格後には1部昇格を目指して一丸となりましたが、目標を果たせませんでした。唯一の勲章は、3年連続で涙をのんだ慶早戦に、4年生で初めて勝利した時でした。OBの先輩方を含め大騒ぎをし、「勝利の美酒に酔う」とは、まさしくこのことだと実感しました。

私は、ここでチームワークと一体感の醸成の重要性を、強く叩き込まれたと思います。渡り鳥は、遠い故郷に帰るときに先頭を中心に、V字型になって飛んでいきますが、前の鳥が羽ばたくと後に上昇気流が起き、後続の鳥たちはその上昇気流に乗り少ない力で飛べるそうです。先頭が疲れると、元気な者が前に出て、先導して皆で海を渡って行く。おんぶされている鳥や、引っ張ってもらっている鳥はいません。皆がもたれ合っているのではなく、助け合っているのです。現役の皆さんにも、このような思いを持ちながら、頑張ったいと思います。



副将 柿花祥太



学連委員 中山剛

90年メンバー

部	長	新田 敏
総	監督	小田 恒義
監	督	水野 俊文
H・	コーチ	伊東 弘泰
コ	ー	権田 哲也
主	将	川北 聖 (慶應義塾)
主	務	西川 直樹 (慶應義塾)
選	手	柿花 祥太 (丸亀)
学生	スタッフ	中山 剛 (佐賀西)

女子

Data

慶早戦	● K33 - 44W ○
トーナメント	1回戦 (42 - 68早稲田)
リーグ戦	2部16位 (1勝10敗)
	入替戦3部降格 (対白鷗女子短期)
帝塚山戦	2勝
六大学対抗戦	



引退試合となった東京六大学対抗戦の後

あの日、あの時、あの瞬間、そして今の私達7人

この75周年記念誌のお話をいただいたとき、正直いって戸惑いました。卒業して年賀状のやりとりくらいに終わっている同期が、どのくらいこの作業に協力してくれるのだろうか。不安に駆られながらも連絡したところ、同期全員から反応があって、徐々にボルテージが上がってきました。会ったり、メールでやりとりしているうちに、少しずつ、現役当時言えなかった本音がポロポロ、涙までもがポロポロ。勝てなかった4年生の時の体験は、今でも固く封印して記憶から抹消してしまいたいくらいの思い出です。けれど、この記念誌が後押しをしてくれて、皆で少しずつ向かい合うことができました。

ただ過去の呪縛からそう易々と抜け出せるわけではなく、まだまだ口に出せないこともたくさんあります。でも、これから長い時間をかけて、話せることから話して、お互いが向き合って当時は振り返ることで、今の人生を支えあったり、元気づけたりすることができる。それができるのは、当時惨めな姿をさらけ出しても、じっとつきあってくれた仲間だからだと思います。この記念誌寄稿は、卒業以来はじめて、私達7人を再びつなげてくれた記念にもなりました。当時のエピソードを交えつつ、一言ずつ分担して綴ることにします。まずは私から。

★1年のとき、怖いもの知らずで2部昇格。4年のときは、あり地獄から抜け出せないまま3部降格。2部で3年間プレーしたことは、選手として幸運でした。でも、次のステップへ進めませんでした。苦労して2部昇格までの道のりを築いた先輩方や後輩たちに、また来た道を歩ませてしまったことへの責任。「結果が全て!」という言葉の重みを今も痛感しています。(＃4 ちよ・主将～岩本千代)

★春練の思い出：皆で腹筋回数を測定した時、何百回かを過ぎ一人抜け二人抜けする中、私は止め時が分からず困っていました。千回を越える頃、待っていても仕方ないと他のプレーヤーは外練へ。卒業して15年。10回でピクピクしてしまう現在では、考えられない筋力だったなあと懐かしく思います。(＃5 にいむ・副将～新村明子)

★体育会の4年間：それは挫折の連続でした。あんなに素晴らしい先生・先輩・同期の仲間にも恵まれながら、何一つ結果を出す事が出来なかった。あの4年間の経験は、今でも私の貴重な試金石です。自分の事だけを考えて行動しているのか、それとも全体を見て行動しているのか。本当にありがとうございました。(＃6 じゅん～村木淳子)

★試合をする以上、勝つことが全て。勝てないのは、勝ちたい気持ちが足りないから、他人に厳しくなれないのは、自分に厳しさが足りないから・・・ないない尽くしの4年間だった。それでも、同期から至難を乗り越えていく力・諸先輩から迷ったときに自分に厳しくする力を学んだから、15年経った今、それがいろいろな所で、私自身を支えてくれている。(＃7 ちか～堀米知佳子)

★六大学選抜メンバーによる、台湾遠征。親子かと思える程の体格差があり、試合結果は惨敗でした。でも、フリースロー時の動き出しの早さに驚いたこと、大物相手にカットインできた喜びは、覚えています。様々なプレースタイルを織り合わせ臨んだ国際試合で、慶應でバスケをしてきたことが活かした、貴重な経験でした。(＃8 みき～内匠美樹)

★自分がシュートを任されるフォーメーションで臨むチャンスに恵まれた、最後の慶早戦。もっとシュートを決めて、もっと守って、もっと強く、そして何より勝ちたかった。しかし大歓声の中で、慶早戦でプレーできた経験と喜びは、これからもずっと自分の財産であり続けるでしょう。特別な試合でした。(＃9 ゆうこ～高尾有子)

★私たちの新チーム結成と合わせて、新コーチが就任しました。プレースタイルが一変したことで、選手や、それまで頻繁に記念館に来てくださったOG・OBまでもが、急激な変化にうまく順応できない転換期となりました。勝利という結果をなかなか残せない年代でしたが、アドバイスや励ましの言葉を掛け続けてくださったOG・OBの皆様には、今でも大変感謝しています。(＃10 さち・主務～秋元幸代)



'90年の夏合宿 猫苗代にて



'90年4月新入部員を歓迎し迎える新チーム



女子部室 雛祭りケーキを囲んで



最初で最後(!?) 男女同期の集合写真

90年メンバー

部 長	新田 敏
監 督	山口 建
コ ー チ	加藤 大仁
主 将	岩本 (植松) 千代 (慶應義塾女子)
主務兼選手	秋元 幸代 (浦和明の星)
選 手	新村 明子 (西) 村木 (位田) 淳子 (四日市)、堀米 (伊藤) 知佳子 (慶應義塾女子)、 内匠 (吉田) 美樹 (慶應義塾女子)、高尾 (近藤) 有子 (慶應義塾女子)

1990年の出来事

- ・大阪で「花の万博」開催 (4/1~)
- ・礼宮さま、紀子さま結婚の儀 (6/29)
- ・イラクがクウェートに侵攻、原油高騰 (8/2)
- ・ドイツ統一が実現 (10/3)
- ・初の民間宇宙飛行士にTBS宇宙特派員、秋山豊寛氏 (12/12)
- ・東京株式市場の平均株価が9ヶ月で半値、バブル経済破綻

主な大会

大会名	優勝チーム
・第42回インカレ (男子)	日体大
・第37回インカレ (女子)	日体大
・第66回ALL JAPAN	三菱電機
・第11回世界選手権 (ブエノスアイレス)	ユーゴスラビア

1991

topics

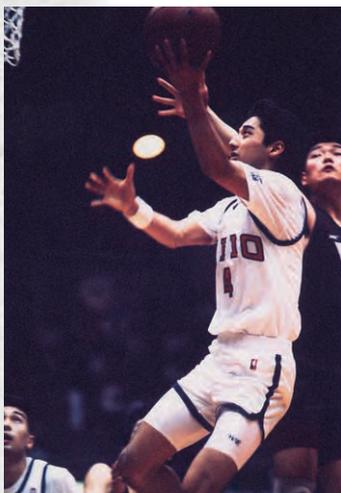
2部リーグ優勝（1部昇格へ）
 インカレ'77年4位以来の5位入賞
 阿部 理（3年）全日本学生に選抜され、
 ユニバーシアード大会へ出場

フリースロー放棄廃止

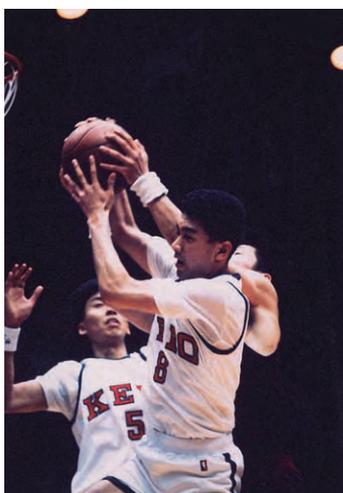
男子

Data

慶早戦	○ K79 - 63W ●
慶関戦	2勝
トーナメント	5位（82 - 73専修）
リーグ戦	2部 1位（13勝1敗・1部昇格）
インカレ	5位（72 - 58専修）
全日本総合	1回戦（92 - 96能代工業高）



#4主将 金子健史



#5稲葉志晃 #8小沼洋一



慶関戦



慶早戦タイムアウト

金子 健史

4年の時2部で優勝し、久しぶりの1部復帰を果たすことが出来た。優勝はもちろん嬉しかったが、それはある意味当然の結果であり、3年の時に1部復帰を果たせなかったことが、今となっては本当に残念である。4年生の時に1部で戦いたかったという想いは、考えれば考えるほど今も強く残っている。

入部する前年に3部で優勝し、8年ぶりに2部に上がった。入学前の3月に記念館へ練習を観に行っていたが、自分の視界に入ってきた光景に愕然とした。コート、選手のレベル、学生コーチ、ワイヤーで支えている木製のバックボード、部室等練習の環境が大学のものとは到底思えなかった。私のアメリカの高校以下だったし、NCAAのDivision 1とまでは言わないまでも日本を代表する大学であれば、施設が整っていて当然と思っていた。「こんな環境で、本当に強くなれるのか?」と思ったが、同期に稲葉や小沼など、近年稀に見る優秀な選手が集まったこともあり、先輩他からの期待が大きかったと思う。しかし、1・2年生の時は2部で全く振るわず、1部昇格どころか、最後の1戦まで3部降格を免れるのが、精一杯だった。当時、2部以下常連チームと練習試合をしてくれる1部チームも少なかったし、内部・外部の悪環境下、自分達に1部の力があることを、心底確信することが出来なかったと思う。2年生の新人戦では、1、2年生主体でリーグ戦優勝を果たした日体大と対戦し、前半は9点差位(48-39)で食い下がるも、終わって見れば50点の大差で負けた。

有望選手がいるだけでは勝てない。そこで環境を整えることを実行して頂いたのが、伊東弘泰ヘッドコーチである。「明るく、楽しく、そして強くをモットー」に練習の効率化、ウェイト・トレーニング設備の確保、人の最適配置(チーム全員の役割分担の徹底)などが計られた。また、その中でも一番影響が強かったのが、米国よりインマン氏を招待して頂いた事だと思う。本場米国のインマン氏のコーチングは、チーム全体に刺激を与えた。私自身はバスケットを米国で教わったため、スムーズに彼のバスケット理論を理解し、吸収することができた。このような環境作りによって、選手のやる気・自主性が生まれ、コートでの自信を深め、練習によって鍛えた体力を活かし、4年の時はトーナメント5位、リーグ戦2部優

勝、インカレ5位という好成績を残せた。

2部優勝が3年生の時達成出来なかったのは悔しいが、最終学年で2部とはいえ13勝1敗で優勝出来た事で、一層喜びが大きかった。近年は、インカレで優勝する等素晴らしい成績を残しているが、今の環境を更に良くし、慶應らしいバスケットを伝承し、人を惹きつける、魅力あるバスケットをして欲しいと思う。日本のバスケットボールの発展のためにも。



臨時コーチ ステュ・インマン氏来日

91年メンバー

部	長	新田 敏
総	監督	小田 恒義
監	督	水野 俊文
H・	コーチ	伊東 弘泰
コ	ー	長谷川 潤
主	将	金子 健史 (W・ウィットマン)
主	務	細川 明快 (札幌南)
選	手	稲葉 志晃 (修道)、湯浅 光則 (春日部)、佐藤 洋 (佐野)、小沼 洋一 (高崎)、森脇 亮 (佐伯鶴城)、平田 大介 (津)、吉崎 正雄 (慶應義塾)、山中 晴彦 (慶應義塾)、五十嵐 隆晴 (慶應義塾)
学生	スタッフ	角田 知之 (筑波大付駒場)、駒田 純久 (慶應義塾)

女子

Data

慶早戦	● K41 - 71 ○
トーナメント	1回戦
リーグ戦	3部
帝塚山戦	2勝
六大学対抗戦	4位 (1勝3敗)





主将 田浦葉子

91年メンバー

部 長	新田 敏
監 督	山口 建
コ ー チ	加藤 大仁
A・コーチ	阿部 牧子
トレーナー	山内 賢
主 将	田浦 葉子 (金沢泉ヶ丘)

1991年の出来事

- ・多国籍軍がイラク空爆開始 (1/17)
- ・多国籍軍がクウェート開放、湾岸停戦 (2/27)
- ・新都庁舎落成、都庁が丸の内から新宿副都心に移転 (4/1)
- ・信楽鉄道列車衝突事故、42人死亡 (5/14)
- ・雲仙普賢岳で噴火、火砕流発生 (6/3)
- ・ソ連保守派のクーデター失敗、ソ連共産党解体 (12/25)

主な大会

大会名	優勝チーム
・第43回インカレ (男子)	日体大
・第38回インカレ (女子)	愛知学泉大
・第67回ALL JAPAN	熊谷組
・第16回ユニバーシアード (シェフィールド)	アメリカ
・第16回アジア選手権 (神戸)	中国

1992

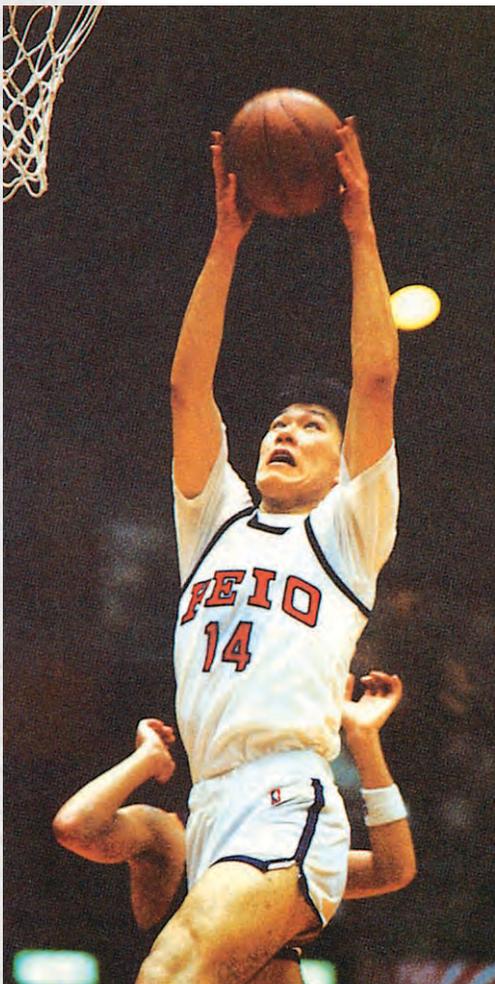
topics

'83年以来9年ぶりの1部リーグ復帰
第50回慶早戦（テレビ神奈川放映）

男子

Data

慶早戦（50回）	● K53 - 54W ○
慶関戦（60回）	1勝1敗
トーナメント	8位（75 - 90順天堂）
リーグ戦	1部 6位（4勝10敗）
インカレ	ベスト16（47 - 65拓殖大）



阿部 理



慶早戦



夏合宿にて

9年ぶりの関東1部リーグ 入江 範昌

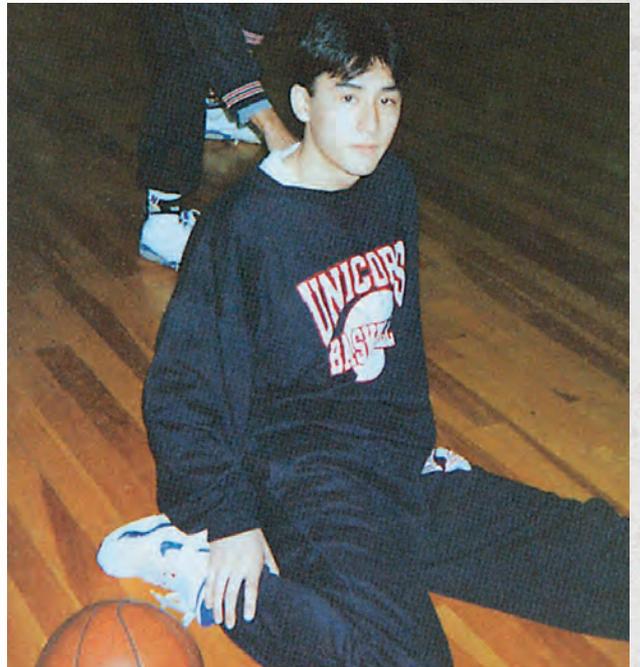
私が主将を務めた1992（平成4）年度は、本塾が9年ぶりに関東1部リーグに復帰した記念すべき年となった。私が2年生だった平成2年、伊東弘泰さん（S45年卒）がヘッドコーチとして就任され、「明るく、楽しく、そして強く」をスローガンとして掲げ、頭を使ったバスケットを追求した。夏合宿には、アメリカからスチュー・インマン氏を招聘し教を請うなど、学生だった我々にとっては、これまで経験したことのない新鮮な体験の中で、徐々に自信と実力をつけていったように思う。

そして、1991（平成3）年2部リーグで優勝、見事1部復帰を決めた。私が4年生となった年に、1部リーグで戦えるということは、大変恵まれたことであり喜ぶべきことであったが、主将である私の心の中は、期待と興奮5割、不安と重圧5割といった感じであったことをよく覚えている。というのも、金子さん・稲葉さん・小沼さんといった1部昇格の立役者である1つ上の先輩が抜け、戦力ダウンが否めない状況に加え、同期の阿部（当時のエース）が春のシーズンで前十字靭帯断裂という大怪我で、リーグ初戦に間に合わないという不運が重なっていたからだ。

一方、当時の1部リーグといえば、日体大には後藤・沖田・古田、日大には折茂・長谷川、中央大には佐古・節政など、一時は日本代表に名を連ね、今も現役で日本のバスケットボールを引っ張っているようなすばらしい選手が多く在籍し、1部残留も厳しい状況であった。そのような状況下で始まったリーグ戦、初戦の相手は日大であったが、2試合ともダブルスコアで負けるという散々な幕開けとなった。第2週は日体大であったが、1試合目には完敗したものの2試合目の後半には、怪我で欠場していた阿部が、リーグ戦初出場を果たした。結局試合には負けたものの、このときの阿部の復帰は、得点源がほとんどないチームにとって、外国人助っ人のような頼もしさがあったことを覚えている。

第3週以降、筑波大、専修大、青学大に1勝ずつして、迎えた最終週、相手は同じく3勝していた順天堂大であった。この2試合で勝ったほうが6位で1部残留、負けたほうが7位で入れ替え戦という、非常に熱い戦いとなった。1試合目は10点差で勝利し、2試合目は9点差以内であれば、負けても6位という優位に立ったはずであった。ところが、勝負はそんなに簡単ではなく、2試合目は途中20点差をつけられ、私は試合をしながら一時は入れ替え戦を覚悟した。

最終的には3点差で試合には負けたものの、6位となり1部残留を決めた。我々は、試合に負けたにもかかわらず、優勝したかのような大騒ぎをした。知らない人が見ていたら、変に思ったに違いない。勝敗を決めたのは、最後まで勝ちたいという気持ちが強かった、我々の「精神の勝利」ではないかと信じている。試合後、1部残留という使命を果たせたことで、それまで肩にのしかかっていた大きな荷物を下ろしたような気がして、自然に涙が溢れ出た。



主将 入江範昌

92年メンバー

部	長	新田 敏
総	監督	水野 俊文
監	督	伊東 弘泰
H・	コーチ	藤田 晃
コ	ー	チ 加藤 賢治
主	将	入江 範昌（大分舞鶴）
主	務	霊山 剛太（東京学芸大付大泉）
選	手	赤峰 信（西）、坂口 正二郎（慶應義塾志木）、 藤 幸博（佐賀西）、清田 卓生（湘南）、阿部 理（仙 台二）、藤掛 史生（修道）、大野 康則（慶應義塾）
学生	スタッフ	佐々木 貴司（盛岡一）、小堀 正 裕（慶應義塾）、鈴木 雅治（慶應義塾）

女子

Data

慶早戦	● K58 - 64W ○
トーナメント	1回戦 (59 - 105東海)
リーグ戦	3部Cブロック3位 (5勝2敗)
帝塚山戦	2勝
六大学対抗戦	3位 (3勝2敗)



焼酎と煮込みで思い出すこと

山崎 (弓削) いく子

「ここは学生時代、よく連れてこられたところなんですよ」。久々に訪れたその場所は、親父さんと女将さんの白髪が多少増えた以外は、何ひとつ変わっていません。通称「ひょうら」にあるその焼き鳥屋は、12年前と同じ小道でひっそりと赤提灯を下げ、引き戸を開けると電球の明かりが、私を一気にその時代に引き戻してくれた。

ここで何度、歓迎を受け、先輩から激励され、勝利の美酒を味わい、悔し涙を流したことが。

現在、報道の仕事に携わっているため忙殺される毎日を送っているが、ときには取材先とともに一杯飲んで、交流を深めることもある。ふと、その店が気になって行ってみると、ちゃんと営業していた。

焼酎を傾けながら、私は取材先の方に説明した。「ここは私

の大学の先輩たちが、みんなボトルを入れたりして、後輩にごちそうしてあげるんです。ふだん厳しいことを言っている分、ここでは面倒みてくれるんです」。とはいえ、先輩たちはビール瓶の先をこちらに向けながら、「重いんだけど」とグラスを空けることを要請し、その愛情はどのみち厳しいのだった。飲んでいううち、なぜか現役時代に苦労したことばかり甦ってくる。私たちの代は人数が極めて少なく、日によっては3対3がやっと組める程度だった。OGやOB、男子部員、時には高校生の手助けをもらいながら、やっていくしかなかった。

本当に、「ふんばる」とはあのことだったんだなあと、今になって思う。それこそ、ここに書き記すほどのすばらしい成績はない。でも、その当時のメンバーは、間違いなく体育会の女子の中では体力的にダントツだった。トレーニングジムで、「ハアッ！」と気合いの雄叫びをあげながら、持ち上げるベンチプレスのプレートの枚数が、他の運動部員の倍だったりして、それは見事に差があった。

ただ、パワーや体力だけでは、バスケットができないものも当然わかっていた。

当時、アメリカで最新だったさまざまな戦術をチームが取り入れ、全員が理解できるまでに時間がかかった。長年固まっていたシュートフォームも、直された。最初は、みんな抵抗を感じていたかもしれないが、信じないと何も始まらないのがスポーツ。今思えば、ある時期にチームの集中力が一気に高まりだしたのは、信じたことによって微かな手ごたえが感じられ始めた時だった。

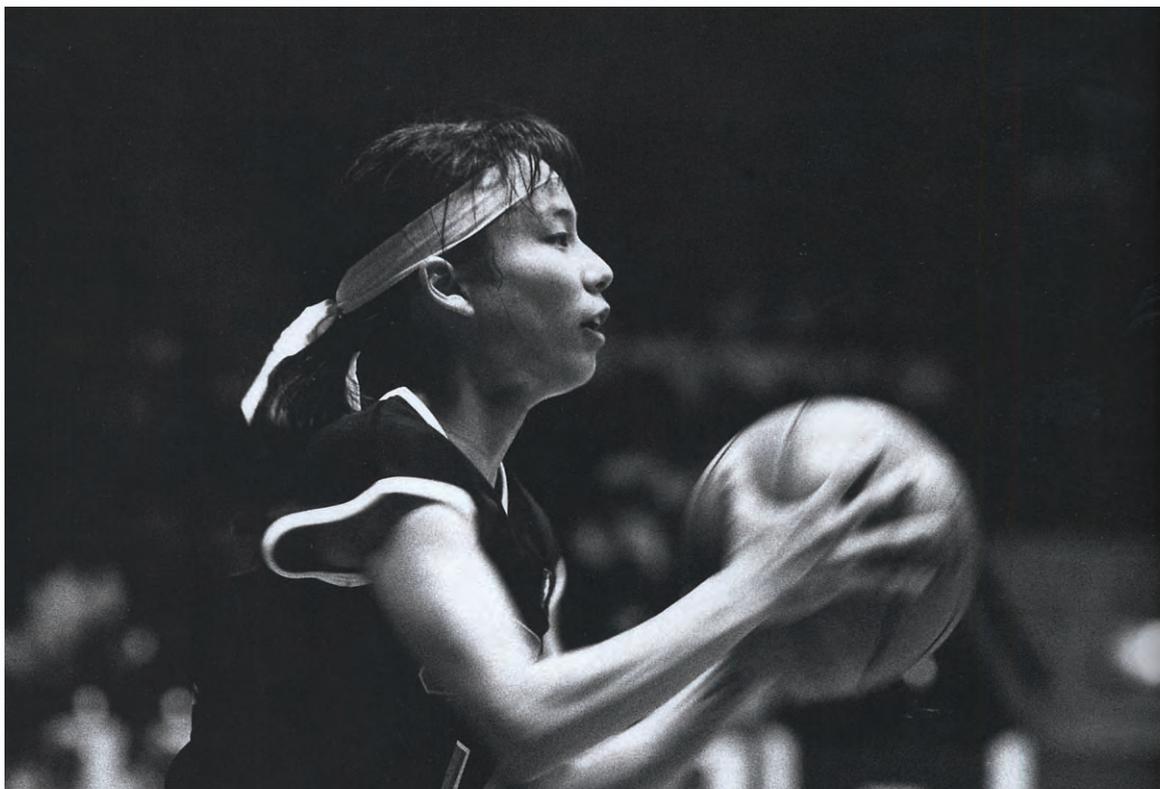
信じること。戦術を。仲間を。そして自分を。

そんな熱い思いに駆られると、つい行ってしまうのがその店だった。そして、終電間際まで仲間と語ってしまうのだった。

「今、あんな気持ちで仕事できているんですかね」

焼き鳥屋の壁にかかる色とりどりのメニューの短冊に目をやりながら、冷奴と煮込みをつつき、振り返った。まちがいはなく、学生時代にバスケットで手に入れたものは、輝かしい成績や栄華なんかではない。でも、好きなことに熱くなる、という気持ちは今も変わらない。

今日もそんな思いを胸に、事件現場を駆け回っている。



主将 弓削いく子

92年メンバー

部 長	新田 敏
監 督	山口 建
コ ー チ	加藤 大仁
A・コーチ	阿部 牧子
トレーナー	山内 賢
主 将	山崎 (弓削) いく子 (駒場)
主 務	井川 (望月) 利恵子 (慶應義塾女子)



モチ&カン

1992年の出来事

- ・アルベールヴィル冬季オリンピック開幕、最後の夏季オリンピックとの同年開催 (2/8~)
- ・東京佐川急便事件発覚 (2/14)
- ・牛肉・オレンジ輸入自由化 (4/1)
- ・国家公務員の週休2日制スタート (5/2)
- ・PKO協力法成立 (6/15)
- ・バルセロナオリンピック開催 (7/25~)
- ・不況が深刻化、日経平均15,000円割れ (8/11)

主な大会

大会名	優勝チーム
・第44回インカレ (男子)	日本大
・第39回インカレ (女子)	愛知学泉大
・第68回ALL JAPAN	日鉱共石
・第25回オリンピック (バルセロナ)	アメリカ



1993

topics

テレビアニメ「スラムダンク」放映開始（10月）

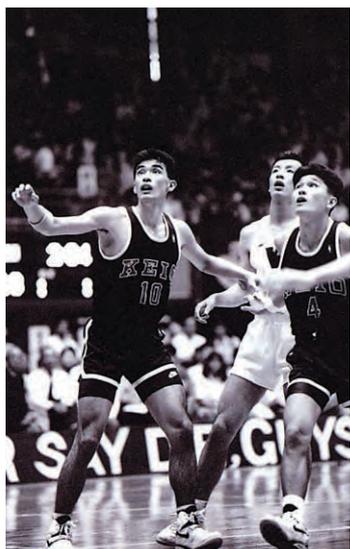
男子

Data

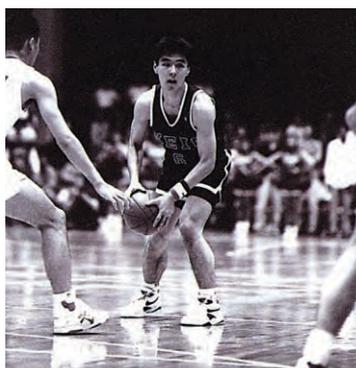
慶早戦	● K58 - 62W ○
慶関戦	2勝
トーナメント	ベスト16 (59 - 64明治)
リーグ戦	1部 8位 (1勝13敗 2部降格)
インカレ	ベスト16 (55 - 83拓殖)



夏合宿にて



#10鈴木仁 #4主将 山形隆行



#6牧真矢



夏合宿にて



藤田監督以下 代々木第2にて

山形 隆行

2部降格。私達の代を語るのに、これを避けて通ることはできません。

金子さんの代に13勝1敗で9年ぶりに1部に昇格した後、入江さんの代で踏ん張って残留。そして、私達の代になろうという時の内部・外部からの見方の厳しさは、並々ならぬものがありました。

私達が入部したのは1990年、慶應湘南藤沢キャンパス開校の年でした。シカゴブルズ全盛期の幕開けで、ちょうど学生バスケット界で黒いバッシュがはやり始めた頃でした。入部当初は右も左も分からず、同期達と一緒に楽しく、ただがむしゃらに頑張るだけでしたが、そのうち徐々に周りが見えるようになりました。当たり前のことですが、その年に在席する学生たちだけの戦力で戦わなくてははいけません。入学・卒業があり、まさにその年度に与えられた人材で試合を戦うということだけを見れば、大学は入れ替えのあるプロの世界よりも厳しいかもしれません。また、その中で年次という仕切りもありました。実力のある人が上に立つときは、あまり気にすることはないかもしれませんが、逆の場合、上級生は頭を悩ませます。私達の代は、一つ上と一つ下に有能な人材がいる、ちょうど端境期にありました。

人が集まると必ずそこには、「空気」が生まれます。バスケットも同じでした。試合に出ているスタメン5人の中には、独特の空気がある間にか出来上がりますし、メンバーが変わる度にその空気も変わっていきます。ベンチの空気もあるし、A・Bチームの練習にもそれぞれありました。この空気が読めなかったり、分かるうとしなかった場合、途中から試合に出てもその人はあまり活躍できません。チーム内で求められる役割を果たすということは、空気を読むのと同じだと思います。私達の代は、いつの間にかこの空気を読むということ、自然と身につけていたような気がします。試合に出て活躍できる人材が少ないのであれば、とにかく「慶應らしさというものを下の代につなげよう」と、考えました。

マイアミヒートのインマン氏から教わったことの一つに、「サクリファイス・スピリット」というのがありました。チームのために自分を殺して他を生かす、犠牲心という意味です。私達の代の出した答えは、自分達の代そのものが、この精神

を実践するということだったのかもしれませんが、ひいては、「それが慶應らしさを伝えていく」ということかと、考えました。

ただ、自分達自身を、見失ったまま卒業したわけではありませんでした。4年生最後のリーグ戦、0勝13敗で迎えた最後の専修大学との試合で、結果が出せました。それまで、惜しい試合はいくつかあったのですが、最後の最後で、なんとか一勝をもぎとることが出来たのです。たかが一勝ですが、私達にとっては大きな価値ある一勝でした。私自身は、リーグ戦の途中で怪我をしたためベンチ入りが出来ず、代々木第二体育館の敵チームのベンチ前の応援席で、初勝利の瞬間を見届けました。でも、スタッフを含む同期みんなが、しっかり仕事をこなしてくれました。副将だった宮下君の活躍と、勝利後にベンチ前でかけたエールが、とても眩しかったのを覚えています。白星という結果を残せて、とにかく良かった。苦しい時に、頑張ることが出来た。2部へ降格して申し訳なかったという気持ちもありましたが、一勝することで、きっちり慶應の伝統を伝えることができた、信じています。

10年後の一昨年、1部復帰を心から嬉しく思ったのは、言うまでもありません。最後に、あの時期にご指導くださいましたOB・OGの方々に、改めてお礼申し上げますと同時に、心から敬意を表したいと思います。

93年メンバー

部	長	新田 敏
総	監督	水野 俊文
監	督	藤田 晃
コ	一	宮幸 朗
主	将	山形 隆行 (神戸)
主	務	秦 浩之 (国際基督教大付)
選	手	宮下 達也 (長野)、牧 真矢 (大分舞鶴)、三本 康一郎 (高松商)、梅原 稔 (光陵)

学生スタッフ 村本 暢之 (金沢泉丘)

女子

Data

慶早戦	● K47 - 79W ○
トーナメント	1回戦 (40 - 64杉野女子)
リーグ戦	3部3位 (7勝2敗)
	入替戦 (47 - 67横浜国立) 残留
帝塚山戦	2勝
六大学対抗戦	4位 (2勝3敗)



日吉の部室前にて

「人数との戦い」、現役当時を振り返る時、まずこの言葉が頭に浮かびます。私達が在籍した4年間、数字上の総部員数は2桁で推移していましたが、実情は異なり、非常に少ない戦力でやっていたというのが実感です。

とりわけ厳しかったのは、1年生のシーズン終了後でした。当時の4年生7人が引退され、新しいチーム作りが始まる中、練習の参加者が5人に満たないこともあり、試合ではプレイヤーが欠け、専任主務の先輩がコートに立ったこともありました。

現役時代で最も印象深い試合は、このような状況を経て迎えた3年生時の慶早戦でした。この日のことは、今でも鮮明に

思い出されます。当時の慶早戦は、早稲田で行われていましたが、この年は第50回記念大会ということで、代々木第二体育館での開催でした。憧れの代々木のコートに立つということが非常に嬉しく、同期3人で渋谷駅から会場へ向かいながら、いつも以上に興奮していたことを覚えています。

試合では、各選手が持ち味を存分に発揮しながらチームはまさしく一丸となり、全員が勝ちに行く姿勢を前面に押し出していました。接戦でありながら、誰もが勝利を信じていました。しかし、結果は6点差での敗戦でした。膠着状態となってしまった終盤の展開を悔やむ一方、強敵早稲田を相手に善戦したことは、その後大きな糧になりました。

いくつものナンバープレイを覚え、コーチの指導を理解、体現し、目指すべきチームの姿に近づくことは、精神的にも肉体的にも厳しく、容易ではありませんでした。そのような中、スタッフをはじめ、OB・OGの方々、男子部員までもが練習に参加してくださり、私達は心強く思い、練習に集中することができました。また、試合に足を運んで頂き、コートを離れた場でも沢山の励ましを頂いたことは、チームにとって大きな力となりました。このように、多くの方々に支えられながら、時間を掛けてようやく辿り着けたのが、この「慶早戦を戦ったチーム」だった。こうした思いが、3年生時の慶早戦を忘れられないものになっています。

そして、この経験は、その後の私達の支えの一つとなりました。4年生では新しいコーチを迎え、最高学年として模索することも多かった中、秋季リーグ戦(第43回関東女子学生バスケットボールリーグ戦)では7勝0敗で3部Aブロック1位通過を果たし、2・3部入替戦に出場することができました。入替戦の結果は、横浜国立大学を相手に敗戦(47-67)、3部残留が決定し、2部昇格の目標を後輩に託し、私たちの現役生活は終わりました。

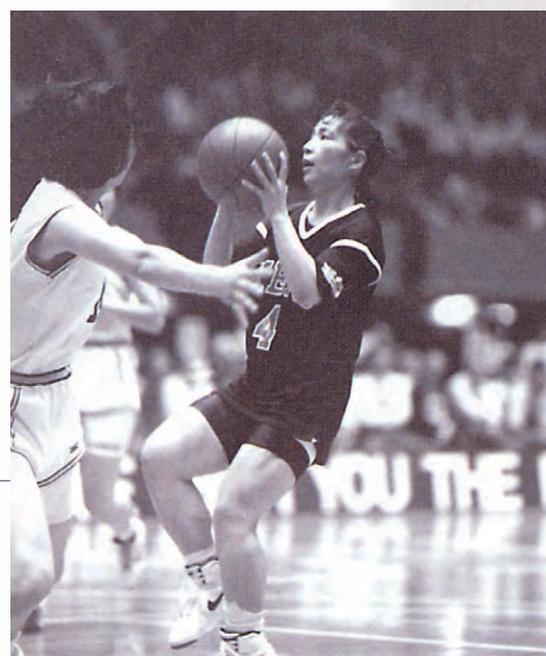
創部75周年という節目にこのような寄稿の機会を頂き、現役当時のたくさんのご支援に感謝するとともに、改めまして、諸先輩方が築き上げてこられた伝統ある部の一員となれたことを、誇りに思います。

末筆ながら、慶應義塾体育会バスケットボール部の益々のご発展をお祈り申し上げます。

久保 陸江 松井 恵子 錦織 由紀子



#4久保 #6井端 #5松井



主将 久保睦江

93年メンバー

部 長	新田 敏
監 督	立花 雅男
コ ー チ	奥山 幹雄、喜多 慎一
トレーナー	山内 賢
主 将	久保 睦江（雙葉）
選 手	松井 恵子（慶應義塾女子）、錦織（井端）由紀子（昇華学園）

1993年の出来事

- ・ EC統合市場発足（1/1）
- ・ 朝鮮民主主義人民共和国、拡不拡散条約脱退表明（3/12）
- ・ 皇太子殿下・雅子様「結婚の儀」（6/9）
- ・ 北海道南西沖地震M7.8（7/12）
- ・ 細川・非自民連立内閣発足（8/9）
- ・ 冷夏でコメ緊急輸入

主な大会

大会名	優勝チーム
・ 第45回インカレ（男子）	日本大
・ 第40回インカレ（女子）	愛知学泉大
・ 第69回ALL JAPAN	いすゞ自動車
・ 第17回ユニバーシアード （バッファロー）	アメリカ
・ 第17回アジア選手権（ジャカルタ）	中国

1994

topics

3年ぶりに2部リーグへ

男子

Data

慶早戦	○ K62 - 60W ●
慶関戦	2勝
トーナメント	ベスト16 (54 - 61中央)
リーグ戦	2部 3位 (9勝5敗)
インカレ	ベスト16 (65 - 71京都産業)



日吉にて男女集合写真



日吉記念館にて



久保田・中野・桑野・鈴木

「受け継がれる伝統」 久保田 堅介

慶應義塾体育会バスケットボール部創部75周年の節目に当たり、1995（平成7）年卒業生を代表して、心よりお慶びそしてお祝いを申し上げます。

振り返れば、我々が卒業して早12年が経ち、時間の過ぎる速さに驚くと共に、我が部の伝統を受け継がれながらも着実に進歩を遂げ、2004年には45年振りのリーグ戦並びにインカレ王者となる快挙を達成したこと、OBとして大変感慨深く思っております。

私が主将を務めさせて頂いた時代は、慶應湘南藤沢が設立してまだ2年目、AO試験が軌道に乗り切っておらず、また指定校推薦を含めて、有望な選手を取る素地が出来ていない時代でした。

我々の代の前後を見渡すと、2つ上の阿部 理先輩が、唯一日本代表に選出される逸材でしたが、基本的に当時の本塾は今と違って、高校から鳴り物入りで入部する選手が極めて少ない時代でした。

即ち、他の強豪チームに比べて、技術的にも体力的にも劣っている中、どうやって試合に勝つかが最大の課題であり、それを克服する為に、当時の監督であった伊東先輩が打ち出した方針が、「頭を使ったバスケット」でした。

当時は、監督を始めとする指導者は、会社に勤めながら週末・休日の練習・試合に顔を出して頂いており、平日は、最上級生から学生トレーナー・主務を選出し、彼らが主体となって練習メニューや練習試合・合宿を組む体制をとっており、選手と共に学生自ら考えるバスケットボールに取り組んでいました。

夏の合宿には、故Stu Inman氏を米国から迎え入れ、本格的な考えるバスケット、理論的なバスケットを伝授して頂き、それに本塾の伝統であるディフェンスを強化、また個々人の能力のみに頼ることなく、チーム一丸となって試合に臨む、そういうバスケットを目指しました。

素人目から見ると派手さがなく、面白みに欠けるバスケットだったかもしれません。

しかしながら、我々のバスケットは、強豪チームが持っている運動能力やセンスを克服して勝つ為に、福澤先生が指針

とした「独立自尊」の精神で、学生自ら考え、チーム一丸となって組織的に、頭を使って、粘り強いディフェンスを地道に行うことで、勝機を見出していくものでした。

我々が取り組んできたバスケットを振り返ると、社会人としても必要不可欠な要素が幾つもあり、本塾バスケットボール部が受け継いでいる伝統というものが、いかに普遍的なものであるかを感じ、また誇りに思う次第です。

時代というものは、その時代を生きる学生が作っていくのですが、一方で伝統は、長年の歴史から培われた普遍的なものであり、それを融合させながら、本塾バスケットボール部が新たな時代を築いていって頂きたいと願っております。



94年メンバー

部	長	新田 敏
監	督	藤田 晃
H・コーチ		金子 健史
コ	ー	チ 宮幸 朗
主	将	久保田 堅介 (NY・ライ)
主	務	白木 猛 (麻布)
選	手	鈴木 仁 (藤沢西)、魚住 剛一郎 (慶應義塾)、桑野 貴輝 (千葉)、梅谷 賢三 (武蔵)
学生スタッフ		宮本 充 (慶應義塾)、中野 孝仁 (慶應義塾)、門脇 健 (慶應義塾)、淵田 徹也 (慶應義塾)

女子

Data

慶早戦	● K39 - 65W ○
トーナメント	3回戦 (28 - 86法政)
リーグ戦	3部 Aブロック3位 (5勝2敗)
帝塚山戦	2勝
六大学対抗戦	4位 (2勝3敗)



過渡期 西堀（佐藤）明美

前年度より常勤のコーチが不在となり、未来の男子チーフコーチに練習を見ていただく事になった。

今まで馴染んできたシステムバスケットから、自由なプレーの中にシステムを入れて試合・練習に臨めるようになった。このプレースタイルは選手の能力をより引き出せるものであったが、そこに至るまでの問題点も多々あった。

私は、選手には自覚をもち、体育会の一員としてだけではなく、私生活でも自分で判断する力を持ってもらいたかったし、自由にやって欲しいと願っていた。授業の参加も自分で判断し、練習に参加できるよう工夫する事もそのひとつであった。

だが、選手の大半は、授業と練習の両立が上手くできず、選手が集まらない自主練のような状態になってしまい、大変困った。時間が無いのを承知の上で、しばらく様子を見ていたが、痺れを切らしたある選手が、「バランスを保つように」と皆に伝えてくれたので、メンバーが揃うようになった。

そして、春の大きな舞台である慶早戦に照準をあて、作戦も我々で考え、どうやって戦っていくかを考えた。「時間をたっぷり使って得点を低く抑えたい」ということを考えたが、キープ力も無い我々がどうやってそんな事ができるのか。結局、試合直前で「普段のプレー、我々の力をぶつけよう」ということになり、皆一生懸命目的に向かって練習した。

結果は最低であったが、選手の気持ちは1つになり、自分達なりに挑戦できたと思う。

試合後、早稲田の選手にアタマを下げながら、「終わった」と、同時に「後輩たち、ありがとう」と、涙を流した。

秋のリーグ戦では下級生の健闘が光り、苦しみながらも順調に勝ち進み、間もなく優勝がかかっている大事な都留文科大学との試合となった。個人的には異常な疲れと、前日の試合後のリフレッシュが上手くできなかったため、かなり重い体で試合に臨んだ。都留文科大の早いペースについて行きながら、何とか順調に滑り出した。しかし、私は膝の靭帯を損傷してしまった。最悪である。しかも、コートの外に出そうとしている後輩たちに、「ちょっと触らないで!お願い、待って!」と、コート内でうずくまる始末。これにはコーチも唾然としたに違いない。のたうち回るアザラシのような私のために、タイムアウトを1つ使ってしまったのだから。痛みが引いた時には、皆やたらにさわやかな顔になっていて、「明美なしでやってやろう!」という気持ちが、伝わってきた。実際、試合は、下級生の大活躍により快勝した。

結果として、コートでうずくまっても、よかったようだった。私は、その後の練習も出来ない状態になり、勿論試合なんてもっての他だった。しかし、「試合はできる」と各選手には言い聞かせていた。その後の試合は、糸が切れたようにみながバラバラになり、3部残留という結果になってしまった。

大学1年目のシーズン後、体が思うように動かず、その状態で皆をまとめるという事が、私にとって非常に困難であった。プレーでダメならメンタルで、という気持ちも上手くかみ合わず、チームだけでなく上級生すらもまとめる事が出来なかった事は、大変申し訳なかったと思う。それでも、常に私の傍に居てくれた主務の入江佐知代、下級生を上手くまとめ必死について来てくれた丸山規子をはじめ、後輩たちには感謝している。

今思うと、このときは過渡期であったと思う。試行錯誤しながら、次の女子大バスケットにつなげていくための大事な時期であった。あの時の経験が、10年経った今、それぞれの場所で生かされ、笑顔で暮らせていると信じている。



94年メンバー

部 長	新田 敏
監 督	立花 雅男
コ ー チ	喜多 慎一
A・コーチ	田中 崇賛
主 将	西堀 (佐藤) 明美 (慶應義塾女子)
主務兼選手	山内 (入江) 佐智代 (大分舞鶴)
選 手	加納 (伊藤) 秀美 (浦和一女)、北村 文乃 (慶應義塾女子)

1994年の出来事

- ・ロスアンゼルス市中心にM6.6の大地震 (1/17)
- ・リレハンメル冬季オリンピック開催 (2/12~)
- ・中華航空機着陸失敗、名古屋空港264人死亡 (4/26)
- ・羽田内閣総辞職、自・社・さがけ連立内閣で村山首相に (6/30)
- ・女性宇宙飛行士、向井千秋さんがコロンビアで宇宙へ (7/8)
- ・関西国際空港開港 (9/4)
- ・北海道東方沖地震 (M7.9)、16人死亡183人負傷 (10/4)
- ・大江健三郎氏、ノーベル文学賞受賞 (10/13)

主な大会

大会名	優勝チーム
・第46回インカレ (男子)	拓殖大
・第41回インカレ (女子)	愛知学泉大
・第70回ALL JAPAN	松下電器
・第12回世界選手権 (トロント)	アメリカ



topics

1995

男子

Data

慶早戦	● K56 - 59W ○
慶関戦	2勝
トーナメント	ベスト16 (対拓殖)
リーグ戦	2部 5位 (5勝9敗)
インカレ	1回戦 (60 - 84福岡大)

Never give upとChallenge精神で戦った1年

私達の代は、全員で7名だった。私と岡本、堤の3人がプレーヤーで残り、江角はトレーナー、白木は主務、津田は関東学連委員長、柳田は志木校コーチとしてそれぞれ役割があった。特別仲のよい学年ではなかったが、ここ一番のまとまりはあると思っていたし、それは今でも変わらないことである。

当時のチームは、慶早戦勝利、トーナメントベスト8以上、リーグ戦一部復帰、インカレベスト8以上という4大目標を掲げていた。チーム平均身長180cm(最長者190cm)の小柄な戦力を補うために、ハンズアップによるディフェンスの強化と3メンによる走り込み、慶應伝統のモーションオフENSEの反復練習等など、激しい練習により故障者も増え、春のシーズン当初には、ただでさえ少ない15、6人のプレーヤーが、10人程になったこともあった。

迎えた慶早戦、下馬評では若干早稲田有利であったが、前半はよく踏ん張り2点リードで折り返すも、終盤逆転され3点差で惜敗した。続くトーナメントでは、ベスト8をかけた試合で、昨年度インカレ優勝の拓殖大に惜敗した。早くも目標の半分が達成できない厳しいスタートとなったが、それでもシーズン終盤にはチームとしてのまとまりも見えてきた。秋に望みがつながる終わり方ができたと思った矢先、戦力であった選手が、「歌手になりたいので部を辞める」と言ってきた。整いかけた戦力が、また崩れるという窮地に追い込まれた。しかし、米国のインマン氏の指導のもと、大和証券合宿所での厳しい合宿を経て臨んだ秋のリーグ戦では成果があり、3週を終えて6戦全勝と幸先のいいスタートがきれた。「この調子でいける」と意気込んでいたのだが、上位校とあたる4週目から負けが込みはじめ、5週目を終えて早くも1部復帰の可能性が消えてしまった。

第6週の早稲田戦を終えた後、当時のスタッフ、藤田監督(S50年卒)、湯浅コーチ(H4年卒)、そして江角、岡本と私の5人で食事に行ったことがある。その時、チームの不振に対して不満が一気に吹き出た。練習にあまり来てもらえないスタッフへの不満、4年生が少なく下級生に頼らなければならないチーム事情、加えて平均身長180cmの戦力では、自分達の力だけでは限界があると感じていた。そういった感情が極まって、監督、コーチに対して罵声を浴びせてしまった。主将としての責任が問われた時であった。

卒業後私は、地元に戻って小学校でミニバスを教える立場になった。ところが、仕事の関係でどうしても練習に行けな

陶山 和秀

いことがあり、それが続いた時期があった。その時、子供から次のような手紙をもらった。「自分たちだけでは強くなれません、練習にきてください・・・」と。子供たちは、私が練習に行けない間も、強くなろうと必死に練習していたのだ。

指導者の立場になって気付いたことだが、たしかに現役当時の私達のチームは、練習を毎日見てくれるスタッフがいて、毎年優秀な選手を集められるチームに比べたら、恵まれた環境ではなかったかもしれない。しかし、与えられた環境のなかで成長できるのが、一流の選手であり一流のチーム(小学生にこれがあてはまるかは疑問であるが)のはずである。これまでの慶應バスケット部は、まさに一流であったし、私達もそれに負けず劣らず一流を目指して練習していたはずだ。

当時私達は、残りのシーズンで目標を達成すべくチーム一丸となった。プレーについて激しく言い争うこともあったが、それほど必死だった。しかし、結局、最後まで掲げた「4大目標」を達成することはできなかった。常に走りつづけた1年だったが、振りかえてみると、目標に向けて切磋琢磨し、苦しみながらも最後まで全力を尽くし戦ったことは、まさに"Never give up & Challenge spirit(精神)"であったのではないかと思う。

私達の代は、戦績こそ輝かしいものではなかったが、卒業して10年経つ今でもその頃のチームのことを誇らしく思っている。慶應バスケット部での経験と学んだ精神は、私にとって大きな自信とパワーの源になっている。そして、指導者としてこの精神を、子供たちに伝えていきたいと思っている。

95年メンバー

部	長	新田 敏
総	監	伊東 弘泰
監	督	藤田 晃
H・	コ	金子 健史
コ	ー	加藤 賢治、湯浅 光則
主	将	陶山 和秀(松江北)
主	務	白木 猛(麻布)
選	手	岡本 喜久治(山口)、堤 浩(慶應義塾)
学生スタッフ		江角 和俊(松江北)、津田 豪造(桐光学園)、柳田 博(慶應義塾志木)



女子

Data

慶早戦 ● K52 - 76W ○
トーナメント 3回戦 (46 - 76杉野女子)
リーグ戦 3部 (5勝2敗)
六大学対抗戦 2勝3敗 (4位)

95年メンバー

部	長	新田 敏
監督	辻 瞭二、立花 雅男	
コーチ	岩井 博	
P・トレーナー	山内 賢	
トレーナー	杉山 泰	
主将	丸山 規子（慶應義塾女子）	
選手	鹿内 植（慶應義塾女子）	

1995年の出来事

- ・阪神淡路大震災（1/17）
- ・地下鉄サリン事件発生（3/20）
- ・警察庁長官狙撃事件（3/30）
- ・統一地方選で東京は青島氏、大阪は横山氏の無党派知事が誕生（4/9）
- ・オウム真理教の教祖、麻原彰晃こと松本智津夫逮捕（5/16）
- ・野茂英雄選手が米大リーグ新人王に（11/9）

主な大会

大会名	優勝チーム
・第47回インカレ（男子）	日本大
・第42回インカレ（女子）	日体大
・第71回ALL JAPAN	いすゞ自動車
・第18回ユニバーシアード（福岡）	アメリカ
・第18回アジア選手権（ソウル）	中国

1996

topics

- ・慶早戦、通算成績五分ならず（26勝28敗）
- ・インカレ7年連続出場

男子

Data

慶早戦	● K75 - 91W ○
慶関戦	2勝
トーナメント	ベスト16 (55 - 78専修)
リーグ戦	2部4位 (8勝6敗)
インカレ	ベスト16 (66 - 97青山学院)



定期戦の雪辱、リーグ戦早稲田から2勝!
 (後列左から) 久能木・末次・松本・岡部・今村
 (中列左から) 磯川・鈴木・柳・落・秦野
 (前列左から) 浅田・金子・小森・伊東・玉井



リーグ戦早稲田戦の祝勝会

卒業して8年、いま思うこと 小森 雄介

卒業して8年になりますが、未だにバスケットボールとは縁を切ることが出来ず、膝を痛めながらも毎週末、会社の部の練習場で汗を流しております。

私が塾バスケットボール部に入部したきっかけは、何と言っても梅谷賢三さん(平成7年卒)の存在です。同じ武蔵中学・高校の2つ歳上の先輩であった梅谷さんから誘われ、「よし、俺もやってやろう」と思い入部したわけです。しかし、怠惰な浪人生活を送っていた私にとって、初日の練習はキツかったことキツかったこと、想像以上でした。3メンの途中だったでしょうか、あまりのキツさに、昼間二幸食堂で食べたカレーライスが胃袋の中で踊りだし、ついには……。同じ学年で塾高出身の伊東 大輔君、成城学園出身で東京都選抜だった金子甲二郎君らが、平気な顔をして走っているのを見て、「この先、本当にやっていけるのか」と、かなりショックを受けたことを今でも鮮明に覚えております。

そんな私でも、何とか4年間やれたのは、「『勝つ』ために、何が必要か?『勝つ』ために、自分自身何をすべきか?」を、常に考えて行動する塾バスケットボール部の理念に心底共感し、自分なりに実践できたからだと思っています。「自分の役割」と口で言うのは簡単ですが、それを4年間全うするのは、非常に難しいことでした。私が4年生になり、新チームとして走り出してまだ間もない頃のことです。練習後、同じ学年のスタッフ陣(田中君、平野君、村石君、磯山君、山川君)に、私達プレーヤー4名(伊東君、金子君、浅田君、私)が、ヒヨウラ(日吉の裏側)の喫茶店に呼び出され、「最上級生としての役割を、もっと自覚して欲しい」と、厳しく叱責されたことがありました。「やってるつもりだった」、私達プレーヤーにとってはかなり応えましたが、いま思えば、何でも言い合える雰囲気があったからこそ、学生主導のチームとして他大学と互角に戦えたのだと思います。学生スポーツである以上、その年々でチーム事情は様々で、勝ったり負けたりというのはつきものですが、それはあくまで結果の話。その「過程こそが重要」だという点が、今も変わらないと信じています。目に見えない部分で、永年脈々と培われてきたこういった伝統は、時間が経っても色褪せるものではありませんし、私も卒業生の一員として、今後とも是非大切にしていきたいと願っています。現在、高校生のリクルーティングで、少しお手伝いをさせて頂いておりますが、「現役チームが、どんなに多くの諸先輩の方々に支えられて成り立っているのか」、卒業して初めて分った部分もたくさんあります。微力ではありますが、今後も「自分の役割」を認識し、陰ながら塾バスケットボール部に貢献していければと考えています。



夏合宿にて(名古屋・三菱電機体育館)



卒業旅行(ハワイ)
山川・金子・磯山・田中・小森・平野・村石・伊東・浅田

96年メンバー

部	長	新田 敏
監	督	加藤 賢治
H・	コーチ	湯浅 光則
コ	ー	チ
主	将	小森 雄介(武蔵)
主	務	平野 良三(慶應義塾)
選	手	伊東 大輔(慶應義塾)、浅田 靖隆(慶應義塾NY学院)、金子 甲二郎(成城学園)
学生スタッフ		田中 崇賛(姫路西)、磯山 弘典(慶應義塾)、村石 修哉(慶應義塾)、山川 茂久(東大教育学部附)

女子

Data

慶早戦	● K59 - 66W ○
帝塚山戦	2勝
トーナメント	1回戦 (41 - 54創価)
リーグ戦	3部7位 (7勝2敗)
六大学対抗戦	4位 (2勝3敗)



'96年リーグ戦終了後(日記記念館)
市田・野沢・樋口・益田・圓花

記念館での思い出 圓花 隆子

創部75周年おめでとうございます。

久々に当時を振り返りますと、おそらく今でも皆と笑って話せるであろう情景が、思い出されます。ひとつは、恐怖の“ハンズアップ”、コーチの指差す方向へ全員でディフェンスする練習なのですが、この光景の不自然さと、究極の筋肉疲労のために込み上げる複雑な心境は、皆にとっても忘れ難いものに違いありません。しかし、この練習が、当時のチームスタイルを形作ったのだらうと思います。もうひとつは、夏合宿の朝食“まんぷく弁当”で、その名にふさわしく揚げ物・炒め物と御飯の有り難い大盛りお弁当です。先輩から選んでいき、同期は食傷気味の胃に少しでも優しいものを求め、ジャンケ

ンで争奪するというものでした。もしかして、一日の中で最も白熱したひとときだったのかもしれません。

多くの試合もさることながら、銀杏並木を幾度となく往復し、共に励んだ練習の日々を、素晴らしい先輩方や頼もしい後輩達、そしていつも大らかに助けてくれた同期と共有できたことを、心から嬉しく思います。

監督・コーチ・大学男子部・諸先輩方のご尽力の賜物として、大学女子部現役が、恵まれた環境で練習させていただいたことを、心より感謝しております。そして、現役と現役を支える方々が築かれた75年に、さらなる次代の発展が加えられますことをお祈りしています。



'96年夏合宿(福島県猪苗代)

'96年練習終了後(日吉記念館)
樋口・圓花・市田・野沢・益田

96年メンバー

部 長	新田 敏
監 督	辻 瞭二
コ ー チ	岩井 博
主 将	圓花 隆子(彦根東)
主務兼選手	樋口(広瀬)美佳(札幌旭丘)
選 手	野沢 久仁子(慶應義塾女子)、市田(川崎)由紀子(八王子東)、 益田 英子(慶應義塾NY学院)

1996年の出来事

- ・三菱銀行と東京銀行が合併、東京三菱銀行が発足(4/1)
- ・オウム松本被告公判スタート(4/24)
- ・堺市で腸管出血性大腸菌O-157による集団食中毒が発生(7/13)
- ・アトランタオリンピック開催(7/20~)
- ・ペルー日本大使館公邸襲撃事件発生(12/17)
- ・英、狂牛病騒動

主な大会

大会名	優勝チーム
・第48回インカレ(男子)	日体大
・第43回インカレ(女子)	愛知学泉大
・第72回ALL JAPAN	松下電器
・第26回オリンピック(アトランタ)	アメリカ

1997

topics

- ・ 8年ぶりにインカレ出場権を失う！
- ・ 第1回慶應義塾 関西大学（女子）定期戦

男子

Data

慶早戦	● K63 - 74W ○
慶関戦	1勝1敗
トーナメント	ベスト16 (71 - 82順天堂)
リーグ戦	2部5位 (7勝7敗)
インカレ	不出場



慶早戦開会式



三田中庭にて



バスケットボールから学んだ事 磯川 哲司

慶應義塾体育会バスケットボール部に、小学5年から大学4年まで12年間在籍し、卒業してから7年が経ちました。現在は、仕事の関係もあり、なかなか試合を見に行く事ができませんが、大学時代の同期とメールの交信や食事会などで、会場の雰囲気や試合結果などを聞いて一喜一憂しております。試合会場に行く事は出来ませんでした。大学日本一という今年の活躍ぶりを聞き、インカレのDVDを2枚(青山学院戦と専修戦)購入しました。そして2004年度末に、同期の今村君・桐本君と忘年会を兼ねて鑑賞会を行いました。久しぶりの大学バスケットボールの試合に興奮し、夜遅くまでお酒を交わしつつ、当時の事をあれやこれやと語り合いました。

私自身のことで一番印象に残っている出来事は、大学4年の一番大切な時期に膝を壊してしまい、チームメイトに迷惑をかけてしまった事です。膝の手術をすると、リハビリなど定期的にそのシーズンが絶望的だったため、内視鏡検査だけにして、膝のまわりに筋肉をつけてプレーする決断をしたのです。しかし、リハビリが終わって初日の練習で、怪我が再発してしまいました。2度目のリハビリが長引いていた時に、当時のコーチであった湯浅さんに「おまえ自身が、選手としてプレーするのはもう無理だ。これからは、自分に出来る仕事をしろ!」と、強く言われた事がありました。その時私は、選手としてまだ出来ると思っていた事もあり、悔しくて涙を流した事を覚えています。今からリハビリを再開しても、リーグ戦前に復帰する事は絶望的だと感じていましたが、気持ちの踏ん切りがつかなかったのです。慶應義塾体育会バスケットボール部は、常にチームの事を考えて行動する事が当たり前でしたが、この湯浅さんの一言があって初めて気持ちがふっさきて、「チームの勝利のために、今自分に何が出来るのか?」を、真剣に本気で考えるようになった気がします。

私達の代は、試合に出続けるような目立った選手がいる訳でもなく、たいした戦績も残せませんでした。しかし、人生の中で自分自身を、もっとも成長させてくれた4年間であったと感じております。そして、社会人になった今でも、勝利という目標のためではありませんが、「今、自分に何が出来るか?」という理念を、相変わらず大切にしております。



今村友行



三田旧図書館前にて

97年メンバー

部	長	新田 敏
監	督	加藤 賢治
H・	コーチ	湯浅 光則
コ	ー	チ 久保田 堅介
主	将	磯川 哲司(慶應義塾)
主	務	林 昌紀(慶應義塾)
選	手	今村 友行(慶應義塾)、桐本 雄美(麻布)
学生スタッフ		杉山 素(慶應義塾)、田中 洋介(慶應義塾)

女子

Data

慶早戦	● K41 - 67W ○
トーナメント	3回戦 (40 - 97大妻女子)
リーグ戦	3部7位 (7勝2敗)
帝塚山戦	1勝
慶関戦 (第1回)	2敗
六大学対抗戦	2勝3敗



'97年 慶早戦開会式

丸山 慶子

卒業してから、10年の月日が経ちました。大学バスケットボール部の思い出…、何を書いたらいいものかと、悩んでしまいました。しかし、バスケットボール部時代のことを思い出していくうちに、頭の中で色々な出来事が、鮮明に蘇ってきました。

私は、小学校5年生から大学まで、バスケットボール部に12年間所属していました。学生時代の半分以上を、バスケットボールに費やしたことになります。辛いことや、バスケットボールをやめたいと思ったことも何度もありましたが、そのたびに、改めてバスケットボールの魅力に気づいて、続けてきたことを思い出します。バスケットボールと出会っていなかったら、今の自分がないと言っても、過言ではないのかもしれませんが。

バスケットボールは、5人でやるスポーツです。しかし、交代選手を含めると5人だけでは、成り立たないスポーツといっただいでしょう。私たちの学年は、3人と少ない人数でしたので、学年関係なくコミュニケーションを大事にし、チームワークを重要としてきました。

それほど強いチームではありませんでしたが、チームワークとバスケットボールに対する意気込みは、どこのチームにも劣らなかったと思っています。

現役時代は、気がつけば記念館にいました。たくさんバスケットボールの話をして、たくさんバスケットボールのことを考えていました。女子部のあとに練習をしていた男子部の練習が終わっても、まだなお、記念館で話をしていたことが思い出されます。おそらく、あの頃は、家族以上に一緒にいた時間が長かったのではないのでしょうか。それぐらい、チームワークを大切にしていました。

さらに、今思えば、格上相手の早稲田大学や法政大学（現役時代は、勿論そんなことは思っていませんでした）、リーグ戦で2部に上がった拓殖大学にも、前半戦は、競った試合が出来ていました。結局は敗れてしまいましたが、勝ちたいといった気持ちは、負けていなかったと自負しています。

バスケットボール部は、様々な人との出会いを与えてくれて、勝つという喜び、負けるという悔しさ、継続して練習することの大切さ、チームワークの重要性など、人が生きていく中で学ばなければならないことを、教えてくれたと思います。なにより、貴重な時間を一緒に過ごした千暁と真帆に出会えたことに、感謝したいです。



'97年メンバー、#4丸山、#5原、#6黒田



'97年3月 部室にて



'97年2月 春の練習 記念館にて



記念館練習後

97年メンバー

部 長	新田 敏
監 督	辻 瞭二
コ ー チ	岩井 博
主 将	丸山 慶子 (慶應義塾女子)
主務兼選手	伊藤 (黒田) 真帆 (国際)
選 手	原 千暁 (慶應義塾NY学院)

1997年の出来事

- ・消費税率増税実施、5%に (4/1)
- ・ペルー日本大使館公邸に特殊部隊突入、人質全員解放 (4/22)
- ・神戸の小6男児殺害事件で中3少年を逮捕 (6/28)
- ・香港、中国へ返還 (7/1)
- ・ダイアナ元英国皇太子妃がパリで事故死 (8/31)
- ・地球温暖化防止京都会議で京都議定書採択 (12/1)

主な大会

大会名	優勝チーム
・第49回インカレ (男子)	日体大
・第44回インカレ (女子)	愛知学泉大
・第73回ALL JAPAN	いすゞ自動車
・第19回ユニバーシアード (シシリー)	アメリカ
・第19回アジア選手権 (リヤド)	韓国

1998

topics

第21回関東男子学生新人戦8位

個人賞 3ポイント&アシスト王 米本聡君(2年)、
得点王 長岡岳君(2年)

第32回関東女子学生選手権 12年ぶりのベスト16

男子

Data

慶早戦	○ K73 - 66W ●
慶関戦	2勝
トーナメント	ベスト16 (72 - 82専修)
リーグ戦	2部 3位 (8勝6敗)
インカレ	2回戦 (66 - 79大東文化)



日吉記念館での練習

伝統と思い出 柳 博之

我々平成11年卒組は、入学当時20名近くが入部した。ところが、入部してすぐに行われる恒例の花見大会終了後の練習時には、その半数は姿を消し、その後も1人また1人と姿を消した。卒業時には、玉井・江原・久能木・柳の4名になっていた。

「それだけの厳しい練習をしてきたんだなあ」と、今更ながら当時を振り返る。中でも、シーズンを通して行われるディフェンスのファンダメンタル練習や、1本目から全力で走らなければやり直しさせられる3往復半×10本のインターバルは、今考えただけでも、乳酸が体にたまってきそうになる。また、フレックス・オフense、ウィークサイド・オフenseといったスクリーンを多用するプレーも、慶應の伝統的スタイルとして多くの時間をかけて練習した。入学当時は、「こんなに組織プレーが決められていたら、自分のプレーが出来なくなる・・・」と思いつつも、3・4年生時には、完全にその色に染まった。そして、当時の自分と同じように思っている1・2年生を、自然と指導するようになるのだから、それだけ伝統的スタイルとして確立しているものだったと強く思う。そして、45年ぶりのリーグ戦優勝は、そうして受継がれた伝統と現役学生個々の優れた能力が融合した素晴らしい結果だと思う。本当におめでとうございます。

学生時代に話は戻るが、練習後の「ヒヨウラ(日吉裏)」での食事も、忘れることが出来ない。バリエーションは少なかったが、「とらひげの唐揚げ定食」や「ブルベアのミートドリア」、「しっぽとらのチキンライス」など、学生街ならではの味とボリュームであった。北海道から上京して一人暮らしだった自分には、無くてはならない存在であった。今もまだ、それらの店のメニューは存在しているのだろうか、機会があればヒヨウラを、もう一度散策してみたいと思う。

それから、本格的なウェイトトレーニングや、辻秀一先生によるメンタルトレーニングを取り入れ始めたのも、我々が現役学生の頃だと記憶している。今までにない角度から、バスケットボールという競技を捉えて、最新のテクニクを取り入れながら練習をし、そうした事の積み重ねで勝利しようと努力していた。(今考えるとウェイトトレーニングは、ちょっと間違った取り入れ方をしていたと思うが・・・)

最後に、こうして振り返ってみると、その全てが良い思い出であるし、少なからず今の自分に影響を与えている。今後

も自分が体験した慶應義塾体育会バスケットボール部の伝統が、新しい時代の力によって進化しながら、受継がれていくようにと強く思う次第である。



日吉記念館前にて

98年メンバー

部	長	新田 敏
総 監	督	奥谷 忍
監	督	加藤 賢治
コ ー チ		湯浅 光則
A コ ー チ		宮本 充
主 将		柳 博之(札幌南)
主 務		久能木 大輔(立教)
選 手		玉井 忠博(市川)
学生スタッフ		江原 潤(慶應義塾)、鈴木 剛(慶應義塾NY学院)、白木 博隆(慶應義塾)

女子

Data

慶早戦	● K37 - 99W ○
トーナメント	ベスト16 (65 - 106日本女子体育)
リーグ戦	3部7位 (5勝3敗)
慶関戦	1勝1敗
六大学対抗戦	3勝2敗 (3位)



『勝つということ』 岸本 佳代子

大学4年の春、私たちは格上の東海大学に勝ち、関東女子ベスト16となった。

もちろん2部のチームに勝つのは、4年間で初めてのこと。この勝利は、私達にたくさんのことを教えてくれた。

当時、部員は9人。歴代稀にみる少なさで、我がチームはスタートした…。

4年生だった孝子・すみ・そして佳代がこだわったこと。それは、“変える”ことだった。2・3年ではいなかった「毎日練習を見てくれるアシスタントコーチ」を、お願いしたこともその一つ。

選んだことを成功にするか否かは、自分達次第。3部リーグ止まりの、決して強いとはいえない今のチームの何かを変えること、そこから私たちの春は始まった…。

“悔いの残らない最高のシーズンにするために…”

だが、なにせ人数が少ない。紅白戦もままならない練習で、いったい何ができるのか？

スーパースターがいるわけでもない、特段大きな選手がいるわけでもない。だから華麗なプレーは求めない、だが“泥臭くてもいい”ゴールを決めることにこだわった。

そして、粘りのあるディフェンスで相手の点を最小限に抑え、ルーズボール・リバウンドで、確実にボールを集めること。それが戦術の基本となった。

また、チームメイトは少なかったが、それゆえのまとまりもあった。バスケの話はほどほどに？恋愛話から好きなチョコの話まで、日々ガールズトークに花を咲かせた。出身も、育った環境も違う人達が、同じバスケットで繋がり、“2部昇格”の同じ目標を追いかける。心の距離が近づくのに、そう時間はかからなかった。

チームが軌道に乗り出した頃、迎えた春のトーナメント戦。

相手は2部リーグの東海大学。もちろん格上。3ポイントを確実に決めるガードが数人、たしかそこを抑えることに重点を置いた記憶がある。そして今でも忘れられない、試合が始まる前の異様な一体感。コーチ陣そして選手達は“勝つ”という目標に向かって一つになっていた。

“無我夢中”。“どれだけ点差を付けられても、大丈夫。追いつける…”変な自信もあった。

試合終了の笛が鳴ったとき、私たちは勝っていた。

“勝つということ”は、色んなものに答えを出してくれる。この体制もやり方も、間違っていなかった…。そう教えてくれた。何より、「挑戦することで願いは叶う」ということを、教えてくれた。

私たちの1年は、“2部昇格”という夢は成しえなかったものの、2部チームに勝利という結果を残して幕を閉じた。

監督の濱中さん、コーチの岩井さん、そしてA・コーチの鈴木さん、そしてチームメイトに感謝。バスケットを通じて“人生の友”と“最高の思い出”を得ることができた…。



98年メンバー

部 長	新田 敏
監 督	濱中 貞一
コ ー チ	岩井 博
A・コーチ	鈴木 剛
主 将	岸本 佳代子 (岸和田)
主務兼選手	浅海 孝子 (慶應義塾女子)
選 手	桂 純子 (慶應義塾NY学院)

1998年の出来事

- ・長野冬季オリンピック開催 (2/7~)
- ・明石海峡大橋が開通 (4/5)
- ・インド核実験を再開 (5/11)
- ・パキスタンがインドに対抗して核実験 (5/28)
- ・北朝鮮のミサイル「テポドン」が三陸沖に落下 (8/31)
- ・長銀が国有化で事実上破綻 (10/23)
- ・プロ野球の横浜 (ベイスターズ) が38年ぶりの日本一 (10/26)

主な大会

大会名	優勝チーム
・第50回インカレ (男子)	日体大
・第45回インカレ (女子)	愛知学泉大
・第74回ALL JAPAN	いすゞ自動車
・第13回世界選手権 (アテネ)	ユーゴスラビア



1999

topics

「関東大学バスケットボール連盟」に改称
 第39回関東大学新人戦 6位
 個人賞 3ポイント王 高橋恒太郎君（2年）、
 リバウンド王 佐藤健介君（1年）

男子

Data

慶早戦	○ K80 - 65W ●
慶関戦	2勝
トーナメント	ベスト16 (61 - 74大東文化)
リーグ戦	2部 2位 (10勝4敗)
	入替戦残留 (70 - 95日本大)
インカレ	2回戦 (65 - 81京都産業)

●ベストゲーム 落 慶久

この度は、慶應義塾体育会バスケットボール部創部75周年、誠におめでとうございます。

75周年誌の発刊にあたり、私たちの代での思い出・印象に残っている出来事といえば、私の独断ですが、秋のリーグ戦第6週の筑波大との2連戦ではないかと思います。

私たちの代は、12名の大所帯でありましたが、新チームスタート時のミーティングで、2つの事柄をチームのコンセプトとして設定しました。

1. チームメイトを尊敬し、揺るがない信頼関係を築く。
2. 当たり前のことをしっかり、当たり前に行う。

この2本柱を軸に「秋のリーグ戦優勝、1部昇格」を目標とし、日々厳しい練習・合宿を繰り返し、春の慶早戦を制し、秋のリーグ戦も5週目まで8勝2敗の2位で、首位攻防の筑波大との2連戦を迎えました。

筑波大は、スタメン5人及びベンチプレーヤーにも数名高校日本代表を経験したことがある選手を擁し、5週目まで10戦全勝で本塾が1敗してしまった時点で優勝が決まるという状況での2連戦でした。

初戦、本塾は持ち味である厳しいディフェンスから速攻を繰り出し、リードを奪い、上背で勝る筑波大の攻撃を何とか耐え、オフェンスでもポイントを絞り、それぞれの役割をしっかりと選手一人ひとりが認識しながら、試合に出ているメンバーもベンチプレーヤーもしっかりとできることを愚直に実行し、勝利することができました。

この初戦での勝利は、チーム全員(選手、スタッフ)がそれぞれ役割を認識しながら、それを集中力を切らすことなく、それまで春先から繰り返し練習してきた成果がすべて出た結果でした。

第2戦、この試合に勝ち、最終週に2連勝できれば、悲願の1部昇格が決まる大事な戦いでした。出だし、筑波大は前日の敗戦が嘘のようにスパートをかけ、前半終了時には、17点差をつけられるような状態でした。今までなら、この時点で集中力が切れてしまうところでしたが、この試合に関しては、後半スタートの時点でチーム全員が気持ちをリセットし、前日のように、それぞれの役割を愚直に実行し、残り3分までに5点差まで追いつきました。

しかし、無常にも試合終了の笛がなり、結果は10点差の敗戦となってしまいました。

私個人的には、勝った初戦よりも負けてしまった第2戦の方が、くっきりと思い出に残っています。今までのチームであれば、あきらめていたシチュエーションで、4年生だけでなく、

選手だけでなく、スタッフ、観客席で観戦していたメンバーでさえも勝利をあきらめなかった。

その中でプレーしていることに喜びを感じ、身震いしたことを今でも憶えています。

今思えば、私たちの代のチームは、個性と個性とがぶつかり合いながらもそれぞれが、役割を認識し、目標に向かってチーム一丸となった本当にいいチームだったと思います。

結果的には目標は達成できませんでしたが、選手それぞれは色々なものを学ぶことができたはずで。

そのチームの中で、主将を務めさせていただいたのは、私の人生の中で非常にいい経験となったと思います。この1年で悩みながらも学び、仲間と話し、目標に向かって必死に走り続けたこと、このことは間違いなく今日の私の人生に大きく影響を与えています。

社会人となり、その組織の中での自分の役割を認識しながら愚直に実行する。間違いなく塾体育会バスケットボール部での経験が、今の自分を形成しているということが出来ます。

最後に、このような貴重な経験と思い出を作ってくれたチームメイト、それを支えていただいた戸崎監督、宮本ヘッドコーチをはじめスタッフの皆様、応援して下さった諸先輩方に心から感謝の意を表します。ありがとうございました。

今後も慶應義塾体育会バスケットボール部が、一層飛躍することを祈念いたします。

99年メンバー

部	長	井田 良
監	督	戸崎 洋
コ	ー	宮本 充
A・	コ	ー
主	チ	魚住 剛一郎
主	将	落 慶久(秦野)
選	務	三橋 正継(慶應義塾)
	手	一柳 達也(慶應義塾)、岡部 友和(磐城)、椎橋 航一郎(東京学芸附)、末本 裕幸(高松商業)、秦野 修司(大分舞鶴)、松本 直仁(防府)
学生スタッフ		中村 剛士(慶應義塾)、上山 弘修(慶應義塾)、川島 知広(慶應義塾志木)、桃園 秀一郎(慶應義塾)

女子

Data

慶早戦	● K40 - 92W ○
慶関戦	1勝1敗
トーナメント	1回戦 (45 - 77神奈川大)
リーグ戦	3部5位 (6勝3敗)
六大学対抗戦	3位 (3勝2敗)



左から増原裕子、今村彩子、高木淳子

五味 (今村) 彩子

2006年のNCAA (全米大学男子体育協会) バasketボールトーナメント優勝校が、当時私の住んでいたフロリダ州立大学だった。アメリカに駐在員の家族として住んで5年、Basketボールから遠ざかっていたが、駐在最後の年に地元の大学が勝ち進んでいることもあり、久しぶりにTVにかじりついてBasketボールにのめり込むことができた。Basketボールの本拠地アメリカ、しかも男子の大会なので私達のレベルとは桁違いであることは言うまでもないが、彼らが熱くプレイするのを応援しながら、当時の自分達に照らし合わせ、学生時代に懐かしく思いを馳せるよい機会になった。

大学時代の思い出は、喜怒哀楽などそれぞれに枚挙に暇が無いが、最も印象に残っていることといえば、「部員が少なかった」ことであろう。原稿を書くに当たり、同学年の2人に思い出を尋ねてみたところ、真っ先に同じ答えが返ってきた。

私達の代は4年3人、3年3人、2年3人、1年1人の合計10人という小所帯であり、学生トレーナーが不在であった。部員が少ないというのは、チームが一つにまとまりやすい、などのよい点もあるが、何よりも私達の頭を悩ませたのは、少人数でもできる練習を考えることであった。平日の練習は、授業のために遅刻・欠席の選手もいた。10人全員揃うことが滅多に無かったために、練習中は自分の順番が終わった直後にまたすぐ順番が来る…3時間の練習時間だとしたら文字通り、3時間走り通し、という具合で家に帰り着く頃にはクタクタになっていた。しかしそんな中、支えになったのは、OB・OGの方々や男子部のスタッフ陣の協力であった。練習中に5対5をするだけでも部員総出であるため、怪我人がでると5対5もままならなかったが、先輩や男子スタッフのご尽力で何とかゲーム形式の練習をすることができた。私達の代ほど、周りの方々に支えて頂いて成り立っていたチームはないのではないだろうか。練習や試合にお越し頂いたOB・OGの方々からのアドバイスは、それぞれの学生時代のご経験になぞらえたものが多く、ご自身の学生時代に誇りを持っておられていることが伝わってきた。結果としては、2部入替戦出場・2部昇格という目標を達成できず、3部5位という成績に終わってしまった。しかし私達は先輩方同様、部活動で経験した集団生活、けじめ、交友関係などを、今の人生に有効に反映させていると言えるであろう。年を重ねるごとに細かい出来事は忘れてしまうが、全身全霊を掛けて頑張ったことは、私達の自信に繋がっており、仕事や生活の面で多少辛いことがあっても、学生時代を思い浮かべることで自分を励ますことができるのも、部活動の経験のお蔭であろう。

話はNCAAに戻るが、NCAAは全試合をTVで放映しているので、学生スポーツを身近に感じることができる。それらを観戦していて、大学のものとは思えないほど立派な体育館や、地域が一丸となってしている応援など、その1つ1つが日本のそれとは大きな差があることを感じた。アメリカに比べると日本の学生スポーツに対する国民の関心が低いことに加え、Basketボール自体は学校の部活動にはほとんどあるスポーツにもかかわらず、残念ながらそこまで浸透していないのではないだろうか。「こんなに面白いスポーツなのに何故?」と思うのだが、Basketボールのプロリーグもできたこの機会に、今後慶應のBasketボール部、更には日本のBasketボール界全体が発展していくことに期待したい。



増原



今村



引退試合 高木のポストプレー



'99年 六大学対抗戦(引退試合)

99年メンバー

部 長	井田 良
監 督	濱中 貞一
コ ー チ	岩井 博
主 将	五味 (今村) 彩子 (慶應義塾女子)
主務兼選手	鈴木 (高木) 淳子 (慶應義塾女子)
選 手	増原 裕子 (慶應義塾女子)



練習後の風景

1999年の出来事

- ・日本銀行、ゼロ金利政策実施 (3/3)
- ・NATO軍によるユーゴスラビア空爆開始 (3/24)
- ・佐渡トキ保護センターで国内初の人工孵化によるひな「優優」誕生 (5/21)
- ・ソニーが犬に似たロボットAIBOの販売を発表 (6/1)
- ・東海村民間核燃料施設で臨界事故 (9/30)
- ・マカオがポルトガルから中国に返還 (12/21)
- ・世界人口、60億人突破

主な大会

大会名	優勝チーム
・第51回インカレ (男子)	日体大
・第46回インカレ (女子)	愛知学泉大
・第75回ALL JAPAN	東芝
・第20回ユニバーシアード(バルマ)	アメリカ
・第20回アジア選手権 (福岡)	中国